

博士課程教育リーディングプログラム  
京都大学デザイン学大学院連携プログラム

Program for Leading Graduate Schools  
Kyoto University Collaborative Graduate Program in Design

活動報告書（平成 24・25 年度）  
Activity Report (2012.10-2014.3)



## 目 次

デザイン学大学院連携プログラムの活動報告	1
デザイン学大学院連携プログラムに寄せて	3
1. 制度設計	
1. 1 デザイン学プログラム	5
(1) 人材養成の目的	5
(2) プログラムの特長	5
(3) コースワークと学位研究	6
(4) プログラム履修者の募集	8
(5) 博士論文研究基礎力審査 (QE)	8
(6) 学位	9
(7) 科目配当表・履修要件	10
(8) 研究科における修了認定	13
1. 2 各部局での実装	14
(1) 情報学研究科	14
(2) 工学研究科	14
(3) 教育学研究科	15
(4) 経営管理大学院	16
1. 3 プログラム担当者	17
1. 4 デザイン学ユニット	18
2. 履修生	
2. 1 予科生選抜	19
2. 2 本科生選抜	23
2. 3 予科生合宿	24
2. 4 本科生の研究活動支援	24
3. 科目と履修	
3. 1 デザイン学共通科目	29
(1) 講義	29
(2) 実習	31
(3) コミュニケーション科目	33
(4) スキル科目	33
3. 2 デザイン学領域科目	35
(1) 情報学領域	35
(2) 機械工学領域	36
(3) 建築学領域	36

(4) 心理学領域	.....	37
(5) 経営学領域	.....	37
4. 拠点の形成		
4. 1 拠点とその位置づけ	.....	38
(1) センター	.....	38
(2) サテライトオフィス	.....	38
(3) 拠点の名称	.....	38
(4) 拠点開設の手続き	.....	38
4. 2 デザインイノベーション拠点	.....	39
(1) 拠点の概要	.....	39
(2) 施設と設備	.....	39
(3) 拠点の利用	.....	41
4. 3 デザインファブリケーション拠点	.....	42
(1) 拠点の概要	.....	42
(2) 施設と設備	.....	42
(3) 拠点の利用	.....	44
4. 4 サテライトオフィス	.....	45
(1) 伊丹サテライトオフィス	.....	45
(2) 花脊サテライトオフィス	.....	45
(3) 智頭町山形地区サテライトオフィス	.....	45
(4) 博多サテライトオフィス	.....	46
5. イベント		
5. 1 産学デザインシンポジウム	.....	47
(1) 第一回産学デザインシンポジウム	.....	47
(2) 第二回産学デザインシンポジウム	.....	48
5. 2 国際デザインシンポジウム	.....	49
5. 3 サマーデザインスクール	.....	50
(1) サマーデザインスクール実施要項	.....	50
(2) サマーデザインスクール2013	.....	51
5. 4 スプリングデザインスクール	.....	54
(1) International Symposium on Design Visions 2014	.....	54
(2) デジタルデザインワークショップ	.....	55
5. 5 デザインスクール in 沖縄	.....	57
(1) 洋上デザインワークショップ	.....	57
(2) 京都大学－琉球大学合同デザインスクール	.....	57
(3) 参加者の声	.....	58
5. 6 デザインフォーラム	.....	60
5. 7 各種イベント	.....	65

6. デザインイノベーションコンソーシアム	
6. 1 概要	81
(1) 設立の目的	81
(2) 組織	81
(3) 活動内容	82
6. 2 会員	84
6. 3 設立総会	85
7. その他の活動	
7. 1 広報活動	87
(1) ロゴマーク	87
(2) 紙媒体	87
(3) インターネット媒体	90
7. 2 海外調査・交流	91
(1) 米国調査 第一回	91
(2) 米国調査 第二回	91
(3) 欧州調査 第一回	92
(4) 欧州調査 第二回	93
(5) 海外の教育研究機関との交流	94
7. 3 グローバルFD研修	96
付録 1 ポスター・チラシ	98
付録 2 報道	112
付録 3 講演・出版	113
付録 4 海外の教育・研究機関との交流実績	117



## デザイン学大学院連携プログラムの活動報告

本報告書は、「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」における、平成 24 年 10 月～平成 26 年 3 月の活動をまとめたものである。主な活動は以下の通りである。

■組織体制■ 本プログラムでは、異なる分野の専門家との協働によって「社会のシステムやアーキテクチャ」をデザインできる博士人材を育てるために、5 つの専門領域（情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学）が協力するプログラムである。その実施母体を形成するため、学際融合教育研究推進センターにデザイン学ユニットを新設し、教授会、教育委員会、運営委員会を設けた。また、本プログラムを社会に紹介し優秀な学生を集めため、パンフレット、ロゴ、Web サイトの制作など一連の広報活動を行った。

■採用活動■ 本プログラムを円滑に運営するため、教職員の雇用を進めた。まず、領域横断型の教育を行うための特定教授・特定准教授・特定助教の公募を行い、10～15 倍の応募の中から計 6 名を採用した。また、産学連携担当の特任准教授を総務省から、造形系の非常勤の特任教授、特任講師を他大学から採用した。また、領域内のデザイン学教育を行うために、情報学研究科、教育学研究科などで特定教員の人事を進めた。さらに、事務・サポート組織を整えるため、事務職員 6 名、サポート職員 4 名を採用した。

■カリキュラム■ 5 年一貫のカリキュラムを整え、4 部局 11 専攻において実装した。本プログラムの特徴であるデザイン学共通科目（5 科目）、デザイン学領域科目（7 科目）、問題発見型／解決型学習（FBL/PBL）などの新規科目を 25 年度から開講した。特に FBL/PBL では、京都市立芸術大学との連携を進めた。また、27 年度から単位化するオープンイノベーション実習やフィールドインターンシップの準備を進めた。前者は、契約書を策定するなど企業との実施体制を整えた。後者は、受け入れ先となる団体と覚書きの締結を進めた。

■学生選抜■ 25 年度から学生受け入れを行ったが、4 月に博士進学を決断できない学生も多いため半年間の予科を置き、10 月から本科へ進む仕組みとした。25 年 4 月に 27 名の履修者（予科）を迎えて教育活動を開始し、同年 10 月に 13 名の履修者（本科）を合格とした。また、学生のリーダーシップ養成のため、研究費や旅費などの経費の支援を目的とする研究活動経費を設け、審査を経て履修者（本科）11 名に支給した。

■各種活動■ 本プログラムの社会的プレゼンスの確立を図るために、京都市立芸術大学、京都工芸纖維大学と共にサマーデザインスクールを 25 年 9 月に実施し、25 テーマに約 200 名が参加した。このほか、各種の実習やセミナー、国際シンポジウム、産学シンポジウム、国際ワークショップ等を実施した。

■活動拠点■ 京都リサーチパーク内に約 800 m<sup>2</sup> の壁のない空間を借り受け、デザインイノベーション拠点を立ち上げた。この拠点には、教員やサポートスタッフのスペース、リーディングプロジェクトのブース、ワークショップにも使えるフレキシブルスペースなどを配置し、一部を除き整備を完了した。また、吉田・桂の両キャンパスとデザインイノベーション拠点を結び、デザイン学共通科目の遠隔講義を実施可能とした。

■産学連携 ■ 産学連携を目的に「産学デザインシンポジウム」を開催した。また、本プログラムのメンバーと、京都市立芸術大学、企業、官公庁など産官学からなる教育協議会、運営協議会を開催した。さらに、様々な業種の企業や京都府、京都市など計44組織の参加を得て、26年3月に「デザインイノベーションコンソーシアム」を発足させた。

■国際連携 ■ 海外機関との連携スキームを具現化するために、国際アドバイザリーボードを構成した。ボードメンバーは、デザイン学における欧米圏のリーダー、Transferable Skills Training の専門家などである。この目的のため、中核メンバーが欧米のデザイン教育に関する大学や組織を数回に渡り訪問し交流を深めた。また、国際連携を推進するために「国際デザインシンポジウム」を開催した。さらに、第一回の国際アドバイザリーボードを国際デザインシンポジウムを機に開催し数々の助言を得た。

平成26年9月

プログラムディレクター 淡路 敏之（京都大学理事）

プログラムコーディネータ 石田 亨（京都大学情報学研究科）

## デザイン学大学院連携プログラムに寄せて

### デザイン学とこれからの情報学

佐藤 亨（京都大学大学院情報学研究科・研究科長）

情報学研究科からは、プログラムコーディネータの石田教授をはじめとして多数の教員がこのプログラムに中核的に参画している。情報学研究科は、人間・社会とのインターフェースを研究科の3本の柱の1つに掲げており、デザイン学という新しい領域は、今後の針路を示す重要な概念と考えている。自動運転車の開発競争に象徴されるように、ICTの社会への浸透はさらに急激なものとなっているが、技術の進歩の速度に対して、その人間・社会への影響の評価や、社会のあるべき姿を見据えたグランドデザインの欠如が、大きな課題としてクローズアップされている。本プログラムは、まさにこの点に焦点を絞り、この問題を解決し得る人材を育成することを目的としている。研究科の組織改革の議論においても、本プログラムをモデルケースとして、そこで行われているさまざまな試みを発展的に取り入れ、広い視野を持った研究者・技術者を育成できる体制の整備を目指している。



### 認知心理学からの参加

子安 増生（京都大学大学院教育学研究科・研究科長）

私たち教育学研究科は、教育認知心理学講座の5人の教員と7人の院生がデザイン学に参画している。心理学は、わが国では文系学部に属するが、欧米ではサイエンスに分類されており、実験してデータを取り、推測統計学や多変量解析法を駆使してデータを分析するなど、多少理性的色彩もある。したがって、情報学と工学が主体の京大デザイン学に関わることに関して、教員も院生もあまり違和感がない。しかし、心理学には設計というジャンルはないので、機械工学や建築学等の先生方とお話をすることは大変刺激的である。昨年のサマーデザインスクールでは、私は機械工学の松原厚教授の「高さ1メートル未満から見える世界のデザイン」班に入ったが、建築系の学生さんを中心に班員が頑張ってくれて発表賞を獲得したことがうれしい出来事であった。今年度からは研究科長に就任し、デザイン学顧問に「棚上げ」になったが、側面からの援助だけでなく、できるだけ一緒に参加したいと思っている。



## 匠を育てる学際融合教育への期待

伊藤 紳三郎（京都大学大学院工学研究科・研究科長）

工学研究科では、自然科学の基礎研究と、研究を通じて得られた科学的知識を活用して多様な応用研究を展開しています。これにより社会に貢献するとともに、科学技術の分野で未来を支えることのできる人材を育成することが最大のミッションです。それらの研究が人々の暮らしや産業に貢献するためには、人文・社会科学や芸術の諸要素をも巧みに取り入れることが必要です。

本リーディングプログラムは文理学際融合教育を具現化されており、社会システムやアーキテクチャを多面的な視野から考えて調和したデザインができる人材を育成されています。工学研究科からも建築系、機械系の教員が積極的に参加して活躍しています。このプログラムが提供する問題発見型学習や課題解決型学習を履修した大学院生は、異分野の人々との協働を通じて、広い視野をもち剛健かつ柔軟な専門能力を身に付けた「名匠」となって、社会で活躍することでしょう。学際融合教育の成功モデルとして産官学から高く評価されるものと期待しています。



## サービスデザインへの取り組み

河野 広隆（京都大学経営管理大学院・大学院長）

現在の経済価値は商品からサービスへとシフトしている。経営管理大学院では「サービス価値創造プログラム」の教員が中心となり、サービスの研究・教育を進めているが、さらに「サービスデザイン」に踏み込もうとしている。

私自身はベースが工学なので、「デザイン」というと建築などの意匠を、「design」というと製品や構造物の設計をすぐにイメージしてしまう。しかし、「サービスデザイン」で扱う分野ははるかに広い。サービスには顧客も提供者も参加して共同で価値を創造するため、人と人の関係性が特に重要となる。ただ客が欲しいものを伝えると言うような情報を交換するだけではなく、人と人がぶつかりあうこともその一部となる。そのようなサービスをこれまでのようにモノをデザインするようには、一方的にはデザインできない。

この意味でサービスデザインは、従来の意味でのデザインという工学・情報学的側面の他、社会科学の融合が不可欠であり、文理融合を掲げている経営管理大学院の貢献する余地は大きいと考える。



# 1 制度設計

## 1.1 デザイン学プログラム

### (1) 人材養成の目的

国際社会は今、温暖化、災害、エネルギー、食糧、人口など複合的な問題の解決を求めている。そこで本プログラムでは、異なる分野の専門家との協働によって「社会のシステムやアキテクチャ」をデザインできる博士人材を育成する。またそのために、情報学や工学の基礎研究を結集し、複雑化する問題を解決するための、新たなデザイン方法論を構築する。これによって、Cyber（情報学など）と Physical（工学など）の専門家が、経営学、心理学、芸術系の専門家と協働し問題解決が行えるよう教育を行う。要するに専門家の共通言語としてデザイン学を教育し、社会を変革する専門家を育成する。こうした人材を、ジェネラリストを意味する「T字型人材（T-shaped people）」と対比させ、専門領域を超えて協働できる突出した専門家という意味を込めて「十字型人材（+ -shaped people）」と呼び、本プログラムにより養成すべき人材像とする。

### (2) プログラムの特長

#### (i) 5年一貫プログラム

本プログラムは、高度な専門性と俯瞰力を備えることを目的としているために、5年一貫のプログラムになっている。プログラムを修了すると博士学位が与えられる。（図 1-1）

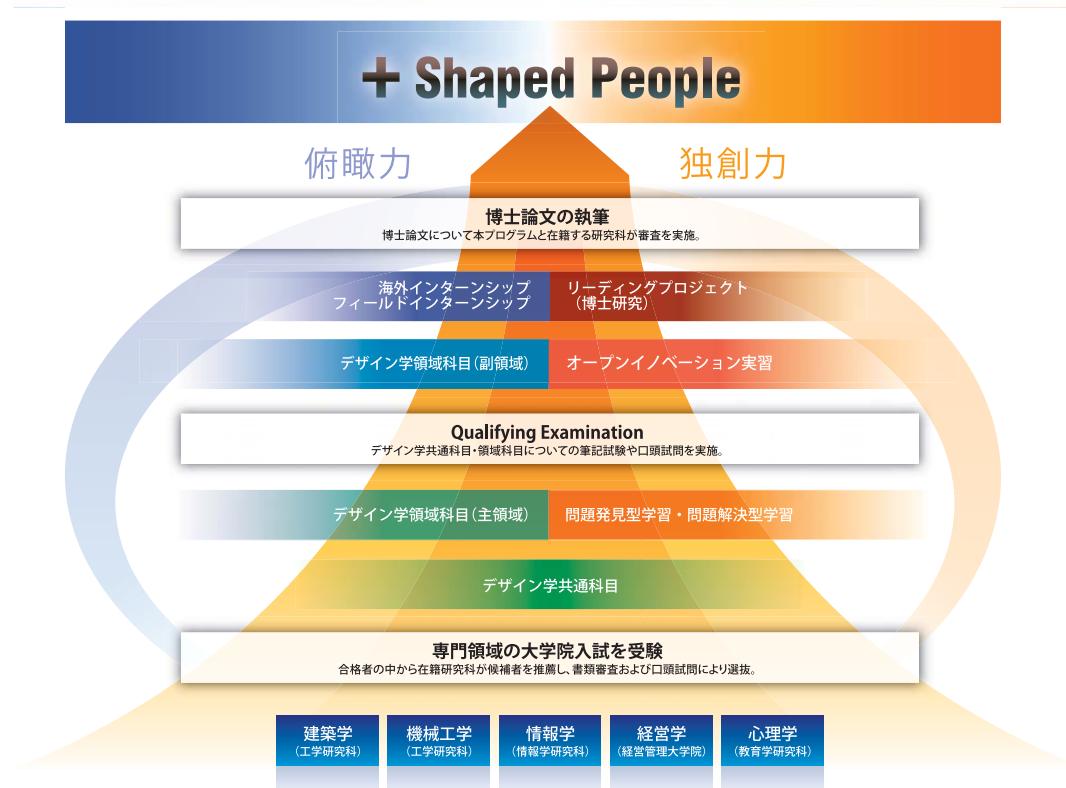


図 1-1 5年一貫プログラム

## (ii) 予科制度

本プログラムは4月にプログラム履修者を募集し、原則として5月～9月に予科を設ける。プログラム履修者（予科）は、前期の間に所属研究科の課程の履修を進めるとともに、本プログラムの目的と内容を理解し、自らの能力と適性を確かめる。そして9月末にプログラム履修者（予科）の中から20名を選抜し、10月からプログラム履修者（本科）として本格的にこのプログラムに参加する。

なお、修士課程に10月入学した学生が標準的に要する修了期間は、入学後5.5年である。

## （3）コースワークと学位研究

デザイン学のカリキュラムは、コースワークと学位研究から構成されている。コースワークは、デザイン学に関わる共通科目と領域科目、さらにリーダーシップ養成科目からなる。

### (i) コースワーク

デザイン学共通科目の講義には、①デザイン科学の在り方を問い合わせ直し、デザインの基礎理論を解説する「デザイン方法論」、②人工物の概念と、多様な人工物に共通するデザインの原理を明らかにする「アーティファクトデザイン論」、③情報デザインの概念と手法について学ぶ「インフォメーションデザイン論」、④人や社会を対象としたデザインの基礎を学ぶ「組織・コミュニティデザイン論」、⑤エスノグラフィ・シミュレーション・データ分析など、デザインを支える手法を学ぶ「フィールド分析法」があり、全ての科目が新規開講である。

デザイン学領域科目は、情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学の5領域の科目からなる。それぞれの専門領域でのデザインに関わる科目群で、既存科目から抽出された科目に、各領域でのデザインの考え方を説く新規開講科目を加えて再編したものである。デザイン学領域科目は主領域としても副領域としても選択可能である。そのため、各領域の学問体系に沿って教育するのではなく、各専門領域がデザインにどう寄与するかに着目して体系化されている。例えば、情報学の領域科目は、①データ分析に寄与する機械学習などの「デザインツール（Informatics as a Design Tool）」、②社会システムのモデル構築に寄与する最適化理論、制御理論などの「デザイン原理（Informatics as a Design Principle）」、③イノベーションに寄与するSNS、スマートフォンなどの「デザイン体験（Informatics as Design Experience）」に分類され、受講者の履修目的によって選択可能としている。

リーダーシップ養成科目には、リサーチインターンシップ、フィールドインターンシップ、戦略的コミュニケーションセミナーがあり、国際的かつ実践的研究の感覚を磨くことができる。

リサーチインターンシップは、本プログラムのすべての参画部局において、これまでにも実施されており、海外体験学習の事前・事後教育を含めた組織的な実践実績・ノウハウが蓄積されている。これに対しフィールドインターンシップは、「現場の教育力」を活用する新たな試みで、専門領域の異なる学生がチームを構成し、数か月フィールドに滞在して活動するものである。個人が中心であったこれまでのインターンシップとは異なり、グループ活動を通じてリーダーシップの養成を狙っている。

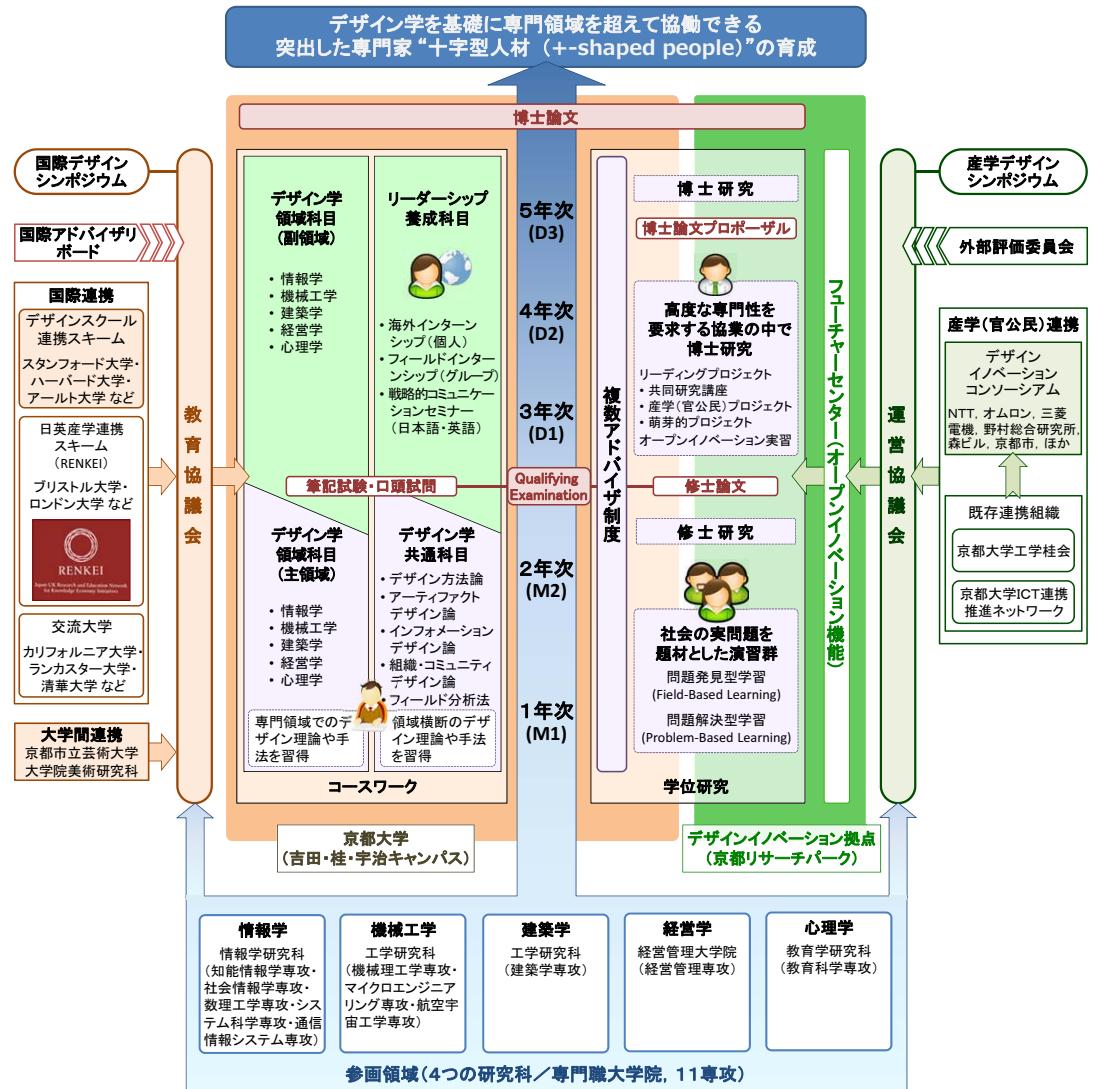


図 1-2 学位プログラムの概要と組織構成

戦略的コミュニケーションセミナーは、コミュニケーション能力を強化するための短期集中型セミナーで、英語コースと日本語コースから構成される。英語コースは、ベルリッツ・ジャパンと共同開発したもので、ベルリッツ・ジャパンの持つ豊富なコンテンツを濃縮し、英語によるプレゼンテーション、スピーキングなどの能力の強化を目指した実習である。日本語コースは、(財) NHK 放送研修センターと共同開発したもので、センターの持つコミュニケーションノウハウを濃縮し、スピーチ、ネゴシエーションなど、話す、伝える能力の強化を目指した実習を、センターのエグゼクティブ・アナウンサーが実施する。

## (ii) 学位研究

デザイン学の学位研究の特長は、実問題の発見と解決を強く意識するところにある。学位研究（修士研究、博士研究）は、専門領域の異なる複数のアドバイザによる指導体制（複数アドバイザ制度）の下で行われる。特に博士研究では、社会の実問題に挑戦するリーディングプロジェクト（共同研究講座、産学（官・公）プロジェクト、萌芽的プロジェクト）で、高度な専門性を要求する協働を通じて学位論文をまとめる。

その前段として、実社会をフィールドとして、内在する問題や社会的期待を抽出する問題発見型学習（FBL: Field-Based Learning）と、実社会の問題に対して、学生が自主的に解を見出す問題解決型学習（PBL: Problem-Based Learning）が行われる。共に、異なる専門領域の学生で構成するチームで取り組む。実習テーマの約半数は、教員が研究として取り組む実問題を実習化したもので、『再生可能エネルギーの普及』や『都市エリアの再設計』などの本格的なものである。他の半数は、企業、自治体、非営利団体、コミュニティなどから持ち込まれる実問題を実習化したもので、学生チームはテーマ提供者の協力を得て問題解決に取り組む。

さらに、社会の実問題を発見し解決する実践的実習として、オープンイノベーション実習を体験する。これは、関係する専門家あるいはステークホルダーに依頼し、オープンイノベーションのためのチームを構成し、ワークショップを連続的に実施することで目標を達成するものである。学生の役割は、専門家として問題解決や問題発見に参加することではなく、オープンイノベーションのためのチームを構成しマネジメントすることである。これによって、コミュニケーション能力、マネジメント能力を鍛えるとともに、実践を通じてデザイン活動を成功に導くためのデザイン理論やデザイン手法を身に付けることができる。

#### （4）プログラム履修者の募集

本プログラムには、募集年度の4月に表1-1のいずれかの研究科・専攻の博士前期課程（修士課程）あるいは前期後期一貫の博士課程に入学した者が応募できる。なお、情報学研究科においては、前年度の10月に博士前期課程（修士課程）に入学している者も出願資格を有する<sup>1</sup>。国籍・性別・年齢は問わない。

4月にプログラム履修者を募集し、原則として5月～9月に予科を設ける。9月末にプログラム履修者（予科）の中から20名を選抜し、合格者は10月からプログラム履修者（本科）として本格的にこのプログラムに参加する。

表1-1 デザイン学大学院連携プログラムに参画している研究科・専攻

教育学研究科	教育科学専攻
工学研究科	建築学専攻、機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻
情報学研究科	知能情報学専攻、社会情報学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻
経営管理教育部	経営管理専攻

#### （5）博士論文研究基礎力審査（QE）

本プログラムでは、コースワークを通じて修得された知の基盤を評価し、博士研究を開始する資格が備わっているかどうかを審査するために、2年次から3年次への進級時に博士論

<sup>1</sup>平成26年10月より、博士前期課程（修士課程）の10月入学者を対象とし、10月にもプログラム履修者の募集が行われる。

文研究基礎力審査（Basic Doctoral Ability Qualification, 以降 QE — Qualifying Examination の略 — と称す）を実施する。QE に合格するまでの期間は標準で 2 年とする。必要とされる単位のうち一部の科目群は、国内外の社会にも開放することで、広く多文化・多言語の状況下で教育研究を実施する。

デザイン学共通科目や領域科目は、筆記試験ならびに口頭試問でその到達点を評価する。ただし、副領域科目は資格審査の対象とはせず、5 年一貫の中で学んでいくべきものと位置付ける。

QE 合格後は博士研究を行いながら、デザイン学領域科目（副領域）とリーダーシップ養成科目などを履修する。さらに、リサーチインターンシップやフィールドインターンシップによって、国際的かつ実践的研究の感覚を磨く。これによって、高度な専門性と俯瞰力を併せ持つデザイン学博士人材を育成する。

博士研究の指導には複数アドバイザ制度を適用し、学際的な視点での研究指導を行う。博士論文の審査では、学術的成果に加え、社会の実問題に対し、デザイン学に関わる学際的な研究活動が行われたかどうかが問われる。研究指導の認定は 1 年ごとに、学年または学期の終わりに、京都大学博士課程教育リーディングプログラム運営委員会（以後、プログラム運営委員会と称す）の承認を得て、在籍研究科が行う。

なお、経営管理大学院は博士後期課程を有していないので、履修学生は 2 年次修了後に、情報学研究科、工学研究科、教育学研究科のいずれかの博士後期課程に入学することが求められる。

## （6）学位

多様な専門分野を俯瞰し、創造的に課題解決にあたるために必要な突出した実践力（独創力＋俯瞰力）とその基盤となる学識を身につけているかどうか、および、グローバルに活躍するために必要なコミュニケーション力と国際性を蓄えているかどうかが、本プログラム修了の基準となる。また本プログラムの修了要件は、所属研究科に 5 年以上（短縮修了の場合は 4 年以上）在学して、本プログラムのカリキュラム・ポリシーに沿った研究指導を受け、所定の単位を修得した上で、所定年限内に提出した博士論文について研究科が行う審査と試験に合格し、プログラム運営委員会による最終審査に合格することが博士の学位授与の要件である。

本プログラムで授与する博士学位は、情報学研究科においては「博士（総合学術）」、工学研究科、教育学研究科においては既存学位、すなち、それぞれ「博士（工学）」、「博士（教育学）」である。既存学位の場合には、学位記に本プログラムの修了を記載する。

## (7) 科目配当表・履修要件

以下は平成 25 年度デザイン学大学院連携プログラム履修要項からの抜粋である。

表 1-2 博士論文研究基礎力審査 (QE) を受験するために必要な単位数

(受験資格) 所属する専攻の修了要件を満たし、かつ、その履修科目・単位数が下記 QE を受験するために必要な単位数を満たしていること。

科 目 区 分	履修区分	単位数	備 考
デザイン学共通科目・共通実習科目	選択	8 以上	
デザイン学主領域科目	選択	10 以上	所属する研究科・専攻に関連した主領域科目から必要単位数を取得すること。

表 1-3 博士論文研究基礎力審査 (QE) 合格後、コース修了に必要な単位数

(修了要件) 所属する専攻の修了要件を満たし、かつ、下記科目を必要単位数取得し、博士論文の審査に合格すること。

科 目 区 分	履修区分	単位数	備 考
デザイン学共通実習科目・インターンシップ科目	選択		
デザイン学副領域科目	選択	10 以上	主領域と異なる副領域から取得すること。

表 1-4 デザイン学科目表

	授業科目名	担当教員	毎週時数		単位	備考
			前	後		
デ ザ イ ン 学 実 習 科 目 共 通	*問題発見型/解決型学習(FBL/PBL) 1	関連教員		1	前期集中	博士論文研究基礎力審査(QE)合格前に履修すること
	*問題発見型/解決型学習(FBL/PBL) 2	関連教員		1	後期集中	
	*オープンイノベーション実習 1	関連教員		4	前期集中	博士論文研究基礎力審査(QE)合格後に履修すること
	*オープンイノベーション実習 2	関連教員		4	後期集中	
シ 共 デ ジ 通 ザ ブ イ イ 科 目 タ 学	*リサーチインターンシップ			2	通年集中	博士論文研究基礎力審査(QE)合格後に履修すること
	*フィールドインターンシップ			2	通年集中	
共 デ ザ イ ン 学	*デザイン方法論	門内・神吉 他	2	2		(工学)
	*アーティファクトデザイン論	榎木 他	2	2		(工学)
	*インフォメーションデザイン論	田中(克)・黒橋 他	2	2		(情報学)
	*組織・コミュニティデザイン論	山内・松井・杉万 他	2	2		(経営管理)
	*フィールド分析法	守屋 他	2	2		(情報学)

		授業科目名	担当教員	毎週時数		単位	備考
				前	後		
情報学領域科目	デザイン学主領域・副領域科目	*情報通信技術のデザイン	佐藤(高)・石田	2	2	概論(新規開講)	
		*数理とデザイン	田中(利)・川上・太田・山下		2	2	概論(新規開講)
		パターン認識特論	松山・河原(達)・川嶋・Liang	2	2	(情報・知能)	
		言語情報処理特論	黒橋・森	2	2	(情報・知能)	
		アルゴリズム論	Avis	2	2	アルゴリズムと情報学入門 (情報・通信)	
		伝送メディア工学特論	守倉・山本(高)	2	2	(情報・通信)	
		ビッグデータの計算科学	中村(佳)・木村・關戸・小山田		2	2	(情報・プロジェクト科目)
		スーパーコンピューティング特論	中島・岩下	2	2	(情報・システム)	
		最適化数理特論	山下(信)	2	2	(情報・数理)	
		Artificial Intelligence, Adv.	西田・中澤・大本		2	2	(情報・知能)
		制御システム特論	太田		2	2	(情報・数理)
		統計的システム論	林(和)	2	2	(情報・システム)	
		共生システム論	大塚・川上		2	2	(情報・システム)
		情報社会論	吉川・田中(克)・Jatowt・石田・Kinny・守屋・Trifkovic	2	2	(情報・社会)	
		情報と知財	田中(克) 他		2	2	(情報・研究科共通)
		情報ネットワーク	高橋(達)・新熊	2	2	(情報・通信)	
		情報システムデザイン	吉川・田中(克)・田島・大島・Jatowt・馬		2	2	情報システム設計論 II (情報・社会)
		防災・減災デザイン論	林(春)・牧・鈴木	2	2	危機管理特論 (情報・社会)	
機械工学領域科目		*複雑系機械システムのデザイン	榎木・安達・富田 他		2	2	概論(新規開講) 複雑系機械工学
		動的システム制御論	榎木・藤本・中西	2	2		
		設計生産論	泉井・茨木	2	2		
		ロボティクス	松野		2	2	
		デザインシステム学	榎木・中西		2	2	
		技術者倫理と技術経営	榎木・小森(雅)・西脇・富田・土屋・(非常勤講師)野田・佐藤(国)・伊勢田	2	2		
建築学領域科目		最適システム設計論	西脇・泉井・山田(崇)		2	2	
		*建築・都市デザイン論	門内・神吉 他		2	2	概論(新規開講)
		*建築構造デザイン論	林 他	2	2	概論(新規開講)	
		建築環境計画論	門内	2	2	建築環境計画論 I	
		人間生活環境デザイン論	神吉	2	2		
		生活空間学特論	岸		2	2	
		建築設計力学	竹脇・辻	2	2		
		高性能構造工学	吹田・聲高		2	2	
		環境制御工学特論	原田	2	2		

		授業科目名	担当教員	毎週時数		単位	備考
				前	後		
デザイン学主領域・副領域科目	経営学領域科目	*事業デザイン論	若林(靖) 他		2	2	概論(新規開講)
		デザイン経営論	久保田		2	2	
		研究・事業開発マネジメント	原 他		2	2	
		サービス経営論	原 他		2	2	
		マーケティングリサーチ	野沢	2		2	平成 25 年度不開講(予定)
	心理学領域科目	デザインエスノグラフィ	山内		2	2	サービス創出方法論
		*認知デザイン特論	楠見・子安・齊藤・野村・高橋	2		2	概論(新規開講)
		心理システムデザイン演習 I	楠見・吉川・齊藤・野村・高橋	2		2	教育認知心理学研究 I
		心理システムデザイン演習 II	楠見・吉川・齊藤・野村・高橋		2	2	教育認知心理学研究 II
		心理デザインデータ解析演習	楠見・高橋	2		2	心理データ解析演習
	認知機能デザイン論	認知機能デザイン論	阿部	2		2	脳神経科学特論
		デザイン心理学特論	北村	2		2	前期集中 認知科学特論
		脳機能デザイン演習	野村		2	2	感情・システム生命論演習 II

以下の科目は修了に必要な単位として算入されない

		授業科目名	担当教員	毎週時数		単位	備考
				前	後		
コミュニケーション学共通	デザイン・コミュニケーション学	*戦略的コミュニケーションセミナー(日本語)			1	通年集中	5 日間程度の短期集中型セミナーとして開講(情報・デザイン学科目)
		*戦略的コミュニケーションセミナー(英語)			1	通年集中	7 日間～9 日間程度の短期集中型セミナーとして開講(情報・デザイン学科目)
デザイン・スキル・科学科目共通	デザイン・スキル・科学科目	*情報学演習 I	未定	2	2	(情報・デザイン科目)	
		*情報学演習 II	未定		1	1	(情報・デザイン科目)
		*心理デザイン研究法特論	高橋	2		2	新規(教育学研究科)
		*心理デザイン研究法演習	高橋		2	前期集中	新規(教育学研究科)

## (8) 研究科における修了認定

各研究科等においては、博士前期課程（修士課程）、博士後期課程において下表の単位数を修了要件としている。

表 1-5 研究科等における修了要件

研究科等	専 攻	修士・専門職 学位課程 履修単位数	博士後期課程 履修単位数
教育学研究科	教育科学専攻	30 単位 修士論文	博士論文
工学研究科	建築学専攻	30 単位 修士論文	10 単位 博士論文
	機械理工学専攻		
	マイクロエンジニアリング専攻		
	航空宇宙工学専攻		
情報学研究科	知能情報学専攻	30 単位 修士論文	6 単位 博士論文
	社会情報学専攻		
	数理工学専攻		
	システム科学専攻		
	通信情報システム専攻		
経営管理大学院	経営管理専攻	42 単位	

## 1.2 各部局での実装

本プログラムでは、デザイン学の博士人材の育成のために、総合大学の特長を生かして、4つの研究科／専門職大学院(11専攻)が連携し、学際融合的な教育研究体制(大学院連携)を構築する。これによって、学生が高度な専門性を背景にデザイン力を身に付けることができる教育環境を整える。

大学院の教育改革については、京都大学では過去十数年の間に、新しい大学院やコースの設置を進めてきた。本プログラムに関連するものを以下に示す。

### (1) 情報学研究科

情報学研究科(1998年設置)：情報工学、数理工学、電気電子工学などの工学系専攻、理学、農学、文学、人間環境学を含む多様な研究科を母体として設立され、情報社会のリーダーとなる修士・博士人材を育成している。本プログラムでは「博士(総合学術)」を新たに導入し、従来の「博士(情報学)」とは異なる、専門領域横断的なカリキュラムを実現する。

リーディング大学院入学後、博士論文研究基礎力審査までは多様な専門教育によって幅広い知識を修得するとともに、課題解決型科目などの実践を通してコミュニケーション力や課題発見能力を身につけることを目標としたカリキュラムを実装している。デザイン学共通科目には情報学研究科から、「インフォメーションデザイン論」、「フィールド分析法」の2科目を新設提供するとともに、情報学領域科目において「情報通信技術のデザイン」、「数理とデザイン」の2科目を新設して、デザイン学における情報学の果たすべき役割や有用な手法について幅広く学べることを意図している。さらに情報学研究科5専攻で開設されていた16科目をデザイン学への提供科目とし、情報学研究科の学生のみならず、他研究科学生の副領域科目としての教育に寄与している。実習科目である「問題発見型／解決型学習(FBL/PBL)」については、研究科教員もテーマ設定に参加しており、他研究科教員等のテーマとともに実践的な能力を身につけることに役立っている。参画する5専攻では、専攻の決める修了要件も満たすことが求められているが、専攻ごとにデザイン学科目を修了に必要な単位として認めるかの基準を定めており、履修生に過大な負担をかけることなく、デザイン学の学修が達成できるような制度になっている。

博士論文研究基礎力審査後は、実習科目「オープンイノベーション実習」やインターンシップ科目「リサーチインターンシップ」、「フィールドインターンシップ」などを通してリーダーシップ能力を涵養するとともに、副領域科目として他研究科の科目を修得することによって幅広い知識を得ることができる。これに加えて参画する5専攻において、専攻ごとに必要な単位数を修得し、専門領域での博士論文研究を行うことによって、領域を横断的に見て、かつ専門にも通じたすぐれた人材を輩出する制度としている。このため、従来の博士(情報学)ではなく、博士(総合学術)を学位として授与することとしている。

### (2) 工学研究科

工学研究科融合工学コース(2008年設置)：工学研究科の既存専攻の学術分野を横断的に融合し、新融合分野の教育を担う5年一貫の博士人材育成コースとして設置された。本プログラムでは、デザイン学を教育するためのコースを、新たな融合工学コースとして設立する。

工学研究科におけるデザイン学の実装は、同研究科すでにプログラム化されている博士課程前後期連携教育プログラム(略称「連携プログラム」)の融合工学コースとして、新

たに「デザイン学」分野を開設し、デザイン学大学院連携プログラムを履修する者は、工学研究科においては融合工学コース「デザイン学」分野を履修することを原則としている。このため、履修生は融合工学コースの修了要件とデザイン学大学院連携プログラムの修了要件を同時に満たす必要がある。融合工学コースを修了するために必要な合計40単位には、本研究科の修士課程を修了するために必要な合計30単位が含まれ、連携プログラムで博士後期課程に進学するためには、本研究科で定める修士論文の審査に合格し修士課程を修了する必要がある。また博士後期課程に進学するためには、博士後期課程入学試験に合格する必要がある。博士後期課程では研究指導を受け、連携プログラムが定める専攻科目につき10単位以上を修得するとともに、博士論文の審査および試験に合格した者に博士の学位（博士（工学））が与えられる。一方、これと並行して、デザイン学大学院連携プログラム履修生には、同プログラムで求められる履修要件を満たす必要があるが、その多くが履修の負荷を考慮して融合工学コースで求められる履修要件との共通項を持たせたコース設計がなされている。

デザイン学大学院連携プログラムの履修を希望する者は、入学年度の前年度に実施される連携プログラム融合工学コースの入学試験に合格することで、修士の1年次から履修を開始することができる。同時に、修士課程のみの教育プログラム（略称「修士プログラム」）の履修生で、修士課程1年次において融合工学コースの履修生になっていない学生においても、同年次からのデザイン学大学院連携プログラムの履修が認められる。この場合、初年度のうちに連携プログラム融合工学コース「デザイン学」分野への転コースの手続きが求められる。

### （3）教育学研究科

教育学研究科は、1953年に設置され、1998年に大学院重点化により、教育科学・臨床教育学の2専攻に再編成された。教育学研究科は、21世紀COE「心の働きの総合的研究教育拠点」（2002～2007年度）、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」（2007～2011年度）の補助金を受けて、心理学・教育学分野の研究教育拠点を形成してきた。さらに、教育学研究科教育科学専攻教育認知心理学講座の教員（教授2、准教授2、特定助教1）は、デザイン学大学院連携プログラムに、主に心理学領域科目およびデザイン学共通のスキル科目の扱い手として参画した。教育認知心理学講座の大学院生は、教育認知心理学の専門領域の学習や研究に加え、デザイン理論とその手法、情報学、工学、経営管理などを学ぶことができるよう科目設計を行った。

心理学領域科目の新規開講科目「認知デザイン特論」は、領域の中核的な講義科目である。講座の5名の担当教員がリレー方式で担当し、デザインという人間の営みを、脳・心・行動の3つの水準で捉える認知心理学の観点から、総合的に考察をするための知識を身につけることを目標としている。

心理学領域科目「心理システムデザイン演習I、II」では、講座の教員と院生が全員参加し、最新の研究成果や関連領域の文献を発表し、相互に議論することを通じて各自の研究内容を深め、多様な専門領域についての幅広い知識の修得をめざしている。また、心理学領域科目「心理デザインデータ解析演習」では、PCの設置されたサテライト教室でおこなう演習科目である。参加者は、デザイン学共通のスキル科目「心理デザイン研究法特論/演習」（3.1 (4)参照）で学んだスキルを自分の研究に適用して、統計ソフトウェアの操作のデモンストレーションを含めた発表を行うことを通して、データ解析のスキルや知識を身につけ

ることを目標としている。

そのほか、心理学領域科目「認知機能デザイン論」と「脳機能デザイン演習」では、心理学やデザイン学と関わる神経科学や遺伝学などの最新の成果と研究手法を修得することを目標としている。また、「デザイン心理学特論」は、毎年異なるテーマを取り上げ、デザイン学に関わる認知科学、発達心理学、社会心理学など様々な領域の知識を身につけることを目標としている。

教育学研究科におけるデザイン学の予科生・本科生は、修士課程では、上記の心理学領域科目をデザイン学主領域科目として履修し、あわせて、デザイン学共通科目・共通実習科目を履修し、指導教員から研究指導を受け、修士論文を執筆する。

QE 合格後、博士課程では、デザイン学共通実習科目・インターンシップ科目、デザイン学副領域科目を履修するとともに、指導教員から研究指導を受け、博士論文を執筆する。

#### (4) 経営管理大学院

経営管理大学院（2006 年設置）は、経済学研究科と工学研究科を母体として設立された専門職大学院で、経営学修士（専門職）を育成している。さらに、本プログラムでは、情報学研究科との連携によって実質的に 5 年一貫のプログラムを実現する。

経営管理大学院では、サービス価値創造プログラムにおいて、サービス・デザインについての教育研究を行っている。そして、実際に IDEO 等のデザイン学に関連する企業等との協力関係に基づき、デザイン学向けに授業科目や FBL/PBL を提供している。

デザイン学カリキュラムに関しては、デザイン学共通科目として「組織・コミュニティデザイン論」、デザイン学領域科目（経営学）として「事業デザイン論」、「デザイン経営論」、「研究・事業開発マネジメント」、「サービス経営論」、「マーケティングリサーチ」、「デザインエスノグラフィ」の 6 科目を提供している。また、FBL/PBL として「病院のデザイン」、「ファストフードのデザイン」を京都市立芸術大学や京大病院、大手ファストフード企業等と共同で実施している。

また、デザイン学プログラム履修者の活動拠点として、3D-CAD や 3D プリンター、エスノグラフィに対応した機器類を設置し、各種グループワークが可能な D-Lab を経営管理大学院内に整備している。D-Lab は、デザイン学プログラム履修学生の教育や自主活動に積極的に活用されている。

### 1.3 プログラム担当者

本リーディングプログラムでは、参画専攻をはじめ、京都大学のデザイン学に関わる幅広い分野から第一級の教員がプログラム担当者として結集し、教育研究指導にあたっている。さらに、京都市立芸術大学、産業界、官公庁からもプログラム担当者を迎える、計34名のプログラム担当者による教育研究体制としている。(平成26年3月末時点)

淡路 敏之	プログラム責任者／理事・副学長
石田 亨	プログラムコーディネータ／情報学研究科 社会情報学専攻 教授
子安 増生	教育学研究科 教育科学専攻 教授
楠見 孝	教育学研究科 教育科学専攻 教授
門内 輝行	工学研究科 建築学専攻 教授
林 康裕	工学研究科 建築学専攻 教授
神吉 紀世子	工学研究科 建築学専攻 教授
榎木 哲夫	工学研究科 機械理工学専攻 教授
西脇 真二	工学研究科 機械理工学専攻 教授
富田 直秀	工学研究科 機械理工学専攻 教授
松原 厚	工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻 教授
泉田 啓	工学研究科 航空宇宙工学専攻 教授
西田 豊明	情報学研究科 知能情報学専攻 教授
黒橋 祐夫	情報学研究科 知能情報学専攻 教授
田中 克己	情報学研究科 社会情報学専攻 教授
守屋 和幸	情報学研究科 社会情報学専攻 教授
太田 快人	情報学研究科 数理工学専攻 教授
田中 利幸	情報学研究科 システム科学専攻 教授
佐藤 高史	情報学研究科 通信情報システム専攻 教授
守倉 正博	情報学研究科 通信情報システム専攻 教授
松井 啓之	経営管理大学院 教授
山内 裕	経営管理大学院 講師
林 春男	防災研究所 大災害研究センター 教授
美濃 導彦	学術情報メディアセンター 教授
杉万 俊夫	人間・環境学研究科 共生人間学専攻 教授
小山 格平	京都市立芸術大学美術学部 学部長／同大学院美術研究科 教授
上田 修功	NTTコミュニケーションズ基礎研究所 機械学習・データ科学センタ 代表
山田 敬嗣	NEC ラボラトリーズシンガポール 所長
田中 健一	三菱電機株式会社 役員理事／先端技術総合研究所 所長
丸野 進	パナソニック株式会社 理事／先端技術研究所 技監
柴内 哲雄	株式会社野村総合研究所 理事
松田 晃一	独立行政法人情報処理推進機構 顧問
白須 正	京都市産業観光局 局長
谷脇 康彦	内閣官房 内閣審議官／情報セキュリティセンター 副センター長

## 1.4 デザイン学ユニット

本プログラムでは、既設の京都大学学際融合教育研究推進センターの下に、本プログラムに対応する教育研究ユニットである「デザイン学ユニット」を新設し、部局横断的な諸規定を整備した。本プログラムに参画する4研究科11専攻をはじめとする学内外の組織に所属する約70名の教職員がデザイン学ユニットの構成員となり、本プログラムの教育を担っている。また、デザイン学ユニットには4名の特定教員が所属し、研究領域を超えた活動を行っている（人数はいずれも平成26年3月末時点）。

デザイン学ユニットに、教授会、教育委員会、運営委員会を設置し、学内プログラム担当者全員が参加し意思決定する体制を整えた。さらに、産官のプログラム担当者を含む教育協議会と運営協議会を発足させ、产学官でのプログラム実施体制を整えた。また、特定教員を中心とする教員会議を設置し、若手教員の自立的な活動を促進することとした。

本プログラムの継続的な改善を目的として、海外の有力なデザイン学研究科・研究所とのネットワークを形成し、その代表からなる国際アドバイザリーボードを構成した。ボードメンバーは、デザイン学における欧米亜のリーダー、Transferable Skills Training（転移可能な技能訓練）の専門家など、Stanford大学、Harvard大学、Aalto大学、Bristol大学、清华大学などに所属する強力な10名のメンバーからなる。今後、教育研究に関するアイデアや成果を共有するとともに、国際的な見地から本プログラムに対する外部評価を得る。

さらに、デザイン学プログラムに係る産官学連携の強化を目的として「デザインイノベーションコンソーシアム」を設立した。本コンソーシアムには、さまざまな業種の企業や京都府、京都市など計44組織が加入し（平成26年3月末時点）、产学による学生、社会人の人材育成と相互学習を目標として活動を開始した。こうした活動を通じて、大学の博士教育と企業の人材育成をシームレスに接続していく。

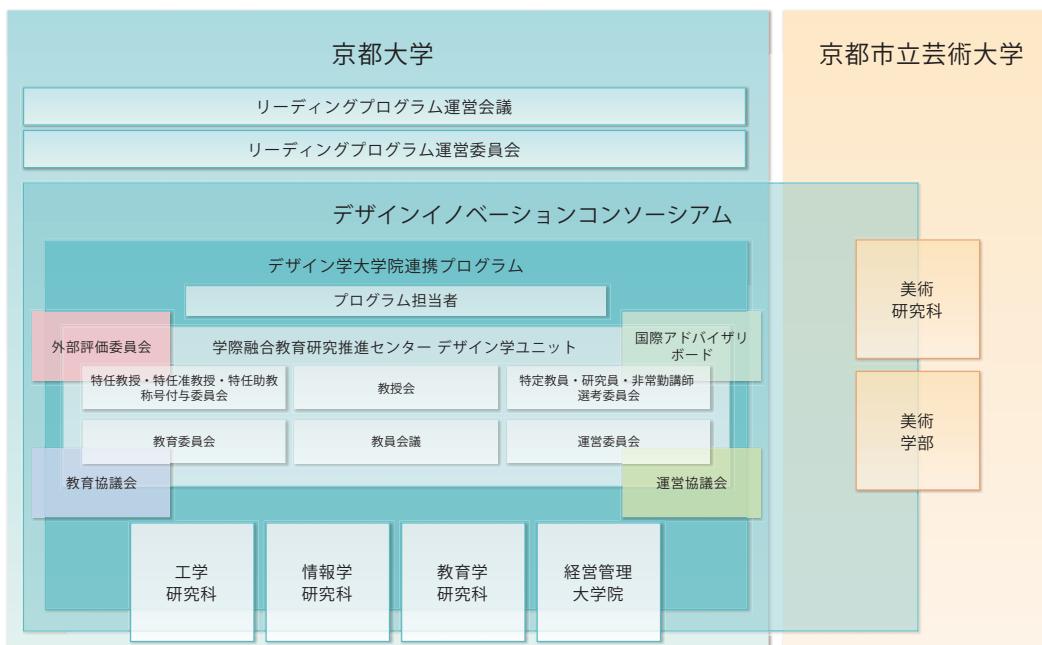


図 1-3 デザイン学ユニットを中心とする組織体制図

## 2 履修生

### 2.1 予科生選抜

デザイン学プログラムの履修者は、まず履修者（予科）選抜を受験し、さらに半年後、履修者（本科）選抜を受験する。このような予科の制度は、前期の間に所属研究科の課程の履修を進めるとともに、デザイン学プログラムの目的と内容を理解し、自らの能力と適性を確認する機会を学生に設けることが目的である。

平成 25 年度は 4 月に教育学研究科（教育科学専攻）、工学研究科（建築学専攻、機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻）、情報学研究科（知能情報学専攻、社会情報学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻）、経営管理教育部（経営管理専攻）の修士課程に入学した学生（情報学研究科は前年度 10 月入学の学生を含む）を対象に募集を行い、下記のスケジュールで履修者（予科）選抜を実施した。

平成 25 年 4 月 8 日	プログラム応募説明会（於：吉田キャンパス、桂キャンパス）
平成 25 年 4 月 15 日	応募締切
平成 25 年 4 月 19 日	応募者への面接日程通知
平成 25 年 4 月 24 日	履修者（予科）選抜（面接）
平成 25 年 4 月 26 日	選抜結果通知
平成 25 年 5 月 1 日	履修者（予科）向け履修ガイダンス

履修者（予科）の選抜においては、願書、志望調書、出身大学の学業成績証明書等による書類審査ならびに面接審査を実施した。その結果、27 名の履修者（教育学研究科 4 名、工学研究科（建築学専攻）5 名、工学研究科（機械理工学専攻）4 名、情報学研究科 8 名、経営管理教育部 6 名）が入学を認められ、9 月末まで履修者（予科）としてプログラムを履修した。

なお、予科の期間は原則として 9 月までであるが、例外的な事情がある場合を考慮し、年度一杯の延長を可能としている。延長する場合は、履修者（本科）選抜時に、例外的な事情の説明を提出する必要がある。例外的な事情とは、例えば以下のようないふたを想定している。

- 経営管理教育部では博士課程が計画中の段階にあるため、博士課程を希望するか否かを判断するためにもう少し時間をかけたい場合。
- 修士課程入学時に専門分野を変更したために、指導教員、履修生共に、博士取得の見込みがあるかどうかを判断するためにもう少し時間をかけたい場合。
- 海外研修中で、指導教員と履修生が十分相談する時間がとれないため、もう少し時間をかけたい場合。

平成 25 年度は、1 名の予科継続者が決定しており、平成 25 年度後期まで継続が承認された。

博士課程教育リーディングプログラム(複合領域型・情報)  
Program for Leading Graduate Schools(multidisciplinary· Information)

デザイン学大学院連携プログラム  
Collaborative Graduate Program in Design

写真貼付  
Photo

平成25年度 願書  
Application for academic year 2013

(記入年月日:2013/ / / )

ふりがな	生年月日 Date of birth		国籍 Nationality
氏名 Full name	㊞ signature	年 月 日 ( 年歳 )	
所属 Affiliation	学生番号 Student ID.No.		
	研究科 Graduate school		
	専攻 Department		
	指導教員の所属・氏名・役職 Academic supervisor	㊞	
現住所 Address	〒 —		
電話番号 Phone	E-mail		
<b>【学歴】</b> ※高校卒業年月から記入してください。 Education (including high school education)			
学校名等 / School name		在学期間(年月) / Period(YYYY.MM)	
		~	
		~	
		~	
		~	
		~	
		~	
		~	

在職期間（年月日） / Period	勤務先名・所属・職名及び資格等 / Employer, position etc.	
～		
～		
～		
<p><b>【賞 罰】</b>  <b>Awards and distinctions</b></p>		
年月 / Date(YYYY.MM)	事項 / Content	
<p><b>【奨学金】受給実績(予定を含む。)</b>  <b>Scholarship (already effective or planned)</b></p>		
支給機関 / Issuing institution	期間 / Period	金額(月給) / Monthly amount

博士課程教育リーディングプログラム(複合領域型・情報)  
Program for Leading Graduate Schools(multidisciplinary· Information)

デザイン学大学院連携プログラム  
Collaborative Graduate Program in Design

※パソコンで作成し、印字したものも可

※You may use PC to print

【志望の動機】(800 字程度)

Reason and motivation for application to this program (approximately 300 words)

## 2.2 本科生選抜

履修者（予科）は予科の4か月の間、デザイン学共通実習科目であるFBL/PBLや、デザイン学共通科目であるインフォメーションデザイン論、組織・コミュニティデザイン論を履修し、9月に履修者（本科）選抜を受験した。

平成25年度は、27名の履修者（予科）を対象に、下記のスケジュールで履修者（本科）選抜を実施した。

平成25年8月9日 応募締切  
平成25年8月27日 履修者（本科）選抜（面接）  
平成25年9月6日 履修者（本科）選抜（面接）  
平成25年9月9日 履修者（本科）選抜（面接）  
平成25年9月20日 選抜結果通知  
平成25年9月24日 履修者（本科）入学式・オリエンテーション

27名の履修者（予科）のうち19名が履修者（本科）選抜に応募し、以下を判断材料として、履修者（本科）選抜を実施した。

- ① デザイン学履修者（予科）での履修状況
- ② デザイン学履修者（予科）での課題提出状況
- ③ デザイン学大学院連携プログラム主催による研究発表会、セミナー、スクール等の実績
- ④ 面接審査の結果
- ⑤ TOEFL/TOEIC/IELTSの成績（ただし、大学院入試科目にこれらを課していない教育学研究科大学院生は指導教員の推薦書をもって替えることが可能）

その結果、13名の履修者（教育学研究科3名、工学研究科（建築学専攻）4名、工学研究科（機械理工学専攻）1名、情報学研究科3名、経営管理教育部2名）が履修者（本科）として選抜され、10月以降、所属研究科の修了要件を満たすよう単位等を取得しつつ、京都大学－琉球大学合同デザインスクールなどの各種イベントや、デザイン学共通科目のデザイン方法論、アーティファクトデザイン論、フィールド分析法などデザイン学連携プログラムを本格的に履修した。

## 2.3 予科生合宿

平成 25 年 6 月 8 日（土）～ 9 日（日）に滋賀県高島市朽木村で予科生合宿を行った。

普段あまり顔を合わせることがないデザインスクール予科生たちが、一同に会して合宿を行なった。

1 日目はまず、学生と教職員の区別なく、1 人 3 枚の写真を使った自己紹介でスタートした。夕食はバーベキューで盛り上がり、温泉に入った後の 2 次会は夜が更けるまで続いた。デザインスクールのことや将来のことなどを語り合い、当日誕生日を迎えた予科生にケーキが贈られるサプライズもあった。

2 日目は、かつて交通の要衝として栄えた朽木の旧市街を散策。各自 1 枚の勝負写真を持ち寄った写真大会も行なわれた。また「丸八百貨店」というコミュニティカフェに場所を借り、地元の方に街の歴史のミニレクチャーをお願いした。

梅雨時にもかかわらず天気に恵まれ、朽木の自然と歴史の中で、大いに親睦を深めた 2 日間となった。

## 2.4 本科生の研究活動支援

デザイン学プログラムでは、助成期間後半の学生数の増加に対応するために、博士課程における教育研究に専念するための給付型支援経費である奨励金は設けず、プログラム終了後の継続性を維持するため、学振の特別研究員への申請支援を強化している。その一環として、「博士課程教育リーディングプログラム履修生研究活動経費取扱要領」および「デザイン学大学院連携プログラム履修生研究活動経費に関する内規」に基づき、履修者が自発的に独創的な研究活動を行うために必要な経費の支援を目的として、応募制により、審査のうえ、研究活動経費を支給している。

本経費は、全体予算を勘案し、海外での研究活動のための旅費を含めて 1 人当たり年間 120 万円（半期の場合は 60 万円）の範囲で募集人数と合わせて上限を設けている。なお、募集に際し、申請額の上限および採択する受給者数の上限を明示し、併せて海外での研究活動のための旅費が必要な場合は、研究活動経費の一部として計上することとしている。

原則として、年に一回募集を行い、応募期間については、支給開始年度の前年度末までに支給者を決定することができるよう設定する。ただし、年度途中に新規履修者のみを対象とした募集を行う場合は、履修開始までに支給者を決定することができるよう設定する。平成 25 年度は、新規履修者（本科）のみを対象としたため、平成 25 年 10 月 4 日を締切として、9 月に公募を行った。

履修者（本科）は、リーディングプログラム研究活動経費申請書に記載して、本研究活動経費に応募する。審査は、提出された研究活動経費申請書ならびに前期成績に基づいて、本プログラムが設置する選考委員会によって厳正に行う。なお審査にあたっては、研究課題の学術的重要性、独創性に加えて、本プログラムの目標との整合性を評価する。

平成 25 年度は、11 名の応募があり、申請額の総額 624 万 5400 円に対し、審査の結果、総額 588 万 8000 円を配分している。

## 博士課程教育リーディングプログラム研究活動経費申請書

申請者	氏名	ふりがな (自署)	
	所属研究科・専攻・学年		学籍番号
<b>申請者の略歴及び研究活動歴</b> (略歴) 年 月 ○○高等学校卒業 年 月 △△大学□□学部入学 年 月 △△大学□□学部卒業			
(研究活動歴)			
研究課題名	(日本語)		
	(英語)		
本課題研究についての研究補助金の支給状況	<input type="checkbox"/> 受けていない。(チェックのみ)		
指導教員の所属・氏名・役職	<input checked="" type="checkbox"/>		
指導教員の本課題研究についての所見			
<b>選定理由</b> (プログラムコーディネーターが記入するため、申請者は記入しない)			

様式第1-2			
研究課題名 (日本語)		申請者氏名	
<b>研究目的</b> 〔研究の全体構想及びその中の本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。 ① 研究の学術的背景（本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等） ② 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義〕			
<b>研究目的（概要）</b> ※当該課題研究の目的について、簡潔にまとめて記述してください。			
<b>研究目的</b>			

**研究計画・方法**

〔当該課題研究の目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、課題を完遂するための全容と本年度の具体的な計画・方法について、量頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、具体的かつ明確に記述してください。必要があれば、適宜文献等の引用を行うことも可能です。〕

〔なお、記述にあたっては、5ページめの研究活動経費の明細との関連性が分かるようにしてください。〕

**研究計画・方法（概要）** ※ 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

研究計画・方法

(申請者氏名： )

## 様式第1-5

研究活動経費の明細（研究計画・方法を踏まえ、可能な限り具体的に積算してください。）		
経費区分・摘要	金額	備考
設備備品費（品名・仕様） (例) 実験器機名（型番） 1台	円	※1組100万円以内
旅費 (例) 研究打合せ 東京大学（2泊3日）1回	円	円
通信運搬費 (例) 資料送付 10件	円	円
印刷製本費 (例) ポスター 1枚	円	円
消耗品費 (例) 試薬 10本 実験器具（○○、○○、○○） 1式	円	円
会議費 (例) 研究集会会場借料（10名）	円	円
その他 ※ (例) 論文投稿料 3件 計算機リース料 1台（8月～12月） 研究集会講演謝金（1回×2名） 研究集会参加料 1回	円	円
合 計	円	

※論文等校閲料、論文投稿料、計算機・データベース等使用料、機器等賃借料、専門知識の提供に係る謝金、研究集会等  
参加費等

（申請者氏名： ）

### 3 科目と履修

#### 3.1 デザイン学共通科目

##### (1) 講義

デザイン学の基礎を共通的に教育するために、以下の5科目の講義を新設した。

##### デザイン方法論（Design Methodology）

21世紀を迎えて、デザインとは何か、デザイン方法とは何かを問い合わせることが求められている。単に人工物を作ればよかつた時代は終わり、人工物相互の関係、人工物と環境・人間との関係、さらに人間相互の関係など、多種多様な関係性を含む環境・社会システムを創り出すことが求められている。今日のデザインの役割は、人工物を含むシステム・インテグレーションを通して、豊かな経験を創り出す「人間中心のデザイン」を展開することである。

本講では、1960年代に始まったデザイン方法研究の歴史を踏まえて、クラフト・工業製品、建築・都市、景観・環境、モビリティ、コミュニティ・社会、ビジネス、情報・記号などのデザインの諸領域に通底するデザインの問題、方法、プロセス、思考、さらにデザイン科学の在り方を問い合わせし、デザインの基礎理論としてのデザイン方法論を解説する。

特に、創造的なデザイン思考の仕組みを解明することは、身近な生活上の問題から人類が直面する多くの困難な課題に至るまで、多岐にわたる問題を解決していく上できわめて重要なことから、デザインプロセスを記号過程とみなし、創造的なデザインを生成する仕組みを解説するデザイン記号論（デザイン情報学）について、事例も含めて詳述する。

##### アーティファクトデザイン論（Artifact Design）

デザインの対象は、機械、建築物、情報システム、社会システムなど多岐に及ぶ。本講では、人工的なものをひとまとめにする「人工物（アーティファクト）」の概念についてまず明らかにし、自然の法則と人間の目的の両者を併せ持つ事物や現象を扱うための科学をデザインの科学として論じる。人工物と自然物を明確に分ける特徴は、前者には人間の意図が込められており、それはもともと存在していた自然物とは違う効果を、人間を含む外界に対して与える点にある。このように人工物が外界すなわち他のものに与えている効果は“機能”と呼ばれるが、本講ではとくに機械工学分野において従来人工物の機能と構造の関係に着目して展開してきた機能に着目した設計論について概説する。さらに、現代におけるアーティファクトの原型を、人と機械（技術）と組織が複雑に絡み合う相互作用系（Socio-Technical Systems）として捉える。このような複雑系においては、個々に独立であった人工物があるとき突然全体が有機的なシステムとなって想定されていた機能の加算性が失われ、未知の機能が創発し、ときに人間による制御の限界を超えてしまうことも起こりかねない。従って、自然物が呈する物理的法則と人工物の機能とを一体として対象化し、それに対する操作法を設計していかねばならない。本講ではこのようなシステムが目的を達成しその機能を正常に実現できるようにするためのデザインの活動について、現場観察に基づくデザイン課題の発見に始まり、対象物としての人工物の機能分析とこれを使う人の認知・決定・行為の道筋を探索し、その使用状況に関するダイナミクスの予見に基づくアセスメントを繰り返しながら、より安全で使い勝手のよいシステムのデザインに導くための原理と方法論について講述する。

### インフォメーションデザイン論（Information Design）

どのように価値のある情報も人間に対して効果的に伝達できなければ意味が無い。情報を効果的に伝達するには、情報を構造化するとともに、理解しやすい形に表現・可視化する必要がある。情報デザインとは、情報を対象者に的確に伝えるための手法、人間とモノや環境との関係性にかたちを与える方法論、生活の中にあふれる無数の情報をわかりやすく提示する手法である。

本講義では、情報デザインとは何か、情報デザインの目的や方法、情報の分類・構造化、言語表現のデザイン、映像のデザイン（映像文法）、情報可視化、インフォグラフィックス、インターフェース・インタラクションのデザイン、情報の理解と信頼性など、情報デザインのための技術・方法論について講述する。

### 組織・コミュニティデザイン論（Organization and Community Design）

組織やコミュニティを対象とした「社会のリ・デザイン」の理論と方法論について学ぶ。社会はどのように構成されているのかという理論的議論から始め、社会をどのようにリ・デザインするのかという方法論的議論までをカバーする。

特に、人、関係性、行為という社会的な対象をデザインするということは、物質性（モノやコト）をデザインするときとは根本的に違うスタンスが求められる。誰かが超越的な立場からある人、ある関係性、ある行為をデザインしようとする事は不可能である。デザインする人はデザインする対象に内在的にデザインするしかない。さらに社会を脱中心化することを進め、我々はデザインとは言語的パフォーマティブであることを説明する。言語的な行為を通して意味が構成され、社会が形作られる。この言語的パフォーマティブは、政治的であると共に、社会の中で再帰的に実践する内在的なものである。そのため特定の社会的対象をデザインするには、超越的ではなく内在的に他の人と対等な関係で、言語的パフォーマティブを通して、現在の社会的対象に潜む矛盾を掘り表すことで、新しい組織やコミュニティのあり方を構築していくことができる。

この授業では、このような理論的理解を踏まえて、実際にフィールドで調査し、デザインを発想し、実装するまでを行う。2013年度はコミュニティベースでの地域活性化活動が有名な鳥取県智頭町で2泊3日の合宿を行い、学生が4名程度のチームを作り、現地でコミュニティデザインを実践した。

### フィールド分析法（Methodology for Field Analysis）

現実世界（社会）での製品、サービス、事業などのデザインを行うために必要なフィールド分析の方法論として、フィールドでの調査法（エスノグラフィ、アンケート調査法など）、定量分析法（各種統計解析法）、モデル構築およびシミュレーション技法について演習をまじえて講述する。

平成25年度の講義では、まず、現実世界（フィールド）で生じている事象を把握するための調査方法である、アンケート調査、社会調査の方法やエスノグラフィの手法について教授した。次に、統計解析アプリケーションとして近年普及してきているRを用いて、アンケート調査、統計資料、フィールドでの測定値等から得られる数値データの統計解析手法について、Rの操作方法および各種統計手法の目的や概念等について解説を行った。これらの調査法、分析法に関する学習の後、「大学周辺での飲食に関連したサービスを立ち上げる」という課題を与え、受講生を複数のチームに分け、それぞれのチームで実際にフィールド調

査やアンケート調査などに取り組むデザインワークショップを実施し、最終講義の時間に各チームの成果発表会を行った。

## (2) 実習

デザイン学を実践的に学ぶために、以下の科目を新設した。

### 問題発見型／解決型学習（FBL/PBL）

本科目は、FBL (Field-Based Learning)を通して、与えられた実世界の状況から解決すべき問題を発見するプロセスをチームで体験することで、デザインの実践を行い、デザイン理論とデザイン手法の習得を行い、また、PBL (Problem-Based Learning)を通して、与えられた実問題をチームで解決するプロセスを体験することで、デザインの実践を行い、デザイン理論とデザイン手法の習得を行う。本科目で扱うテーマは、デザイン学に参画する各分野の教員が研究として取り組む実問題と、企業や自治体などから持ち込まれる実問題を実習化したものである。

本科目では以下を目的とする。FBLにおいては、(1)与えられた実世界の状況を観察し、分析することで、状況の構造を理解し、根本原因となっている解くべき問題を発見すること、(2)問題を発見するにあたって必要なデザイン理論を習得すること、(3)問題発見に必要なデザイン手法を習得し、プロジェクトの中で実践すること、(4)現実的に解決可能な問題を定義すること。PBLにおいては、(1)問題解決に必要なデザイン理論を習得すること、(2)問題解決に必要なデザイン手法を習得し、プロジェクトの中で実践すること、(3)実現可能な解決策を立案すること。

平成25年度は以下の11テーマを実施した（括弧内は実施責任者）。

#### （前期）

- クラウドソーシングにおける組織デザイン（情報学研究科 石田亨）
- コミュニティ・ガバナンスに基づく街並み景観のデザイン（工学研究科 門内輝行）
- 参加型システムズ・アプローチによる戦略的意思決定実践（工学研究科 植木哲夫）
- ロボットと社会のデザイン（工学研究科 松野文俊）
- 人間の関係性に変化を与える“おもちゃつくり”のデザイン（工学研究科 松原厚）
- 防災と社会のデザイン（防災研究所 林春男）
- 病院のデザイン（自由実習）（経営管理大学院 山内裕）

#### （後期）

- 「ファストフード」のサービスの体験をデザインする（経営管理大学院 山内裕）
- 学習環境のデザイン（教育学研究科 楠見孝）
- 集落エリアにおける新たな居住のデザイン（京都市京北地区）（工学研究科 神吉紀世子）
- 病院のデザイン（自由実習）（経営管理大学院 山内裕）



二足歩行ロボットの製作  
(ロボットと社会のデザイン)



農家へのインタビュー  
(集落エリアにおける新たな居住のデザイン)

### オープンイノベーション実習（Open Innovation Practice）

本実習では、社会の実問題を発見し解決するデザイン活動のために、関係する専門家あるいはステークホルダーに依頼し、オープンイノベーションのためのチームを構成し、ワークショップを連続的に実施することで目標を達成する。履修者の役割は、専門家として問題解決や問題発見に参加することではなく、あくまでも、上記のオープンイノベーションのためのチームを構成しマネジメントすることである。これによって、履修者のコミュニケーション能力、マネジメント能力を鍛えるとともに、実践を通じてデザイン活動を成功に導くためのデザイン理論やデザイン手法を身に付ける。

本実習は QE 合格後の配当科目であり、現在は平成 27 年度以降の単位化に向けた準備を進めている。具体的には、一例として次のような枠組みを策定した（図 3-1）：

- 学外の実施法人がオープンイノベーションの実施主体となり、京都大学と「オープンイノベーションの方法」について共同研究契約を締結する。
- 企業と実施法人が「オープンイノベーションの内容」について業務委託契約等を締結し、当該企業が実際に抱える課題について、実施法人にオープンイノベーションチームを設置して解決策を探索する。（学外の実施法人で実施することにより、オープンイノベーションにより生じた知財を企業が自由に活用できる）
- オープンイノベーションチームには学内外の専門家が専門委員として、学生が学生委員としてそれぞれ加わり、デザイン学の履修者はそのオーガナイズ役を務める。

さらに、コンソーシアム会員企業の協力を得て実際に試行を行った。今回の試行では、座長 1 名、課題提供者（企業）5 名、専門委員 6 名、学生委員 7 名、ファシリテータ 1 名でオープンイノベーションチームを構成し、企業が実際に抱える課題をテーマに、専門委員会を 2 回、学生委員会をのべ 3 日間、それぞれ開催した。課題提供者からは、「専門委員会での議論は非常に有益であった」「企業だけでは開拓の難しい領域で人脈ができ、価値があった」といった意見を頂き、上記の枠組みが実際に機能することを確認できた。一方で、次のような課題が明らかになった：

- 企業からの業務委託によるオープンイノベーションは明確な成果を要求されるため、教育として柔軟に実習を設計することが難しい。
- 課題提供者はデザイン学の履修者がアイデアの検討に参加することを期待しており、

ファシリテータとしてしか参加しないという枠組みには不満を持っていた。

- 一方で、学生委員会の有用性については疑問が残った。学生委員会で検討されたアイデアの多くはすでに課題提供者自身が検討済みであったり、ビジネス化するには検討内容が浅いといったことがその理由である。
- 課題提供者にとってのオープンイノベーションへの関わり方が曖昧であった。各委員会における情報提供者なのか、いち参加者としてワークに参加するのか、学生（または自社の社員）の教育なのか等。

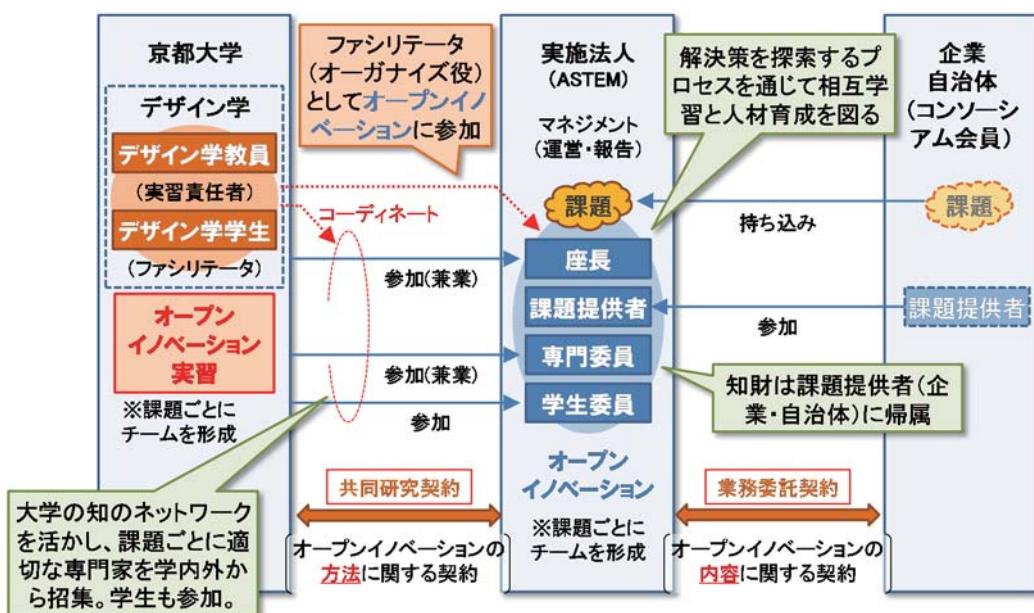


図 3-1 オープンイノベーションの実施体制図

### (3) コミュニケーション科目

#### 戦略的コミュニケーションセミナー（日本語／英語）(Strategic Communication Seminar (Japanese/English))

コミュニケーション能力を強化するための短期集中型セミナー。英語コースと日本語コースから構成される。英語コースでは、ベルリッツ・ジャパンの持つ豊富なコンテンツを濃縮し、英語によるプレゼンテーション、スピーキングなどの能力の強化を目的とした演習をベルリッツの講師により実施する。日本語コースでは、(財) NHK 放送研修センター日本語センターの持つコミュニケーションノウハウを濃縮し、スピーチ、ネゴシエーションなど話す、伝える能力の強化を目的とした演習をセンターのエグゼクティブ・アナウンサーにより実施する。

### (4) スキル科目

#### 情報学演習 I / II (Informatics Practice I / II)

本科目は、デザイン学を学び、また、デザインを実践する過程において必要となる情報技術のスキルを身につけるための科目である。デザイン学の学生の中には、情報学を専門とし

ない学生も多数いるが、自らのデザインにおいて、しばしば情報技術のスキルが必要となる。そこで、本科目で学ぶ情報技術のスキルは、あらかじめ決められたものとはせず、受講者が習得したい情報スキルを明らかにし、それを学ぶことができるよう内容を決めてることとしている。受講者は、自らが必要とするスキルだけを効率よく身につけることができる。想定している情報技術のスキルとしては、Web プログラミング、Web 調査技術（クラウドソーシング技術）、3D モデリング技術、人間の行動分析、情報デザイン、アルゴリズミックデザインなどがあげられる。

平成 25 年度の前期に開講された情報学演習 I では、Web サービスを利用するプログラムの作成、正規表現とその利用、データベースの設計の方法と実際の利用、Processing を用いた情報の可視化などを行った。平成 25 年度の後期に開講された情報学演習 II では、Web アプリケーションを作成する技術について学ぶため、プログラミング言語である Ruby や Web ページを記述する HTML やそれを操作する JavaScript、さらに、Web アプリケーションフレームワークである Ruby on Rails を学んだ。

#### 心理デザイン研究法特論／演習（Advanced Studies: Research Methods in Psychology and Design Studies/Seminar on Research Methods in Psychology and Design Studies）

心理デザイン研究法特論の目標は、受講者がデザイン学・心理学・教育学などの分野における量的なデータを目の前にした際に、仮説検証型の分析を実行するために必要かつ有効な統計手法に関する知識を身に付けること、そして、それらの統計手法を自らの研究デザインに活用して、その成果を相手に対して正確にかつ効率よく伝えることができるようになることである。具体的には、統計改革の中、今後適切に理解しておく必要があると考えられる効果量・信頼区間・検定力・ベイズ統計などの概念について重点的に講義を行い、それについて論理や分析事例について紹介した。また、受講者には、講義を受けた統計手法を用いて検討を行った実証論文を複数検索し、それらの文献について各自で調べたうえで授業内に適宜報告することによってさらなる理解の深化を求めた。

また、心理デザイン研究法演習においては、とりわけ心理学領域の観点から、研究のアイディアを検証するために必要となる実験や調査を適切に実施するための基礎を築き、また、データから仮説検証型の研究を行うために必要な統計手法の基礎を習得することを目標とする演習形式の授業を実施した。具体的には、心理学研究の方法論とは何か、複数のデータ収集の方法・特徴・プロセスの比較、心理学における実験・準実験の論理と方法、仮説の検証・追試のための統計学の基礎などのテーマについて取り上げた。さらに、受講者は、「ことわざ（の真偽）を検証するための実験計画を立てる」、「交互作用を検出するための実験計画を立てる」、「実証論文の問題と目的はどのように書くと効果的か」などのテーマでグループワークを行い、それぞれの成果についてグループごとに報告を行った。

### 3.2 デザイン学領域科目

情報学、機械工学、建築学、心理学、経営学の各領域で概論科目を新設すると共に各領域の既存科目をデザイン学科目として履修可能とした。

#### (1) 情報学領域

##### 情報通信技術のデザイン (Design in ICT)

コンピュータと通信網は人類が生み出した最も複雑な人工物であるが、専門性による分化の進展等により、これらの構成原理となるデザインを包括的に知ることが困難となっている。本講義では、情報通信技術の設計原理を、(1) 階層的抽象化、(2) トレードオフ、(3) 人と社会の模倣、(4) エコシステムの形成、の4点であると捉え、具体例を通じてその原理を学ぶ。また、今後の情報通信技術のデザインの方向性と先端動向を、上記の設計原理を用いて述べる。

##### 数理とデザイン (Industrial Mathematics and Design)

現代社会の複雑な諸問題を解決するための分野横断的視点やデザイン的思考を支える数理的共通言語として、数理モデリングの方法論、統計的データ解析、および数理最適化を取り上げる。対象をモデリングする際に使われる数理工学の様々な概念を概観し、モデリングに関する俯瞰的な視点を養うとともに、数理モデルを活用した系統的な問題解決の方法論としてデータ解析や最適化について学ぶ。実際の問題に取り組む際に有用なツール、ソルバーについても紹介する。

また、以下の既存科目を履修可能とした。

パターン認識特論 (Pattern Recognition, Adv.)

言語情報処理特論 (Language Information Processing, Adv.)

アルゴリズム論 (Introduction to Algorithms and Informatics)

伝送メディア工学特論 (Transmission Media Engineering, Adv.)

ビッグデータの計算科学 (Computational Science for Big Data)

スーパーコンピューティング特論 (Supercomputing, Advanced)

最適化数理特論 (Optimization Theory, Advanced)

Artificial Intelligence, Adv. (人工知能特論)

制御システム特論 (Control Systems Theory, Advanced)

統計的システム論 (Statistical Systems Theory)

共生システム論 (Theory of Symbiotic Systems)

情報社会論 (Social Informatics)

情報と知財 (Information and Intellectual Property)

情報ネットワーク (Information Networks)

情報システムデザイン (Information System Design)

防災・減災デザイン論 (Designs for Emergency Management)

## (2) 機械工学領域

### 複雑系機械システムのデザイン (Design of Complex Mechanical Systems)

これから機械システムに要求されている機能は、環境と調和、共存する適応機能である。この種の機能は従来のかたい機械システムでは実現できず、その実現のためには、機械システムは環境に応じてその構造を変化させその応答を変える柔らかな機械システムとならなければならない。本講義ではこのような柔らかな機械システムを、環境の影響のもと、動的で多様な挙動を示す複雑な構造を持ったシステムとして捉え、その挙動を通して我々にとって有益な機能を実現する複雑系機械システムについて、その支配法則の解明と、生活分野や芸術分野をも対象にするシステム設計への展開について講述する。

また、以下の既存科目を履修可能とした。

動的システム制御論 (Control Theory for Dynamic Systems)

設計生産論 (Design and Manufacturing)

ロボティクス (Robotics)

デザインシステム学 (Design Systems Engineering)

技術者倫理と技術経営 (Engineering Ethics and Management of Technology)

最適システム設計論 (Optimum System Design Engineering)

## (3) 建築学領域

### 建築・都市デザイン論 (Design Theory of Man-Environment Systems)

建築・都市、環境・景観のデザイン領域では、デザイン対象を狭い意味での人工物環境を超えて、広く人間－環境系へと拡張することが強く求められている。デザイン理論は、デザイン対象と切り離した一般理論として構築するだけでは不十分で、デザイン対象とデザイン方法を総合的に捉える「人間－環境系のデザイン論」を展開することが不可欠である。なぜなら、デザイン対象に関する感性・知識がデザインプロセスに大きな影響を及ぼすからである。本講では、建築・都市計画、建築・都市デザイン、ランドスケープデザイン、歴史意匠、社会システム工学、環境工学等の多角的な視点から、建築・都市領域のデザイン理論とデザイン方法を講述するとともに、ケーススタディとして幾つかのデザインプロジェクトの実践を試みる。

また、以下の既存科目を履修可能とした。

建築構造デザイン論 (Design Theory of Architectural Structure)

建築環境計画論 (Theory of Architectural and Environmental Planning)

人間生活環境デザイン論 (Design Theory of Architecture and Human Environment)

生活空間学特論 (Theory of Architecture and Environment Design, Adv.)

建築設計力学 (Design Mechanics for Building Structures)

高性能構造工学 (High Performance Structural System Engineering)

環境制御工学特論 (Environmental Control Engineering, Adv.)

#### (4) 心理学領域

##### 認知デザイン特論（Advanced Studies: Cognition and Design Studies）

デザインという人間の営みを、脳・心・行動の3つの水準で捉える認知心理学の理論から、総合的に考察することがこの授業の目的である。まず、脳・心・行動そのものがそれぞれどのようにデザインされているのかを知ることが重要である。次に、脳・心・行動のもつ制約と、その制約を逆手に取った豊かな認知的活動との関連を考察する。その次に、脳・心・行動のどのようなはたらきがどのような豊かなデザインを生み出しうるのかについての関連性を文芸・絵画の事例を取り上げて考察する。

最後に、豊かなデザインを生み出す能力を高めるために、脳・心・行動を発達させ、活性化させるためのさまざまな環境要因について考察する。

また、以下の既存科目を履修可能とした。

##### 心理システムデザイン演習Ⅰ／Ⅱ（Colloquium on Cognitive Psychology in Education I / II）

##### 心理デザインデータ解析演習（Seminar on Data Analysis in Psychology and Design Studies）

##### 認知機能デザイン論（Design of Cognitive Functions）

##### デザイン心理学特論（Advanced Studies: Cognitive Sciences）

##### 脳機能デザイン演習（Seminar on Brain Function and Design Studies）

#### (5) 経営学領域

##### 事業デザイン論（Business Design）

本授業科目は、リーディング大学院デザインスクール関連科目として開設される実践的な事業デザインのワークショップである。新規ビジネスを企画する、既存ビジネスを評価・改善する、既存ビジネスの新たな革新的な展開を企画する、など、ビジネスプランを全体的に構想することを学ぶ実践的な授業である。

本科目では、そのために『ビジネスモデル・ジェネレーション』が提示する「ビジネス・モデル・キャンバス」というフレームワークでビジネスを分析・企画することを学ぶ。そして、ビジネスモデルの各要素でとりうるバリエーションを具体的な事例を通じて学んで選択のアイデアを広げるとともに、ビジネスモデルの各要素が連携して1つの全体システムを形成するように調整することを学んで、総合的で一貫性のあるビジネスを構想できるようになる。そこで、授業の主要な内容は、ビジネスモデルの各要素の選択についての講義とミニグループ討論、「ビジネスモデル・キャンバス」にもとづく既存ビジネスの分析と改革プランの企画などのグループワークとプレゼンテーションなどである。

また、以下の既存科目を履修可能とした。

##### デザイン経営論（Design Management）

##### 研究・事業開発マネジメント（Managing Innovation: From R&D towards New Business Development）

##### サービス経営論（Service Innovation Management）

##### マーケティングリサーチ（Marketing Research）

##### デザインエスノグラフィ（Design Ethnography）

## 4 拠点の形成

### 4.1 拠点とその位置づけ

教育の効率化とプログラムの可視化を目的に以下の拠点を置くこととした。

#### (1) センター

プログラムのリソースを集約し共同利用するためのキャンパス内外の施設。

- 施設の管理はプログラムが行う。
- 施設のスペース並びに施設に設置する設備はプログラムが用意する。
- キャンパス外の施設には複数名のデザイン学教職員が常駐する。
- KRP のデザインイノベーションセンター、吉田キャンパスのデザインファブリケーションセンターがこれにあたる。

#### (2) サテライトオフィス

学外組織と連携しプログラムの教育を行うためのオフィスをキャンパス外に施設。

- 施設の管理は学外組織が行う。
- 施設のスペース並びに施設に設置する設備は学外組織が用意する。ただし、プログラムが、施設維持のための経費負担や、教育のための設備購入を行うことがある。
- 施設に教職員が常駐することはない。
- フィールドインターンシップなどで必要となる拠点がこれにあたる。

#### (3) 拠点の名称

正式な名称は、「京都大学デザイン学大学院連携プログラム○○センター」「京都大学デザイン学大学院連携プログラム○○サテライトオフィス」とし、○○には機能、地名などを表す適切な語句を用いる。ただし、以下のように呼ぶことは差し支えない。

- 「京都大学デザイン学大学院連携プログラム○○拠点」と通称する。
- 「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」の部分を「京都大学デザイン学」「京都大学デザイン学大学院」「京都大学デザイン学リーディング大学院」と通称する
- 「センター」の部分を「ラボ」と通称する。
- 「サテライトオフィス」の部分を「分室」「サテライト」「オフィス」と通称する。

#### (4) 拠点開設の手続き

新規開設には以下の条件が整い、ユニット教授会で承認される必要がある。

- 複数名の教員（デザイン学ユニット構成員）が担当すること。
- 費用が発生する場合には、費用対効果が説明できること。
- サテライトオフィスの場合には、連携先組織の代表者、連絡担当者が明確で、覚書きを取り交わすことが合意されていること。

## 4.2 デザインイノベーション拠点

### (1) 拠点の概要

京都大学デザインイノベーション拠点は、産官学連携、国際連携、大学間連携、学内連携による教育の推進を目的として、京都大学の吉田、桂、宇治キャンパスと連携先の京都市立芸術大学の中間にある京都リサーチパーク（KRP）9号館（写真）に設置された。ここでは主として、デザイン学カリキュラムにおける問題発見型／解決型学習、オープンイノベーション実習、リーディングプロジェクトを実施するとともに、デザインイノベーションコンソーシアムとの連携によるオープンイノベーション機能を有する、フューチャーセンターも整備されている。

その概要は以下の通りである。

- 所在地：京都市下京区中堂寺粟田町 91 京都リサーチパーク 9号館 506
- 面積：約 815 m<sup>2</sup>
- 整備年度：平成 24 年度～平成 25 年度
- レンタル期間：平成 25 年 1 月～平成 31 年 3 月



京都リサーチパーク9号館外観

### (2) 施設と設備

ワンフロアの大空間に、異なる領域の人々の「出会い」や「対話」、「気づき」や「ひらめき」が生まれ、「イノベーション」の創出を誘発することができる空間をデザインしている。具体的には、メインエントランスを入ると、長い「メインコリドール（廊下）」が奥の広場空間としての「フレキシブルスペース」まで続いており、このコリドールに沿って、エントランス近くから順に「サポートスタッフスペース」「会議室」があり、さらに「教員スペース」「セミナースペース」「フューチャーセンター」「実験設備ブース」が続いている。広々とした「フレキシブルスペース」の周りは「リーディングプロジェクトブース」が囲む。

拠点の全体平面図を図 4-1 に示し、代表的なスペースに関して以下に詳細を述べる。

#### セミナースペース

各種の講義やセミナーエベントが行われる空間である。壁面に大きく映写するプロジェクタと音響機器などの AV 設備が整備されている。また軽量のパネルカーテンによって周りと仕切って使うこともできる。椅子や机は自由に配置でき、最大 40 席程度まで席を確保することができる。さらに遠隔講義システムによって、本拠点と吉田キャンパス、桂キャンパスの間で、講義などを相互に聴講することが可能となっている。



セミナースペース



図 4-1 デザインイノベーション拠点 全体平面図

### フューチャーセンター

フューチャーセンターとは、産官学、地域住民など社会のさまざまなステークホルダーが集って、社会の将来ビジョンについて語り合う場であり、欧州を中心に普及の動きを見せている。本プログラムではデザインイノベーションコンソーシアムとの連携のもとフューチャーセンターを運営する。空間は、ソファが設置されテレビ会議も可能な「ディスカッションラウンジ」と、コンソーシアム会員から派遣された「デザインイノベーション拠点フェロー」が滞在・打合せなどを行なう「フェロースペース」の二つに分けられ、窓の外に広がる京都の街並みや山並みの景観を眺めながら、広い視点から思考できる環境となっている。



ディスカッションラウンジ



フェロースペース



教員ブース

## フレキシブルスペース

15m×20m 程度の大きさの広場空間であり、問題発見型／解決型学習などのワークショップスタイルの演習が行なわれる他、各種の発表会、交流会も催される。持ち運び可能で、自由にセッティングできるテーブルや椅子、ホワイトボードを用意し、ディスカッションが自然発生的に生まれる出会いの場を創造している。特に、台形テーブルは多様な組合せを可能にし、カラフルな椅子は活気のある雰囲気を醸し出す。さらに、広場空間の一画には、プロジェクトブースの仕切りにオレンジ色の紙を挟んだオレンジボードが設置されており、リラックスした雰囲気でフリーディスカッションを行うことができる場が設えられている。



フレキシブルスペース



ワークショップの様子



リーディングプロジェクトブース

## リーディングプロジェクトブース

フレキシブルスペースの周囲には、博士課程学生がリーディングプロジェクトを展開する 11 個のブースが配置されている。フレキシブルスペースに比べて、長期間滞在して研究やデザインの実践を行うことが可能な空間である。自立したフレームによって自由な空間構成ができる「スマートインフィル」というシステムを導入し、電線・LAN ケーブルなどを柱・梁に収納し、短焦点のプロジェクタを設置している。そこではコラボレーションによる集中作業が行われる。なお、フレキシブルスペースとプロジェクトブースは、コート&ケイブ（広場&洞窟）形式の空間構成といえる。

### （3）拠点の利用

本拠点は、多くの講義やイベントで用いられている。この利用を支援するために、最も多くの関係教員・学生が所属する吉田キャンパスと桂キャンパスを結ぶ学内のシャトルバスの拠点付近での停車を認めてもらっている。

また本拠点は、文部科学省の「国立大学等の特色ある施設 2013」に選定された。他に京都リサーチパークのニュース媒体である「KRP PRESS vol.130」にも「デザインイノベーション拠点 KRP 9 号館に開設」と題する特集記事が掲載されている<sup>2</sup>。

さらに、イノベーションを創発する新しい空間構成を実現した拠点には、国内外から多数の見学者が訪れており、積極的にそれを受け入れている。

<sup>2</sup>KRP PRESS, vol.130, 京都リサーチパーク株式会社, 2013 年 5 月.

#### 4.3 デザインファブリケーション拠点

##### (1) 拠点の概要

機械工学の実験工場跡地(約300m<sup>2</sup>)を活用した「デザインファブリケーション拠点」は、最新のデジタルファブリケーション機器を導入し、アイデアを実体化したプロトタイピング、パフォーマンス、ディスカッション、プレゼンテーションを行うなど、異領域の学生・専門家が協働する場として活用されている。

- 吉田キャンパス工学部研究実験棟151室(338m<sup>2</sup>)。
- プロトタイピング、パフォーマンス、ディスカッション、プレゼンテーション用のスペース、および機器を備えている。
- 吉田キャンパスで異領域の学生・専門家が協働するための拠点。
- 週二日、教務補佐員が常駐し、教材作成・機器利用の手引き・機器とスペースのメンテナンスを実施。

拠点整備の経緯は以下の通りである。

- 2013年6月：サイト整備、設備設置開始
- 2013年7月：設計方針の策定開始
- 2013年9月：改修開始
- 2013年11月：部分利用開始
- 2014年3月：整備完了(利用規則、ガイド策定等の整備は継続)

##### (2) 施設と設備

形や体で作り出す表現を通して未来を想像・創造する場として機能することを目的としてデザインした。デザイン学に関わるアクティビティをサポートする多数の studio が点在しつつ有機的に連携するように空間を構成した。サポートする studio は下記の通りである。

fabrication studio
sealed studio
creation studio
deliberation studio
presentation studio
performing studio
testing studio
exercise studio
chat studio
research studio
residential students studio
temporal students working studio
guest studio
exhibition studio
storage studio

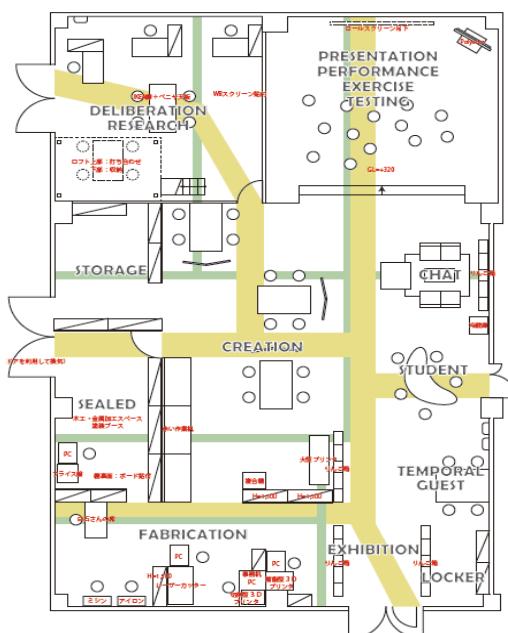


図 4-2 デザインファブリケーション拠点平面図

これらの studio を利用して、行為と省察 (reflection and action)、静寂と躍動 (tranquility and liveliness)、静と動 (static and dynamic) といった両極が共存する学びの場となっている。学生、学生と研究者、教員、多領域の専門家などが、共に語り、表現し、思い巡らし、疑い、試し、議論しながら、下図に示すような多様なアクティビティを介して、デザイン学を学ぶとともにデザインを実践する場となる。

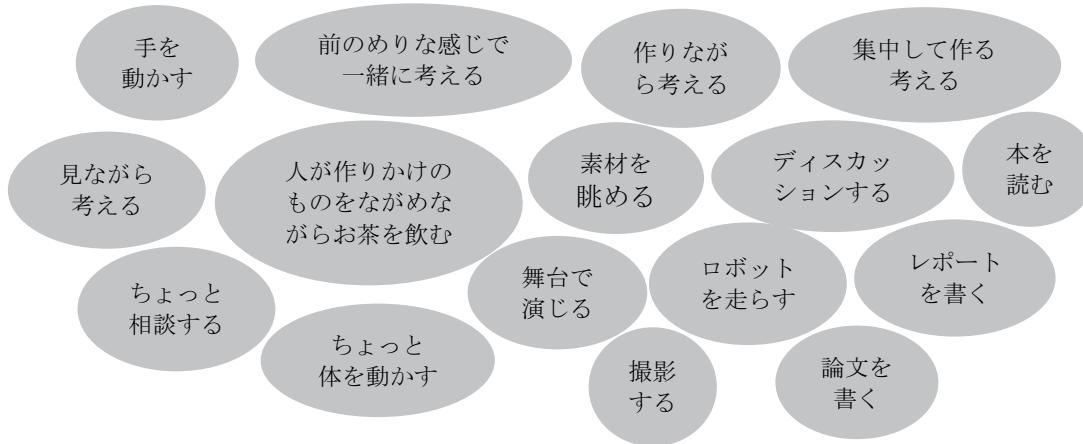


図 4-3 デザインファブリケーション拠点のアクティビティ

Fabrication studio 部分を中心として、下記の設備を備えている。

- デジタルファブリケーション機器：3D プリンター（2式）、3D スキャナー、ミーリングマシン、レーザーカッター、ペーパーカッター、刺繡ミシン、ロックミシン、ファブリックプリンター、他。
- 工作機械（木材・樹脂・金属）：精密ミニ旋盤、卓上ボール盤、卓上糸ノコ盤、ベルトジスクサンダ、スライド丸鋸、コードレスインパクトドライバー、コードレスドリルドライバー、ドリルドライバー、ハンドリューター、ジグソー、オービタルサンダー、等。
- 特殊工作機械（金属・樹脂）：CNC フライス。
- その他：プラスチック・発泡スチロールの加工器具、パフォーマンス用ステージ、テレビ会議システム、等。



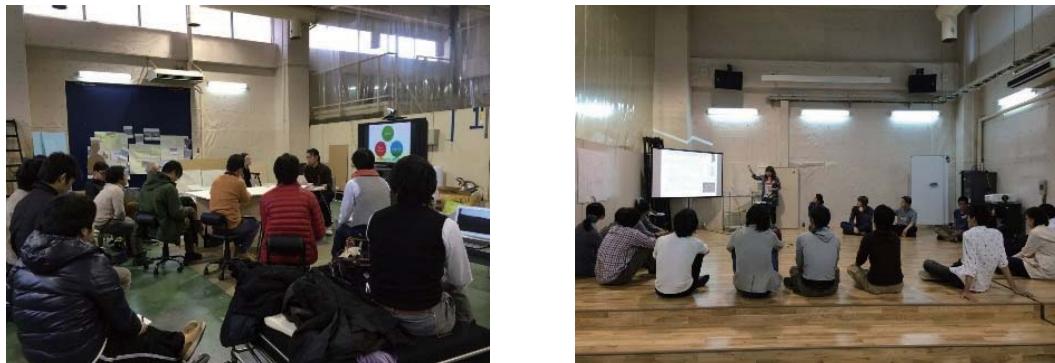
拠点の内部

### (3) 拠点の利用

デザインファブリケーション拠点では、下記に示すような学習プログラムを実施する場を提供することによって、デザイン学カリキュラムとの連携を図る。

プロトタイピング	スケッチング	ストーリーテリング
ラピッドプロトタイピング	描画	即興演劇
ウォークスルー	造形	即興ダンス
シナリオ	デジタルアニメーション	身体性
	3Dスケッチング	関係性
simulate (シミュレーション)	discussion (議論)	
imagine (イマジネーション)	refutation (論駁)	
envision (ビジョン)	active listening (能動的聴取)	

図 4-4 学習プログラム



アクティビティの様子

管理上の方針・規約等は、デザイン学ユニット運営委員会で検討し決定した。実際の拠点の管理運営は、拠点長（ユニット特定教授）、教務補佐員（週2日常駐）を中心に、ユニット事務室員、建築・機械・情報・経営管理・教育系教員、整備計画担当教員（特定教員3名）が協力して担当している。

#### 4.4 サテライトオフィス

学外組織と連携しプログラムの教育を行うためのキャンパス外の施設との協定書の締結を進めた。

##### (1) 伊丹サテライトオフィス（京都大学デザイン学大学院 伊丹分室）

###### 伊丹市立市民まちづくりプラザ

学校－住民連携による「地域で子どもを育む」コミュニティのデザイン、都市と農山村のネットワーキングのデザイン等に関するインターンシップを実施する。

伊丹市では、伊丹市立高校と地元商店街が協力して、「商店街学校」という地域が子どもを育む活動を展開している。高校生を商店街が受け入れ、高校生に社会人デビューをさせつつ、若者のエネルギーで商店街を活性化するプロジェクトである。かつては存在した「地域が子どもを育む」機能を再生するコミュニティ・デザインが問われている。同時に、伊丹の市民グループは、「阪神・智頭NPOセンター」を立ち上げ、「商店街学校」を支援するとともに、都市－農村交流を推進している。



ミーティングの様子

##### (2) 花脊サテライトオフィス（京都大学デザイン学大学院 花脊分室）

###### ココイマ・プロジェクト

百万都市（京都）の中の過疎地域のデザイン、移住・定住促進のためのデザイン等に関するインターンシップを実施する。

花脊は、百万都市（京都）の中の過疎地域であり、いわゆる地方の農山村とは異なる地域デザインが求められている。社団法人「ココイマ・プロジェクト」は、子育て世代を中心とする移住・定住促進を目的に、京都中心部と花脊をまたにかけた活動を展開している。女性リーダーを中心に、子育て世代の女性を主力とする活動である。また、地元の祭り「松上げ」を軸とする地域デザインも興味あるところである。



花脊の冬景色

##### (3) 智頭町山形地区サテライトオフィス（京都大学デザイン学大学院 智頭町山形分室）

###### 鳥取県八頭郡智頭町山形地区振興協議会

「住民自治」を前面に出したコミュニティのデザイン、中山間過疎地域のコミュニティのデザイン等に関するインターンシップを実施する。

鳥取県智頭町では、「昭和の大合併」以前の旧村単位に住民自治を育む運動が行われている。旧村は、住民にとって「風景を共有できる空間」である。その空間をいかにデザインしていくか。6つの旧村（地区）の一つ、山形地区では、他の地区に先駆けて地区振興協議会を立ち上げ、行政（町役場）とのイコールパートナーシップで住民自治のコミュニティづくりを推進している。



オフィスのエントランス

#### （4）博多サテライトオフィス（京都大学デザイン学大学院 博多分室）

##### 公益財団法人集団力学研究所

組織（企業、行政、医療等）とコミュニティの45年にわたる幅広いネットワークを活用し、組織とコミュニティを一体的に捉えるデザインに関するインターンシップを実施する。

公益財団法人集団力学研究所は、45年にわたって、組織とコミュニティの実践研究を行ってきた。同研究所が開催する組織塾と地域塾は、企業・行政・病院組織や種々のコミュニティで活性化に取り組む実践者と研究者が、新しい組織・コミュニティのデザインを議論し、試行する場となっている。公益財団法人である同研究所は、今回提案する4つのフィールドのコーディネート機能も果たし得る。



オフィスのメンバー

## 5 イベント

### 5.1 産学デザインシンポジウム

#### (1) 第一回産学デザインシンポジウム

日程：2013年1月21日

会場：京都リサーチパーク（KRP） KISTIC 2階イノベーションルーム

参加者：54名（学外33名、学内21名）

デザイン学大学院連携プログラムの産学官連携による検討を行うために、学内外の関係者を招待し、少人数のシンポジウムを開催した。忌憚のない議論を実現するためにクローズドな会議とした。デザイン学の方向性については、産官からの強い賛同が得られた。産官の役割については、シンポジウムの段階では十分明確とは言えず、今後、継続して検討を加えて行くこととなった。招待講演の池坊様の講話は、デザイン学への示唆に富むもので、それまでの産学官の議論を柔らかく包みこむものであった。プログラムは以下の通りである。

13:00 開会

13:10-14:40 京都大学からの活動報告

「京都大学デザインスクールが目指すもの」

石田 亨（情報学研究科社会情報学専攻 教授）

「人間－環境系のデザインの考え方と拠点のデザイン」

門内 輝行（工学研究科建築学専攻 教授）

「デザイン学が切り拓く産官共同での国際連携」

榎木 哲夫（工学研究科機械理工学専攻 教授）

「デザイン学の未来：デザインスクールの自立へ向けて」

松井 啓之（経営管理大学院 教授）

「インターラクション・ゲーム・デザイン」

西田 豊明（情報学研究科知能情報学専攻 教授）

「Designful? デザインスクールの目指すデザイン性とは」

山内 裕（経営管理大学院 講師）

「認知と行動のデザイン：心理学からのアプローチ」

子安 増生（教育学研究科教育科学専攻 教授）

14:50-16:20 産官参加者のポジショントーク

「産業活性化の視点からの本プロジェクトへの期待」

柴内 哲雄（株式会社野村総合研究所 理事）

「社会イノベーションのデザインへの取り組み」

山田 敬嗣（日本電気株式会社中央研究所 支配人）

「次代の社会・ビジネスに向けた人材育成と産・官・学のあり方について」

貫井 孝（シャープ株式会社 顧問）

「情報通信から見たデザイン学への期待」

伊藤 新（西日本電信電話株式会社研究開発センター 所長）

「建設業におけるデザインソリューション」

赤松 千州（株式会社竹中工務店 役員補佐）

「イノベーション創出に資するデザインと経営」

塩瀬 隆之（経済産業省産業技術環境局産業技術政策課 課長補佐）

「文化観光産業都市・京都のデザイン学への期待」

白須 正（京都市産業観光局 局長）

16:30-17:30 招待講演

「いけばな その形と心」

池坊 由紀（華道家元池坊 次期家元）

17:30 閉会

## （2）第二回产学デザインシンポジウム

日程：2013年9月26日

会場：京都リサーチパーク（KRP） 1号館4階サイエンスホール

参加者：98名（学内21名、学外77名）

产学官連携をより密にし、人材育成とデザイン学の体系化を円滑に進めるため、第一回の開催に引き続いで、クローズドなシンポジウムを開催した。产学の双方から現在までの成果の紹介と今後の活動への期待が示された。また、デザインイノベーションコンソーシアムの設立の案が示され、会員の募集が行われる運びとなった。プログラムは以下の通りである。

13:00 開会

13:10-13:50 招待講演

“Learning to Change the World”

Walter Bender（Sugar Labs 創設者/MIT Media Laboratory 元所長、現 Senior Research Scientist）

13:50-15:10 京都大学からの活動報告（20分×3件）

「機械工学群における产学での組織連携による教育研究」

榎木 哲夫（工学研究科機械理工学専攻 教授）

「京都大学における言語音声情報処理の产学連携」

黒橋 稔夫（情報学研究科知能情報学専攻 教授）

「経営管理大学院における産官学連携教育」

松井 啓之（経営管理大学院 教授）

15:10-16:10 サマーデザインスクール見学

デザインイノベーション拠点見学ツアー

16:10-17:10 招待講演（30分×2件）

「工作機械開発における、产学連携事例と新しいデザインへの取り組み」

藤嶋 誠（株式会社森精機製作所 常務執行役員）

「空間デザイン技術の研究・開発における产学連携の可能性」

山田 哲弥（清水建設株式会社 技術研究所 高度空間技術センター所長）

17:10-17:40 デザインイノベーションコンソーシアムの設立について

石田 亨（情報学研究科社会情報学専攻 教授）

17:40-18:00 総合討論

18:00 閉会

## 5.2 国際デザインシンポジウム

本プログラム主催の初の国際シンポジウムである International Design Symposium in Kyoto 2013 が 2013 年 3 月 15~16 日の両日、KRP（京都リサーチパーク）を会場として開催された。

初日はまずシンポジウム実行委員長の榎木哲夫教授の開会挨拶に始まり、来賓の京都大学情報学研究科長佐藤亨教授のご挨拶に続いて、京都大学デザインスクールの概要紹介のセッションが設けられた。セッションでは、デザイン学大学院連携プログラムのコーディネータとデザイン学ユニット長を務める石田亨教授によるプログラム概要説明、同ユニット教育委員会委員長の榎木教授からプログラムの国際連携について、そして同運営委員会委員長の門内輝行教授からデザインイノベーションセンターについての紹介があり、続いて経営管理大学院の松井啓之教授による産官学連携についての話題、教育学研究科斎藤准教授による心理学分野における学際共同研究の紹介が行われた。

午後からは、海外においてデザイン分野で先進的な取り組みを行っている著名な教育研究機関からの代表によるデザイン分野における活動の紹介がなされた。米国ハーバード大学デザイン大学院 (GSD) からは Prof. Martin Bechthold と Prof. Mark Mulligan、フィンランド国アールト大学からは Prof. Pekka Korvenmaa と Prof. Lily Diaz-Kommonen、米国カーネギーメロン大学から Prof. David C. Plaut、中国清華大学から Dr. Yuanchun Shi、英国 UCL (University College London) から Dr. Paul Marshall により各大学におけるデザイン関連分野のスクールや学科、研究室について紹介がなされた。セッション終了後には、KRP にて懇親会が開催され、海外からの来賓を代表して中国清華大学の Prof. Maosong Sun の挨拶、そして京都大学工学研究科長北野正雄教授の乾杯により開会し、活発な意見交換により参加者が互いに交流・親睦を深める機会となった。

2 日目は、デザインにおける産学協働の事例として、米国スタンフォード大学と IDEO に所属する Dr. Kerry O'Connor により、IDEO とスタンフォード大学 d.School との連携についての紹介がなされた。その後、英国における若手研究者の育成のためのトランスファラブル・スキルズ・プログラムに関するセッションが設けられ、英国で実績を有するブリストル大学の Dr. Alison Leggett、ニューキャッスル大学から Dr. Robin Humphrey と Jane Nolan MBE の 3 名から博士人材教育のプログラムの紹介がなされた。

最後に、このシンポジウム開催に間に合わせてお披露目となったデザインイノベーション拠点のツアーを実施し、参加者全員が会場に隣接する拠点を見学に訪れた。

シンポジウム終了後には、京都大学デザインスクールの第 1 回国際アドバイザリボードミーティングが KRP を会場として開催された。国際アドバイザリボードメンバーは、これまでデザインスクールとして連携を申し入れて来ている欧米中の著名研究機関より 10 名を指名しており、今回はこのうちの 4 名の出席を得て、デザイン学ユニット主要メンバーとの間で初会合を開催した。

### 5.3 サマーデザインスクール

#### (1) サマーデザインスクール実施要領

サマーデザインスクール運営委員会により以下の実施要領で策定した。

##### (i) 主旨

京都大学はデザイン学大学院連携プログラムを中心とするデザイン学の問題発見型学習/問題解決型学習（FBL/PBL）を大学内外に開放し、産学官公民の実践型教育と共に創の場とする。

##### (ii) 運営

サマーデザインスクールは毎年9月下旬に3日間、京都リサーチパークで実施する。サマーデザインスクールの全ての参加者は、自らの意志で参加するものとする。参加への過度の助言、動員などは行わない。

FBL/PBLの課題は、主催・共催団体に所属する教員、並びにデザインイノベーションコンソーシアム（26年度発足）に所属する企業・自治体等から受け入れる。上記に限らず、実行委員長の判断により、適宜課題を受け入れる。課題に特有の別途必要となる費用は、原則として課題提供者の所属機関が負担する。

課題解決への参加は、京都大学デザイン学大学院連携プログラムの履修生に限らず、主催・共催団体に所属する学生、並びにデザインイノベーションコンソーシアム（26年度発足）に所属する企業・自治体等の構成員を受け入れる。上記に限らず、実行委員長の判断により、適宜参加者を受け入れる。参加費は無料とする。

FBL/PBLで新規に生じた知財は、当該課題解決の参加者に等しく帰属する。参加者の所属機関、課題提供者、課題提供者の所属機関には帰属しない。FBL/PBLの実施のために必要となる既存の知財・研究成果・データ等は、課題提供者から参加者に予め明示する。ただし、当該知財・研究成果・データ等に関するNDAを参加者に求めることはしない。

FBL/PBLの結果は、サマーデザインスクールの発表会、主催・共催団体のWeb・ニュースレター・各種展示等を通じて公開する。

FBL/PBLの課題提供者や課題提供者の所属機関は、課題参加者に対して、当該年度のFBL/PBLの実施に係らない連絡をサマーデザインスクールの名を用いて行ってはならない。

FBL/PBLに関する上記の方針は、課題募集、参加者募集の際に周知確認する。

##### (iii) サマーデザインスクール運営委員会

運営委員会（steering committee）を主催・共催団体の代表を中心に構成する。京都大学はデザイン学大学院連携プログラムの他、プログラム参画4部局（情報学研究科、工学研究科、教育学研究科、経営管理大学院）、京都市立芸術大学は美術研究科、京都工芸繊維大学は工芸科学研究科が参加する。その他、サマーデザインスクールの前年度実行委員長、当該年度実行委員長が参加する。

運営委員会は以下を審議する。

- ・ 主催・共催団体とその役割に関すること
- ・ 費用、知財、保険、広報に関すること

- ・併設イベントに関すること
- ・実施要領、並びにサマーデザインスクールの枠組みに関すること

#### (iv) サマーデザインスクール実行委員会

実行委員会（executive committee）は京都大学デザイン学ユニットを構成する教員有志、並びに主催・共催団体からの委員により構成する。実行委員会の事務局はデザインイノベーション拠点のサポートチームが担当する。

#### (v) 併設イベント

京都大学デザイン学大学院連携プログラムが主催する産学デザインシンポジウム、外部評価委員会（26年度以降発足）を併設する。実行委員会は、併設イベントの参加者がサマーデザインスクールを見学できるよう配慮する。

### （2）サマーデザインスクール 2013

2013年9月25日～27日の日程で、京都大学サマーデザインスクール2013が開催された。本スクールは、産学から持ち込まれた、社会に実在する問題に対して学生と社会人の混成チームが解決策を考える3日間のイベントで、2011年に初回が開催され、今回で3回目の開催となった。今回からデザイン学大学院連携プログラム（以下、本プログラムと記す）の公式イベントとして開催され、主催には情報学研究科、経営管理大学院が、共催には工学研究科、教育学研究科、学術情報メディアセンターと、京都市立芸術大学美術学部・美術研究科のほか、新たに京都工芸纖維大学工芸科学研究科が加わった。

本スクールの規模は年々拡大しており、今回は産学から持ち込まれた25種類のテーマに、実施者96名と受講者111名が3日間にわたって挑んだ。実施費用は実施者が負担し、学生は受講しても単位にならず、遠方から参加しても旅費の補助はない、まさしく「やりたい人だけがやる」本スクールだが、今回は特に産業界から多くのテーマ提案と受講者を受け入れ、企業からのテーマ提案数、社会人の受講者数がそれぞれ全体の約3分の1を占めるまでになった。

3日間のスケジュールは、初日と2日目がテーマワーク、3日目が発表準備と発表であった。テーマワークでは、デザイン手法やデザイン理論に関する講義から始めるテーマもあれば、まずフィールドに出ていくテーマもあった。一部のテーマでは、本スクールの見学者も含め全員に公開されるミニ講義が行われた。なお、2日目の午後には、隣接する会場で本プログラムの「産学デザインシンポジウム」が開催され、その一環で企業を中心とする参加者が本スクールの様子を見学した。

3日目午後の発表会では、2会場に分かれて各チームが成果を発表し、活発な議論が行われた。また、発表会の最後には会場ごとに参加者が最も優れた発表を行ったと思うテーマに投票し、最も得票の多かったテーマ2件が優秀賞に選出された。優れた成果を得るために、受講者に優れたデザイン力が求められるだけでなく、実施者にもワークの設計などに工夫が求められるため、表彰式では受講者と実施者の両者に賞状が授与された。このように、本スクールはほぼ同数の受講者と実施者の相互学習の場となっている。

例年にも増して多くの企業からのテーマ提案と社会人の受講者を受け入れた今回のサマーデザインスクール2013は、こうして成功裏に閉幕した。このことは参加者アンケート

の結果からも、実施内容や翌年の参加意向に読み取れる。

今後はテーマの質の確保が課題の一つである。現在はテーマの内容は実施者に任せられているが、2014年からはこのことを念頭にテーマの審査が行われる予定である。また、産業界とのさらなる連携や経済的自立も課題である。そのため、本プログラムにおいて产学連携を強化するために設立された「デザインイノベーションコンソーシアム」との連携を図るべく、2014年からは主催にデザインイノベーションコンソーシアムが加わり、コンソーシアム会員企業からテーマ提案や受講者を受け入れる予定である。



メイン会場



発表会

表 5-1 実施テーマ一覧

1 チームワークのデザイン	13 (ほぼ) 誰でも (ほぼ) 何でもつくれる世界のデザイン
2 不便益なシステムの設計とプロトタイピング	14 京の夜をいろいろアルゴリズミックなあかり
3 自転車の盗難対策をデザインする	15 人とクルマのコミュニケーションデザイン—より良いクルマ社会を目指して—
4 オープンエデュケーションとビッグデータを利用した Personalized Learning 支援環境のデザイン	16 これまでにない参加型ニュースメディアをデザインする
5 Creating a dialogue through expressing experiences: Designing a place for open innovation (表現することをおした対話の創出：オープンイノベーションの場をデザインする)	17 カードゲームをつくろう
6 7年後に生まれる情報サービス：企業と顧客の新しい関係性を考える	18 ハイスピードカメラによる自然現象に基づく有機的デザインの生成
7 科学コミュニケーション・ツールとしてのゲームデザイン	19 高さ 1 メートル未満から見える世界のデザイン
8 「分散×協調」による社会システムのデザイン	20 2050 年の京都をシミュレーションで予測する
9 街における ICT サービスデザイン	21 シームレスな健康×診療サイクルのデザインによる未来の患者体験の創造
10 「IT」×「モノづくり」で実現するプロトタイプデザイン	22 次世代の「働き方」と「働く場」をデザインする
11 コミュニケーションカフェのデザイン	23 災害のトータルデザイン
12 授業紹介をゲームとしたコミュニケーションの場のデザイン	24 次世代パン工場のデザイン
	25 伝統的木造住宅の耐震診断・耐震改修促進策のデザイン

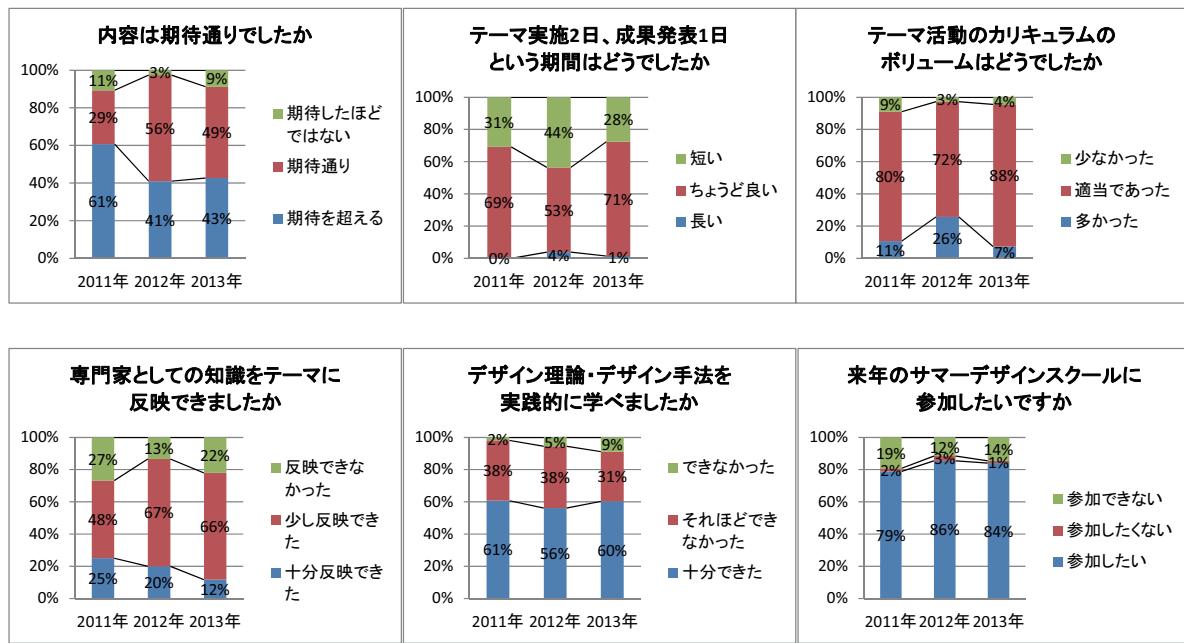


図 5-1 参加者に対するアンケート結果

## 5.4 スプリングデザインスクール

### (1) International Symposium on Design Visions 2014

スプリングデザインスクールのメインイベントとして、2014年3月15日（土）、16日（日）の2日間、International Symporium on Design Visions 2014 (ISDV2014)と題した国際シンポジウムを、京都大学百周年時計台記念館2階国際交流ホールにて開催した。

テーマは、「デザインにおけるビジョン」である。技術が、場所、時、コンテキストを超えて偏在化しつつある今日、デザインされたアーティファクト（人工物）は、それが物理的なものであれ、デジタルなものであれ、あるいは論理的なものであれ、人々がどのように暮らし、学び、働くかということに影響を与える。人の思考や、知覚、感情といったものも左右する根源的な作用となり得る。

デザイン学が対象とするのは、アーティファクトそのものの有り様に加えて、人々がそのアーティファクトをどのように使い、どのように関わり、どのように暮らしに取り入れるかも含めたものとなる。デザインされたアーティファクトの結果として、社会に対してどのようなインパクトを持つのか、どのように社会を変革する可能性があるか、といったことを考えるのではなく、アーティファクトが関わる認知的、機構的、さらには社会的な環境ものを、デザインする対象として、「ビジョン」として捉える必要がある。

このような問題意識のもと、デザインと技術、そして人間との関わりにおいて世界を牽引する著名な研究者を4カ国から7名招聘し、デザインスクールに属する教員3名を加えた総勢10名による講演を通して、デザインにおけるビジョンの役割と機能、どのようにそれを教育するか、といった側面から活発な議論を行った。デザイン学を構成する教員、デザイン学予科生、また外部からの参加者も含め、43名の参加者があった。プログラムを下記に示す。

シンポジウムは、キーノートを含むプロローグセッションから始め、続いて(1) Driving Force、(2) Humans and Systems、(3) Making, Building, and Constructing、および(4) Societal Tensionsという四つのトピカルセッションを実施した。各セッションには2名のスピーカーに加えて1名のHostを配し、Hostが壇上で、講演者に対してインタラクティブにディスカッションを進めるという方式を採った。最後に、Design Visions Discussionという、一般参加者も含めたインタラクティブに議論を行うセッションを設けた。デザインにおいて「ビジョン」が果たす役割、「ビジョン」をどのように表現するか、デザイン学教育においてデザインの「ビジョン」をどのように教えるか、また、それを表現すべき言葉やコンセプトについて、活発な討議が行われた。なお、本シンポジウムの結果は、2014年度以降に英文図書としてまとめる予定である。



シンポジウムの様子

## Symposium Program

### March 15th (Saturday)

#### 11:00-12:30 Prologue (Chair: Kumiyo Nakakoji)

Welcome & Symposium Motivation: *Projecting Design-Beings*  
Kumiyo Nakakoji (Kyoto University, Japan)  
Speaker Introductions  
All Speakers  
Keynote Address:  
Teruyuki Monnai (Kyoto University, Japan)

#### 12:30-14:00 Lunch

#### 14:00-15:30 Topical Session 1: Driving Force (Host: Kumiyo Nakakoji)

*Design Visions – Pulling You into the Future*  
Pieter Jan Stappers (Delft University of Technology, The Netherlands)  
*Design Thinking and Computational Thinking*  
Mark D. Gross (University of Colorado, Boulder, USA)

#### 15:30-16:00 Coffee Break

#### 16:00-17:30 Topical Session 2: Humans and Systems (Host: Gerhard Fischer)

*Semiotics Design and Analysis of Human-Machine Systems*  
Tetsuo Sawaragi (Kyoto University, Japan)  
*Human System Design and Integration: Designing for Meaning of Life*  
Keiichi Sato (Illinois Institute of Technology, USA)

#### 18:00-20:00 Reception

### March 16th (Sunday)

#### 10:00-11:30 Topical Session 3: Making, Building, and Constructing (Host: Michael Terry)

*Being CUTE - Creating Unique Technology for Everyone*  
Ellen Yi-Luen Do (National University of Singapore, Singapore)  
*When Design Becomes Too Complex*  
Andre van der Hoek (University of California, Irvine, USA)

#### 11:30-13:00 Lunch

#### 13:00-14:30 Topical Session 4: Societal Tensions (Host: Mark Gross)

*Design Freedoms*  
Michael Terry (University of Waterloo, Canada)  
*"Quality of Life": A Design Vision for Socio-Technical Environments of the Future*  
Gerhard Fischer (University of Colorado, Boulder, USA)

#### 14:30-15:00 Coffee Break

#### 15:00-16:30 : Design Visions Discussions (Chair: Kumiyo Nakakoji)

All Participants

#### 16:30-16:45 Closing Remarks

図 5-2 シンポジウムのスケジュール

## (2) デジタルデザインワークショップ

日程：2014年3月15日（土）～17日（月）

会場：吉田キャンパス デザインファブリケーション拠点、時計台二階国際交流ホール

スプリングデザインスクールの一部として、デジタルデザインワークショップを以下の2部構成で開催した。

- DAY1&2（3月15日～16日）「Digital Fabrication & Information Design」

・DAY3（3月17日）「AR.Drone Contest」

参加者は、どちらか一方、または両方への参加が可能であった。どちらのワークショップでも、デザインの実践を行うことが必要となっており、そこでの体験を通してデザイン学大学院連携プログラムにおける「デザイン学」について学ぶことができた。

**DAY1&2（3月15日～16日）「Digital Fabrication & Information Design」**

ワークショップ参加者が短編映画をゼロから作成することで、デジタル時代のものづくりと情報デザインについて体感し、学ぶことを目指した。参加者は2日間で、星新一の短編SF小説を題材として、約5分間の映画を撮影した。撮影に用いる小道具、大道具、衣装などは、吉田デザインファブリケーション拠点に用意された最新鋭のデジタルファブリケーション機器（3Dプリンター、テキスタイルプリンタ、デジタル刺繡ミシン等）を駆使して、すべてその場で作成した。台本や絵コンテなども、情報デザインについて学びながらすべてその場で作成し、編集も自分たちで行った。

講師とスタッフは総勢23名（学外講師12名、デザイン学4名、その他学内から7名）。参加者は21名（学内からデザイン学本科生を含む20名、学外から1名）の参加があった。二日間で映画をゼロから作ることは非常に大変であったが、全員がそれぞれ自分に与えられた役割をうまくこなすことで、無事に撮影を終えることができた。

映画には、必要な情報を視聴者に正しく伝えるためのデザインがたくさん詰まっている。物語をわかりやすく整理した台本や絵コンテ、状況を表現するための大道具や衣装などの舞台美術、強調したいものや雰囲気を画面に表す構図や特殊効果、撮影や編集に至るまで工夫が凝らされている。映画撮影は、情報デザインを学ぶために役に立つことがわかったことが、運営側にとっての収穫となった。

**DAY3（3月17日）「AR.Drone Contest」**

AR.Droneという4つのローターを持つヘリコプターを参加者がプログラミングを行って自動操縦するコンテストを行った。教員5名とTA7名が運営を行い、電気工学科、情報学科の学生を中心とする25名が参加した。

AR.DroneはWiFiアクセスポイントとして動作することで、スマートフォン等からコマンドを送って操作できるように設計されている。同様のコマンドを送出することで、パソコンからの操作が可能となる。また、AR.Droneにはカメラやセンサが搭載されており、画像や高さ情報等を連続的に送信できる。今回のコンテストでは、4つのARマーカを設置した競技場において、プログラムによる自動操縦で、マーカを順に追跡してスタートからゴールへ到達する時間と正確さを競う競技を設定した。画像処理ライブラリによりARマーカを認識することで、AR.Droneとマーカとの相対位置を知ることができるようになっている。画像を認識し、それに応じた動作を行うようプログラムを作成することで、自動操縦を行うことになる。ARマーカを探索する関数、マーカとの相対位置を計算する関数、現在の高度を求める関数等、基本的なライブラリを事前に教員が作成して提供した。学生は、これらを組み合わせ、また改良してマーカを追跡するプログラムを作成した。

ほとんどの学部学生にとってのデザインは、いわゆる図案や意匠作成的なものに留まっているが、このようなワークショップを通じて、デザイン学における「デザイン」の意味を体験として伝えることが極めて重要であると感じた。コンテストでは、普通に全てのマーカを辿るのではなく、いくつかのマーカを無視してショートカットをすることで得点を高めようとするチームが2、3チーム見受けられた。チームでの議論により、異なる視点からの目標到達を目指す取り組みが見られたことは良かったと考えている。

## 5.5 デザインスクール in 沖縄

2013年11月21日（木）～24日（日）の日程で、洋上デザインワークショップおよび京都大学－琉球大学合同デザインスクールを行った。

那覇は京都とは異なる文化を持つ琉球王国の都であり、観光などの共通の課題や、環境など独自の課題がある。那覇にて琉球大学と合同でワークショップを行うことで、新しい問題の発見と解決策を見いだす機会とした。

### （1）洋上デザインワークショップ

各テーマ2名の講師が実施した。参加者は2つのグループに分かれて受講し、ファシリテーションの基礎を学ぶとともに沖縄について理解を深め、合同デザインスクールの事前準備とした。

11月21日（木）

伊丹空港 発、鹿児島空港 着（飛行機）／鹿児島新港 発（船）

「デザイン学を発想する」（40分×2）（講師：石田、十河）



洋上でのファシリテーション講習の様子

11月22日（金）

「ファシリテーションを体得する」（50分×2）（講師：寺田、中川）／「Creative Design」（50分）（講師：須永）／「沖縄と観光を理解する」（50分×2）（講師：伊沢、笠原）  
那覇港 着

### （2）京都大学－琉球大学合同デザインスクール（於 琉球大学 千原キャンパス 大学会館）

京都大学、琉球大学、那覇国際高校の参加者が7つのグループに分かれ、沖縄観光に関する2つのテーマ（郷土愛と沖縄観光を両立させるための「街並み」デザイン／外国人観光客の満足度をあげるための「おもてなし」デザイン）に取り組んだ。各グループにはデザイン学履修者がファシリテーターとして参加し、議論をリードした。

11月23日（土）

午前 オープニング、基調講演（琉球大学観光産業科学部観光科学科 下地教授）、グループワーク

午後 グループワーク、フィールドワーク



グループワークの様子

11月24日（日）

午前 グループワーク

午後 発表会、クロージング

### (3) 参加者の声

両イベントの参加者数は以下の通りである。

洋上デザインワークショップ：

デザイン学履修者（本科）8名、教職員5名、ファシリテータ2名、アドバイザ1名

京大－琉大合同デザインスクール：

学生31名（京都大学デザイン学履修者（本科）8名、琉球大学大学院理工学研究科9名、

琉球大学工学部情報工学科6名、同 観光産業学部1名、沖縄県立那覇国際高等学校7名）

教員他19名（京都大学 教職員5名、ファシリテータ2名、アドバイザ1名／琉球大学

教職員8名（工学部情報工学科 宮城教授、遠藤教授、當間助教、ほか）、協力者3名）

参加者の感想をいくつか掲載する。

#### 学生 A

ディスカッションの中で、地元沖縄の方の視点と観光客としての京大側の視点の意外な相違点が浮き彫りになりました。そのギャップから問題点を洗い出し、両者の視点が交わる解決策を模索していくプロセスの経験は新鮮で有意義なものでした。自分の専門性や視点が他者の専門性や視点とぶつかることで見えてくる問題点、両者が交わることで生まれるアイデアの新規性や奥深さにデザイン学がもつおもしろさやパワーが凝縮されていることを感じた5日間でした。

#### 学生 B

「街で画板とクレヨンを手にスケッチで描く」、「沖縄の優しさについて対話する」、「体験を日記に書き綴る」といった感覚的思考を駆使したワークを行ったことは、私に新鮮なインスピレーションと思考の幅を与えてくれました。論理的思考と感覚的思考の両面でアプローチすることは、複合的な課題解決にきっと役立つと確信しました。

#### 学生 C

予想していた通りには進まないワークショップをファシリテートするにはまだまだ引き出しが少なく、力不足を感じることも多々ありました。周りの助けを借りながらではありましたが、最終日に、参加してくれた高校生に「本当に楽しかった、来てよかったです！」と言ってもらえたことはとても嬉しい経験でした。他チームで同じような苦労をしたであろう本科生とも経験を共有し、今後の課題の一つとしていきたいと思います。

#### 学生 D

ディスカッションの中で意見の方向性が各自異なっていたため、全員一致の提案を出すことが難しく、フィールドワーク後、一日の終わりに際して遂に全員一致とも思える妙案がぽこっと生まれた時には、涙が出そうになりました。また、ワークショップ終了後、京大組の人たちとこの日の反省と明日への課題を徹底的に議論できたことも、自分のグループだけにとどまらず多角的な視野を持てるという意味で非常に有意義でした。

#### 学生 E

個々のメンバーの分野の違い以上に、様々な年齢のメンバーとの協議を行えた事が印象に残りました。下は高校2年生、上は1つ2つ世代が上の社会人の方々でしたが、下も上も遠慮なく世代を越えての意見の交換をすることで、デザインスクールの目的の1つである社会の問題発見・解決を行うことが出来る可能性を垣間見る機会となりました。

#### ファシリテータ

出発前には「どうやって4つのグループを見ようか?」「どうやってグループワークを設計しようか?」と、様々な不安があったのですが、ふたを開けてみれば、京大の学生が主体的に考え、動き、それぞれの形で結論を導いていました。苦しみながら、でも楽しんで、挑戦していく姿勢を大事にしたいなと思える機会にもなりました。

## 教員

2日間のワークショップは奇跡であったと思う。京大側の教員は分散してチームに参加させて頂いたが、琉大側の先生方は運営にかかりきりだった。京大の学生はいつの間にかファシリテータ役になっていた。2日目の発表が終わり、琉大の先生方のお誘いで沖縄料理を頂いた。何から何までお世話になった。ワークショップで学んだことは、沖縄の“ゆいまーる”の心だった。大学で、街で、心地よい日を過ごさせて頂いた。

## 5.6 デザインフォーラム

学外の研究者や実務家を招聘し講演会を実施することでデザイン学の確立に寄与する議論を進めるとともに、京都大学デザイン学を社会に広く情報発信することを目的とする。

オープンイノベーションなどで連携する企業やデザイン学に入学する学生の裾野を広げると共に、学内の多様な分野の学生や教員にとってもマグネットとなるような講演者を設定することでデザイン学を盛り上げる。

また、デザイン学という学術的な分野を切り開くため議論を進めることができるような講演会を実施する。学術的な講演者により学生が自らの学習や研究のビジョンに役立てると同時に、実践家の中でも理論的な話しができる方によりデザイン実践や研究に関するビジョンを広げる。

### 芸術のデザインから「デザイン学」を展望する

日時：2013年6月28日（金）13:00～14:45

会場：デザインイノベーション拠点（京都リサーチパーク9号館5階）

講演者：須永 剛司（多摩美術大美術学部教授・京都大学デザイン学ユニット特任教授）

対談者：門内 輝行（京都大学建築学専攻教授・京都大学デザインスクール代表）

須永先生は「芸術デザインの対象領域とは？」をメインテーマとして話され、デザインは道具（利用）から、活動（経験）へ、さらには社会（価値）へと対象が広がっているという考え方を基にデザインに対する理論や考えを幅広く紹介された。知（knowing）に関して、説明、批判、分析を中心とした科学的知に対比して、表現、創造、構成を中心とした芸術的知を議論された。そこで従来の芸術的知を踏まえ、新しいデザイン学として、表現－説明、創造－批判、構成－分析のループを作り出し、二つの知を循環させるというモデルを提示された。ただし、この二つの知はすぐには融合できず、当初はお互いにとって相手を否定することになる。実際に須永先生は、ご自身の領域横断CRESTプロジェクトで、そのような衝突を目の当たりにし、しかし、それを乗り越えてプロジェクトを成功されたという実体験を元にした示唆深い議論であった。

### 松竹梅「白壁蔵」戦略について～宝酒造の和酒戦略から～

日時：2013年7月25日（木）17:00～18:30

会場：デザインイノベーション拠点（京都リサーチパーク9号館5階）

講演者：林 研三（宝酒造株式会社 酒類事業本部 商品部長）

京都の宝酒造では、従来の大量生産のパラダイムから脱却し、プレミアムな酒を造るために「白壁蔵」という新しい蔵を建て、杜氏による人の手による酒造りと近代的な設備を融合する取り組みをしている。林様には、和酒を取り巻く環境がどのようなものか、その中でどのような過程を通じて、この新しい取り組みを進めて行ったのかを紹介していただいた。現在多くの企業が従来のものづくりから、新しい体験を生み出すデザインイノベーションを模索している中で、企業のデザイン戦略のあり方について考えるヒントとなった。

### Creative Design for Things that Think, Spaces that Sense and Places that Play

日時：2013年8月5日（木）11:00～12:30

会場：デザインイノベーション拠点（京都リサーチパーク 9号館 5階）

講演者：Ellen Do（ジョージア工科大学 教授）

ジョージア工科大学の Ellen Do 教授により、人間をとりまくモノ、空間、および環境と、コンピュテーション（プログラミング）とのデザイン的な関わりについてのご講演を頂き、最新のプロジェクトの紹介と、それに対するアプローチの議論をご説明頂いた。モノや空間、環境自体が知性を持ち、それとインタラクションを行う人間や、中に居る人間に対して状況に応じた情報を提供するといった、多用な自律的な振る舞いを行うための技術が開発されつつある。Do 教授は、そういった物理的なモノとその計算機的な振る舞いをプログラミングすることとのつながりにおけるデザイン研究の第一人者である。講演はまず、デザインの語源 de (=out) sign (=mark) と、プログラムの語源 pro (=forward) gram (=writing) から始まり、デザインとプログラミングの意味的な重なりを説明された。次いで、Smart home、Smart living などといったこれらのアプローチの一例として、Do 教授が関わっている創造的デザインコンピューティングプロジェクトから、人間にとてのマジック（奇術）とも捉えられ得る技術を、デモムービーを交えながら、多数ご紹介頂いた。情報技術と建築、ロボットといった、本デザイン学の学際分野に関わる実プロジェクトを多数ご紹介いただき、デザイン学の教員、学生にとって、研究プロジェクトの方向性の可能性の大きさを示唆する講演となつた。当該研究エリアの今後の発展と、研究課題および方向性についての議論がなされた。

Anne Mieke Eggenkamp さんを迎えて：「Dutch Design Now」

日時：2013年9月12日（木）17:00～18:30

会場：デザインイノベーション拠点（京都リサーチパーク 9号館 5階）

講演者：Anne Mieke Eggenkamp（アントホーヘンデザインアカデミー 前学長）

Design Academy Eindhoven 前学長の Anne Mieke Eggenkamp 氏による”Creative Pioneers: The Scientist, the designer, the innovator + their neighbors”と題された講演が行われた。はじめに、デザイン学ユニット講師（慶應義塾大学環境情報学部専任講師）の水野大二郎先生より、講師の紹介、なぜ今「オランダのデザイン」なのか、ダッチデザイン発展の歴史やその背景（オランダにおけるフリーカルチャー運動やアメリカ西海岸発祥のオープンソース運動が与えた影響）などについての説明がなされた。

Eggenkamp 氏からは、Design Academy の取り組みが紹介された。卒業制作の紹介を通して様々な革新的なデザインに取り組んでいることと同時に、デザインの意味が変化していることが説明された。家具やプロダクトのデザインが発展し、Hella Jongerius 氏によるゴムでできた柔らかい洗面器、Maarten Baas 氏による焼いて真っ黒になった家具（写真のスライド）など、刺激的な取り組みがなされている。最近ではニーズを捉えてデザインするような取り組みも多い。例えば、アフガニスタンでの地雷の問題に対して、風の力で動く低コストの地雷撤去器や東日本大震災での過酷な避難生活を向上するための非常用具セット（Massoud Hassani 氏）のようなものである。これらの事例を通して、外に出て問題を見つけ、手を動かしてデザインしていくデザイン教育のあり方が議論された。

最後の質疑応答では、講師より学生に対し、「創造性を高めるためには、デジタル機器に頼りすぎたり、集中しすぎたりすることなく、クリエイティブな環境で活動すること」「審美眼を鍛えるためには、物を見るだけでなく、それについて人と話し、その背景にある物語について知ること」などのアドバイスがなされた。教員に対しては、「学生にフィードバック、将来についてのアドバイスを行うこと」などのアドバイスがなされた。

## Heritage and Social Media: Understanding Heritage in a Participatory Culture

参画型文化における伝統（Heritage）とは

～未来世代に譲り伝えていくべきモノやコトとソーシャルメディア～

日時：2013年11月7日（木）16:00～17:30

会場：デザインイノベーション拠点（京都リサーチパーク9号館5階）

講演者：Elisa Giaccardi（デルフト工科大学・インダストリアルデザインエンジニアリング学科・インタラクティブメディア分野 教授）

情報技術とソーシャルメディアの発展した今日における、Heritage（ヘリテージ：伝統や歴史的建造物、文化といった、未来世代に譲り伝えていくべきもの）の在り方について、人文科学と技術の関わりを、デザインの視点から捉えたご講演を頂いた。ご講演で Giaccardi 教授は、Heritage = something to be passed on（次世代に引き継ぐべきもの）と定義され、人々を取り巻くモノや環境の、意味（meaning）と価値（value）を、人々はどのように知覚し、それを伝えていくかといった問題提起をされるところから始まった。ソーシャルメディアが広まり、様々な人間のアクティビティが情報として蓄積されていく一方で、モノは変化し、人々は変化し、価値も変化する。その結果、相互に矛盾する価値観が拮抗することとなる。ご講演では、価値を包含するモノやコトとしてのヘリテージと、技術との関わりとして、前者が後者を embed し、後者は前者を foster するべきものであると論じられた。デザイン学において、社会科学や文化といった背景と、技術との関わりを正面から研究テーマとされるご講演で、デザイン学の観点から、社会科学的な研究アプローチに対する議論が交わされた。

## Service Design

日時：2014年1月17日（金）13:00～14:30

会場：京都大学吉田キャンパス デザインファブリケーション拠点

講演者：Cynthia Anne Angela Roos (Research Associate, Design Academy Eindhoven/Creative Industry Scientific Program)

Danielle Arets (Associate Reader, Design Academy Eindhoven/Creative Industry Scientific Program)

Design Academy Eindhoven は様々なバックグラウンドを持つ学生を集め、いわゆる T 型人材ではなく、1つの分野における深い専門知識および複数のサブ専門知識を持つデザイン人材の育成を行っている。中でも CRISP はオランダのクリエイティブ産業、ひいてはオランダ経済全体を活性化するための知識基盤の構築を目指している。CRISP の Research Associates は Product Service System (PSS) に重点的に取り組んでいる。PSS は製品自体のデザインと同時にサステナブル社会のための付加価値を創出することを目的としている。

Roos さんからは、アルツハイマー患者が患者家族や介護施設職員と遊ぶことで患者との意思疎通を促進するゲームの開発や、KLM における搭乗者のエネルギーレベルの上下に基づく経験デザインなど、数多くのユニークな事例が紹介され、Arets さんは様々な写真を事例として紹介しながら、家屋のデザインを含めたまち単位でのコミュニティデザイン、教会からガソリンスタンドまで複合的な領域におけるデザインのコラボレーション、ビジネスの視点を取り入れたデザインなど多様化し他領域と結びついていくデザインの現在について話された。

## Designing Real

日時：2014年1月22日（水）13:00～14:30

会場：京都大学吉田キャンパス デザインファブリケーション拠点

講演者：筧 康明（慶應義塾大学環境情報学部 准教授）

人間とそれを取り巻く物理的な実世界との関係性（インタラクションのあり方）について、物理世界とデジタルな世界を結合する最新の情報表現技術や、メディアアートのプロジェクトを多数紹介しながら、real（現実）をデザインするアプローチについてご講演頂いた。人間が、物理世界とのインタラクションを行う部分と、デジタルな世界（ソフトウェア）とのインタラクションを行う部分との境界を曖昧にするようなプロジェクトが、デモビデオや、実際のツールのデモを用いて多数紹介された。人間が、物質と情報との区別のない世界とインタラクションを行うアプローチを、HABI（Human Atom Bits Interaction）と呼び、人間（sense）、物質（material）、想像性（Imagination）の三つの要素を統合させることで、人間が物理世界をどう感じたり、どのような言葉で表現しようとするか、といったことを明らかにしようとされているとのことであった。矩形が書けるコンパスや、発砲スチロールの粒を用いて中空で制御出来る3Dディスプレイといった、極めてクリエイティブなプロジェクトの数々をご紹介いただき、デザイン学において探究すべき、情報メディア技術研究の方向性と、クリエイティビティの重要性が明らかとされた。会場からも多数の質問がなされ、講演時間終了後も長い時間ディスカッションが続けられた。

## イノベーションを生み出す「デザインリサーチ」の極意 ～ありふれた日常に潜む巨大なビジネスチャンスを探る

日時：2014年3月13日（木）13:00～14:30

会場：京都大学総合研究2号館3階 マルチメディア講義室

講演者：Jan Chipchase（Executive Creative Director of Global Insights）

本フォーラムでは世界的なデザインコンサルティングファーム frog（フロッグ）でグローバル市場調査・分析部門である Global Insights のエグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクターを務める、Jan氏をお招きし、デザインリサーチについて、その事例を交えながらお話を頂いた。

講演の冒頭、Jan氏は参加した学生に対して「卒業後はアカデミックに残る？それとも企業に勤めたい？」、「海外で働きたい？」などの質問を投げかけた後、決して優秀ではなかった学生時代、ノキアでの経験など自らの経歴から話を始められた。その後、現在のfrogでの活動概要や氏が立ち上げられたデザインブランドについて、そして氏の経験を通じて考えられる、日本企業の5つの特徴などの話題から講演は徐々に本題であるフィールドリサーチへと進んでいった。

まず氏が考えるフィールドリサーチの本質や心構えなどについて簡単にお話された後、氏も参加されたミャンマーでのプロジェクトを例として挙げ、より具体的な事柄についてご紹介頂いた。その内容はリサーチを実施した際のチーム編成やメンバーの役割、そして、①field research, ②synthesis, ③concepting, ④pilotingという実際のフィールドワークのプロセスについてなど、より実践的なものであった。この具体的な事例を通じたお話に限らず、全体を通して氏のご講演は現場で実際にリサーチされてきたリサーチャーとしての目線で

あり、所々にその哲学が覗く、大変興味深いものであった。

講演の最後、質疑応答では「どのようにリサーチメンバーを選ぶのか」「プロセスについてもう少し具体的に教えて欲しい」「クライアントを現場に連れて行く事はあるか」などの質問が飛び、それぞれに対して丁寧にお答えを頂いた。質疑応答を含めても一時間強のご講演であったが、時に参加者に質問を投げかけながら終止、飾る事なくフランクにお話頂き、普段あまり知る事のないデザインリサーチの実際を垣間みることのできる、示唆に富んだ時間となった。

## 5.7 各種イベント

### 第1回京大デザイン心理学講演会

日時：2013年3月4日（月）14:00～16:00

会場：京都大学教育学部本館 1F 第一会議室

講演者：日比野 治雄（千葉大学大学院工学研究科デザイン科学専攻デザイン心理学研究室教授）／（株）BB STONE デザイン心理学研究所 技術顧問

講演題目：心理学的視点からのデザインへの貢献—デザイン心理学とは？

日本におけるデザイン心理学の開拓者である日比野治雄千葉大学教授を招いて、「心理学的視点からのデザインへの貢献—デザイン心理学とは？」と題する講演をお願いした。

講演では、どのようにデザイン心理学の領域を開拓し、それをベンチャー活動にまで応用したのか、心理学のパラダイムがデザインにどのように役立つかについて、その具体的な成果（使いやすいリモコン、医薬品の表示など）に基づいてお話をいただいた。すなわち、デザインは、それを創造するのも、またそれを受容するのも人間であること、そのため、デザインにおける様々な問題には、ほぼ必ず人間にに関する要素が関連していること、「デザイン」には「人間の行動」を変える力があること、一方、心理学の領域には、人間を科学的な手法で多角的に扱ってきた長い歴史があり、非常に多くの有益な知見が集積されていること、そして、デザインの問題を扱う場合には、心理学的な視点はとても強い武器となることを論じていただいた。講演終了後、デザインスクールについての紹介をおこなった。

### 第2回京大デザイン心理学講演会

日時：2013年3月12日（火）13:30～15:00

会場：京都大学教育学部本館 1F 第一会議室

講演者：David C. Plaut (Department of Psychology and the Center for the Neural Basis of Cognition, Carnegie Mellon University 教授)

講演題目：Neurocomputational design of reading and language: Using neural-network modeling to inform cognitive neuropsychology

認知心理学においては、人間の認知過程を理解するために、さまざま心理学的モデルを用いて仮説検証を行う。こうしたモデルの中でも特に、神経学的な制約を反映したコンピュータシミュレーションモデルは、神経科学と認知心理学の知見を統合する役割を担うものとして期待されている。こうした状況の中、デザイン学大学院国際アドバイザリーボードのメンバーである David C. Plaut 教授 (Department of Psychology and the Center for the Neural Basis of Cognition, Carnegie Mellon University) が国際デザイン学シンポジウム出席のために来日することとなり、ニューロコンピュテーション・デザインの専門家である同教授を講演者としたデザイン心理学講演会が開催された。

この講演では、読みなどの言語処理や意味処理に関わる認知過程のコンピュテーション・モデリングを紹介しながら、認知神経心理学的研究における、コンピュータシミュレーションの役割が論じられた。

### Design Psychology Workshop on Memory and Language

日時：2013年3月12日（火）15:00～17:00

会場：京都大学教育学部本館 1F 第一会議室

デザイン心理学の最先端の研究者を招聘しての第2回デザイン心理学講演会に引き続き、若手研究者によるワークショップを開催した。このワークショップでは、記憶と言語の認知心理学的なモデルをデザインする際に、どのような制約や神経学的基盤が考慮されるべきなのかという問題をターゲットとした。若手研究者による4件の発表の後、David C. Plaut教授（Department of Psychology and the Center for the Neural Basis of Cognition, Carnegie Mellon University）からコメントを受けた。コメントは、それぞれの発表に対する個別の問題に加え、モデルのデザインについての包括的な指針を示すものであった。特に、環境に存在する刺激の統計的なパターン（単語や言語音系列の出現頻度や共起頻度等）が、どのように蓄積され、こうした知識がどのように運用されるのかというメカニズムについてのモデル構築デザインの観点からの示唆が重要であった。このワークショップでは、講演者と若手研究者の交流を促進することで、デザイン心理学に関わる若手研究者の国際発信力の育成を目指したが、この観点からも十分な成果が得られた。

### Design Psychology LENS Tutorial

日時：2013年3月13日（水）13:00～18:00

会場：京都大学教育学部本館 2F 中央実験室

第2回デザイン心理学講演会と若手研究者によるデザイン心理学ワークショップの翌日に、Computer Simulation Soft の LENS (the light, efficient network simulator) のチュートリアルを、その専門家であり、国際デザイン学シンポジウム参加のために来日していた David C. Plaut教授（Department of Psychology and the Center for the Neural Basis of Cognition, Carnegie Mellon University）を講師として開催した（2013年3月13日）。LENS は、神経解剖学的な制約のもとにさまざまな認知機能を実現することが可能なソフトで、すでに認知神経科学の最先端で用いられている。参加者は、チュートリアル当日までに、各自のラップトップ PC へ LENS をインストールし、関連 Webpage (<http://tedlab.mit.edu/~dr/Lens>) を参照しながら、独立で LENS を操作できるようになっていることが前提であった。事前準備のハードルは高かったが、心理学的モデルをデザインする際の強力なツールとなるコンピュータシミュレーションの実習ということで、参加者は5時間連続のチュートリアルに熱心に取り組んだ。チュートリアルでは、具体的なコンピュータシミュレーションの例から、モデリングの哲学と呼ぶことのできる思想的な背景まで、論文からは知り得ない内容について、情熱を持って教授された。このチュートリアルは、今後デザイン学大学院に関わる若手研究者の国際的舞台での活動力の育成を目的として、すべて英語で実施された。また、このチュートリアルの成果としての実際のコンピュータシミュレーションは、平成25年度の授業「心理システムデザイン演習1」において報告されている。

### The 1st Design Symposium on Conservation of Ecosystem, SEASTAR2000

日程：2013年3月18日（火）～19日（水）

会場：京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールⅢ

本シンポジウムは東南アジア諸国ならびにその周辺国においてウミガメ類、海産哺乳動物、希少魚類などの保護を行っている政府関係研究機関、関係大学ならびにNGOの研究者がそれぞれの国における絶滅危惧種の現状と保護の実態レビューとお互いの協力関係を構

築するための議論を行った。インド、インドネシア、日本、ヨルダン、ミャンマー、フィリピン、スリランカおよびタイから約40名の研究者によって、魚類8件、海産哺乳類10件、海草藻場2件、ウミガメ類10件の合計30件の発表が行われた。現在、これらの論文のプロセーディングスを取りまとめているところである。

### 利用者参加型ものづくりワークショップ

日程：2013年3月20日（水）～22日（金）

場所：長野県、岡谷市、ララ岡谷イベントスペース

生活を豊かになるモノを自分達で発想して自分の手で作ってみる、そんな一連の作業を学べる「ものづくりのワークショップ（体験型の講座）」を3日間の予定で地域の方々や、関西、関東地域の大学生・大学院生を集めて諒訪地域で開催した。ワークショップではニーズ発見のためのフィールドワークからブレインストーミングを経て目指すコンセプトをまとめ、さらにはコンセプトを実現するアイデアを探索し、プロトタイプとして具体化するまでを実際に体験した。今回は、「ものづくりとは作り手から使い手へのプレゼントだ」という考え方から“「贈る」を「つくる」”をテーマに取り組んだ。

### 「みるきく、つくる、考える」－造形デザイン事始め

日時：2013年3月27日（水）9:30～12:00

会場：京都リサーチパークサイエンスホール

本イベントでは、デザインスクールの予科である京都大学の学生、あるいはデザインスクールに参画する教員が、造形デザインにおける思考手法、ならびに造形デザインの教育機関における教育体系について基礎的な知見を得られることを目的にレクチャーと体験 WSを行った。京大デザインスクールにおいて、Design理論、Design手法を教授、涵養するのに必要なカリキュラムや教育環境とは何かを議論するきっかけのひとつとして企画したものである。連携先の京都市立芸大の教員や学生、デザインスクールにまだ参画していない教員や学生についても参加をうながし、学内あるいは提携先である京都市芸大も含めた共同講義、プロジェクトなどを進めるための情報共有、具体的な連携や参加を考える場、あるいは専門分野の異なる考え方の相違なども徐々に実感する場としても機能することを目的とした。

前半は、辰巳教授より、産官学連携を含めた最先端のデザイン教育の実践と方法について、実際の成果物の紹介とともに講義いただいた。後半は、井上准教授のリードにより、手や目を使ったミニワークショップをおこなった。

### Designful? サービスのデザイン性とは

日程：2013年3月27日（木）～28日（金）

会場：京都リサーチパーク

「デザイン」の対象が、プロダクトからサービスへとシフトしている。ただプロダクトだけをデザインするのではなく、顧客の総合的、継続的な体験をデザインする。しかし、サービスをデザインするはどういうことか？美しいサービスとは何か？今回はサービスの「デザイン性」を議論することに主眼を置いた。新しいサービスを作り出すことにとどまら

ず、サービスにおける「デザイン」という言葉がもつ概念やイメージを考えた。

ワークショップの1日目は、感動を呼ぶブライダル（結婚式）のデザイナー、楽しいゲームのデザイナー、緊張感のある鮨屋の親方など、そこに特別な「体験」を作り出している方々と、サービスのデザインについて議論を交えた。2日目は、新しいサービスのデザインに挑戦した。実際にプロトタイプをつくり、テストし発表する形式で、その成果を目に見える形で表すことをめざした。2日間のプログラムに参加した119名（スタッフ13名含む）は、講演やパネルディスカッションに耳を傾け、グループワークでは熱い議論を交わした。スクールのスタートに向け、刺激を得、さまざまに問題意識を共有する格好の機会となった。

### The First Inter-university Symposium on Field Based Design

Guest University: Hong Kong Baptist University (HKBU)

日程：2013年3月29日（金）

会場：京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールI

Field is defined here as “a spatio-temporal area that is difficult to grasp via any analytical and/or engineering approach due to the co-existence of various individuals and entities, which results in the unexpected occurrence of seemingly accidental events thus necessitating our continuing commitment and caring. (Osamu Katai)” Field based design aims to discover problems arising in various fields, and to provide solutions to those problems. Inter-university Symposium on Field Based Design aims to establish an academic community on design methodologies applicable to various fields. To this end, we collaborate with design oriented activities in different universities to exchange education and research experience. Each time, we jointly organize a symposium with one university mainly located in Asia. This time, we invite a team headed by Professor Jiming Liu of Hong Kong Baptist University, where excellent works in modeling and simulation are ongoing.

### 第3回京大デザイン心理学講演会

日時：2013年6月3日（月）13:30～16:30

会場：京都大学教育学部本館1F第一会議室

講演者：Yuko Munakata（コロラド大学ボルダー校 教授）

Randall C. O'Reilly（コロラド大学ボルダー校 教授）

講演題目：Developmental transitions in the dynamics of cognitive control: Implications for memory and intervention

コロラド大学ボルダー校の Yuko Munakata 教授と Randall C. O'Reilly 教授による講演。Munakata 教授は、行動実験とコンピュテーションナル・モデリングを併用しながら、実行機能（executive functions）の発達について、表象の性質を考慮した興味深い視点を提案しているが、今回の講演は「Developmental transitions in the dynamics of cognitive control: Implications for memory and intervention」というもので、実行機能研究から得られた知見を、教育的介入に活かすための方法を提案しするものであった。

O'Reilly 教授は、神経生物学的制約を取り入れた実行機能のコンピュテーションナル・モデリングの先駆的開拓者で、「How Adaptive Control Emerges from Multiple Interacting Brain Systems」という講演で、実行機能を検討するための新たな理論的枠組みを提案した。二人の講演をもとに、実行機能の心理学的モデルについて、そのデザインに必要な制約や特徴を

議論した。講演と質疑応答は英語で行われたが、大学院生の積極的な参加があり、若手研究者の育成という観点からも有意義であった。

#### 第4回京大デザイン心理学講演会

日時：2013年6月14日（金）13:00～14:20

会場：京都大学稻盛財団記念館3階大会議室

講演者：増田 貴彦（カナダ・アルバータ大学 准教授）

講演題目：文化と視覚表象：アート・デザイン・広告に見られる文化差の研究

カナダ・アルバータ大学増田貴彦准教授が講演を行った。近年誕生した文化心理学は、文化とこころの相互構築プロセス（文化↔こころ）の解明を目指している。なかでも東アジア文化圏と北米文化圏の心理過程を対象とした研究では、それぞれの文化圏で歴史的に蓄積された思考様式の違いが、「注意」のような基本的な心理プロセスにまで影響を及ぼすことを示すデータが報告されている。それぞれの文化圏でみられるアート・デザイン・広告といった視覚表象にも、その文化の人間観・世界観が反映されていることを示す事例が数多く紹介され、研究の今後の発展のためには「文化→こころ」および「こころ→文化」の双方向的な研究が必要であることが論じられた。

#### 100人でつくる京都地図 第1回 三条・四条編

日時：2013年7月27日（土）13:00～18:00

会場：コーポイン京都およびその周辺（南北は御池通～四条通、東西は鴨川～烏丸の範囲）

「100人でつくる京都地図」は、100人で京都の街をぶらぶら歩いて、「みんなの街の感じ方」を地図にしてしまおうというイベントである。参加者の皆さんにしていただくのは、街を歩き、感じたことを携帯電話で発信することだけ。そのみんなの「感じ」を集めると、新しい立体地図ができる。

13時開始のイベントには、学内外、老若男女の54名の方にご参加いただいた。まず主催者側からイベントの趣旨や、発信サイト「100ninmappin」の操作方法の説明。スタッフで試しに歩いて作成した立体地図が映し出されると、早くも「お～」という声が上がった。またこのイベントのもう一つのお楽しみは、チーム対抗のミニゲーム。「つぶやき回数賞」「つぶやき文字数賞」「いろいろ行ったで賞」などの各賞を、5～6人編成の10チームで競った。初めてのメンバーと顔を合わせて打ち解けたところで、街に飛び出した。

歩き方は人それぞれ。範囲内を黙々と歩いて発信する人もいれば、チームで一緒に買い物をしたり、プリクラを撮ったりした人たちも。チーム内ではつぶやきの履歴が共有されるので、途中で待ち合わせてお茶を楽しむチームもあった。この日は薄曇りで暑くもなく、絶好の街歩き日和となかった。

3時間の街歩きを終えた参加者は、「コーポイン京都」の会場へと再び集まった。ここでできた地図を鑑賞。立体地図のシステムに「カフェ」「浴衣」「おいしい」などキーワードを入力すると、その言葉がどこでつぶやかれたかが棒グラフのように表示される。たとえば「おいしい」と「京都の台所」錦市場につぶやきが多く、「涼しい」なら鴨川や高瀬川に集中した。それぞれが自由な歩き方をしても、多くのデータが集まることで、ある程度共通の傾向が見られるわけである。さらに、棒グラフをクリックするとそこでつぶやかれた言葉が表示される。そこでは京都通の参加者の歴史に関する豆知識が披露されたり、プリクラを

撮ったチームの盛り上がりが言葉にあらわれていたり…。会場には笑いが絶えなかった。こうして、全体の傾向とともに具体的でマニアックな言葉も見られるという両面性が、このマップの魅力もある。

その後は各賞の発表があり、たくさんのチームが受賞した。また当日 KBS 京都テレビの取材があり、そしてイベント終了間際に放送されたニュース番組内で流れ、それを皆で見るというお楽しみもあり、イベントは終了した。

事後のアンケートで9割以上の人「楽しかった」と答えるなど、非常に満足度の高いイベントになった。得られたデータは今後分析し、街づくりやシステム開発に活かされる予定。また今後回を重ねることで、観光地図のアプリ開発や、街歩きワークショップの手法としての汎用化を狙っている。デザイン学ユニットの荒牧特定准教授（自然言語処理）、北特定助教（建築・都市計画）、宮部特定研究員（ヒューマンコンピュータインターフェース）という異分野のメンバーがコラボレーションする、デザインスクールらしいイベントとなった。

### リーディングプログラム学生連携プロジェクト（学生企画）

日程：2013年8月23日（金）～24日（土）

会場：静岡県総合研修所 もくせい会館

東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラムと、京都大学デザイン学大学院連携プログラムの共催で第一回リーディングプログラム学生連携プロジェクトを実施した。各大学からは9名ずつの学生が参加し、様々なワークショップに取り組んだ。

今回の目標は「交流を深めること」とし、まず互いの偏見を言い合う意見交換会、今後のワークショップについて考えるミニワークショップを通じてアイスブレイクを行った。その後メインテーマとして「学園祭で最も利益を生み出すことのできる模擬店のデザイン」に取り組み、粘土を使ったプロトタイプ作成を行った。テーマに学園祭を盛り込むことでお互いの大学を深く知ることができ、より交流を深めることができたように思う。

アウトプットでは各グループの特色が大きく反映され多様性に富んだものが作られ、他分野、他大学と連携することによって生まれるエネルギーの大きさを感じた。学生が主体となって運営したワークショップであったが、運営を通して開催の難しさを知り、場のまとめ方についても勉強する機会にもなったと感じている。

今後は本プロジェクトが継続されること、ひいては他の大学にも連携の手を広げ、本プロジェクトが全国・世界規模となることを期待している。

### International Workshop on Advanced Digital Imaging for Preservation, Conservation and Exhibition Design

日程：2013年9月11日（水）～13日（金）

会場：LUXLAB, City University of Hong Kong, Hong Kong Science and Technology Park, Shatin Hong Kong

1日目に講演会、2日目以降は実習、実演を行い、中国、マレーシア、香港、日本から80人以上の参加者に対して、芸術およびデザイン学における色彩科学、超高精細スキャニング技術、日本および世界各国でおこなった、井手研究室のプロジェクトを紹介した。また共同主催者による最新の映像技術の展示、デモをおこなった。

## **建築・都市デザイン 国際ワークショップ（京都大学バンコクスタジオ）**

日程：2013年9月13日（金）～21日（土）

会場：キング・モンクート工科大学サテライトキャンパス（バンコク）

海外の大学と連携して、異文化圏の都市をフィールドとした新たな建築・都市デザインの可能性を探る国際ワークショップを、京都大学デザインスクールのイベントシリーズとして開催していく予定であるが、本年度はその第1回として、アジア・メガシティの一つタイの「バンコク」を舞台として、京都大学大学院工学研究科建築学専攻、キング・モンクート工科大学の協働による「京都大学バンコクスタジオ」を実施した。具体的には、日本とタイの学生たちが9日間にわたって協働して、急速に国際都市へと変貌するバンコクのフィールド調査を行い、取り組むべき都市問題を発見し、その場所性・歴史性を踏まえた都市再生のプロジェクトを提案することを通して、新たな社会のデザインにチャレンジした。

最終日には、バンコクの中心部の商業地区・サイアムセンターの中にあるタイの建築家協会のオフィスで、4つの日本とタイの学生の混成チームが作成したプロジェクトのプレゼンテーションを実施し、アメリカと韓国から招へいした建築家も交えて、活発な議論を繰り広げることができた。

## **文化とコンピューティングアート＆デザインエクシビジョン**

日程：2013年9月16日（月）～18日（水）

会場：立命館大学 朱雀キャンパス

第4回文化とコンピューティング国際会議との併催企画として実施した。

国内外のいろいろな場所で行われているアートフェアは、さまざまなギャラリーが一堂に会してブースを設け、今一押しの作家の作品を展示する場である。ここでは、次の3つのタイプ「京都の伝統工芸」、「アート＆デザイン」、「ITコンテンツ」の作品展示を行った。京都の選りすぐった伝統芸術、最先端技術、国際的なアート＆デザインが一斉に揃い、文化とコンピュータに関係した旬な情報が集まる場となった。

## **大企業から飛び出したデザイン人材**

日時：2013年10月5日（土）13:00～17:00

会場：KRP 京都大学デザインイノベーション拠点

講師：小林 慎和（Diixi Pte. Ltd. CEO/Founder）

　　櫻井 亮（Designit 株式会社 日本法人代表/代表取締役）

　　田村 大（株式会社リ・パブリック 共同代表）

　　原 雄司（株式会社ケイズデザインラボ 代表取締役社長）

10月5日、KRP 京都大学デザインイノベーション拠点において、「大企業から飛び出したデザイン人材」と題しワークショップが開催された。社会を変革するリーダーと対話しよう、をキーワードに企業からドロップアウトし、デザインを武器に起業されている4名の講師をお招きし、社会変革に関わる広義での「デザイン」について参加者とともに議論し考える場となった。なお本ワークショップは京都大学、デザインスクール内に限らず、一般の参加者にも広く門を開く形で行われた。

## 第5回京大デザイン心理学講演会

日時：2013年10月7日（月）13:30～15:00

会場：京都大学教育学部本館 1F 第一會議室

講演者：三宅 晶（コロラド大学ボルダーハイスクール 教授）

講演題目：Integrating insights from cognitive psychology and social/personality psychology:

Implications for educational applications

三宅教授は、ワーキングメモリ（working memory）と実行機能（executive function）の分野において、認知心理学および行動遺伝学の手法を用いて影響力のある研究を報告しているが、今回の講演「Integrating insights from cognitive psychology and social/personality psychology: Implications for educational applications」では、これらの分野と深い関わりをもち、また、さまざまな社会的文脈において重要であると考えられている、自己制御の問題をとりあげた。ワーキングメモリ・実行機能の個人差アプローチによる最新の研究成果を、特に社会心理学、人格心理学との関連から論じ、新たな研究のデザインについて議論を行った。

講演は英語で行われ、質疑応答のほとんども英語で行われたことから、デザイン学大学院における若手研究者の育成という観点からも有意義であった。

## 第6回京大デザイン心理学講演会

日時：2013年10月15日（火）10:30～12:00

会場：京都大学教育学部本館 1F 第一會議室

講演者：Filip De Fruyt（ゲント大学 教授）

講演題目：Incorporating a personality perspective in educational and clinical developmental research and professional practice

パーソナリティ心理学においては、人間の性格という行動形質がどのような構造を持ってデザインされているのかを明らかにするために、さまざま心理学的モデルを用いて仮説検証を行う。成人を対象とした研究は進捗を見ているものの、子ども期を対象とした研究はいまだ途上である。そこで、今回は、Filip De Fruyt 教授（Department of Developmental, Personality and Social Psychology, Ghent University）が日本パーソナリティ心理学会第22回大会出席のために来日するという好機を得たため、子ども期のパーソナリティ発達の専門家である同教授を講演者としたデザイン心理学講演会を開催した。

本講演では、児童期・青年期におけるパーソナリティ特性の個人差に関する研究がどのように教育・臨床・発達科学の研究に役に立つか、最近の知見が紹介されながら議論が行われた。

## 100人でつくる京都地図 第2回 秋の嵯峨嵐山編

日時：2013年10月27日（日）10:30～18:00

会場：コミュニティ嵯峨野3階会議室、および嵯峨嵐山の街

「100人でつくる京都地図」は、100人で京都の街をぶらぶら歩いて、「みんなの街の感じ方」を地図にしてしまおうというイベントである。参加者の皆さんにしていただくのは、街を歩き、感じたことを携帯電話で発信することだけ。そのみんなの「感じ」を集めると、新しい立体地図ができる。

今回は午前中の「たっぷりコース」、午後からの「おためしコース」の2つを設け、それぞれ20名の方にご参加いただいた。まず「コミュニティ嵯峨野」の会場で、主催者側からイベントの趣旨や、発信サイト「100nimmapin」の操作方法の説明。また今回は、つぶやきの履歴を共有する5つのグループに分かれてもらった。初めてのメンバーと顔を合わせて打ち解けたところで、街に飛び出した。

今回の対象地域は、自然と人工の融合した魅力的な景観が特徴。秋晴れの空の下、参加者の皆さんには思い思いの街歩きを楽しめたようだ。つぶやきによって、地図がどんどんとできていった。グループ内ではつぶやきの履歴が共有されるので、途中で待ち合わせてお茶を楽しむチームもあった。また、街の中であらかじめスタッフが撮影しておいた妙な「お宝」を探すミニゲームも企画した。夕方5時に、「たっぷりコース」5時間、「おためしコース」3時間の街歩きを終えた参加者は、会場へと再び集まった。

そしてできた地図を鑑賞。参加者が美しいと感じた場所の「美しいマップ」、おばけが出そうと感じた「おばけマップ」などがスクリーンに映し出され、自然言語処理を用いてたくさんつぶやかれた言葉をビジュアル化する試みも行なった。さらに今回は、できた地図とともに、このシステムの活用方法をグループ内で話し合ってもらった。他の人の位置を知りたい、他の人のつぶやきに対して「いいね」や返信をしたいなど、ユーザーの目線からの意見がたくさん得られた。

私たちは、このイベントのシステムを観光地図や街歩きワークショップのツール、あるいは災害時の情報プラットフォームなどに活用し、実社会の野問題解決に寄与することを模索している。本年度の2回のイベントは、その可能性を確かめるのに十分な成果があった。またデザイン学ユニットの荒牧特定准教授（自然言語処理）、北特定助教（建築・都市計画）、宮部特定研究員（ヒューマンコンピュータインタラクション）という異分野のメンバーがコラボレーションする、デザインスクールらしいイベントにもなった。

### Hack U at 京都大学 2013

日程：2013年11月9日（土）～16日（土）

会場：京都リサーチパーク9号館506号室

「Hack U at 京都大学 2013」は、Yahoo! Japanと共同開催した京大最初のハッカソンイベントである。様々な分野から集まった17人の参加者が5つのグループを形成し、創造的な新しいソフトウェアやハードウェアを共同開発した。

「Yahoo! Hack U」は、「Yahoo! Hack Day」の大学バージョンであり、限られた時間、限られたリソースで、創造的なソフトウェアまたはハードウェアを作り出すイベントである。ハードウェアのスキル、ソフトウェアのスキル、情報学以外のスキル、さまざまなスキルを合わせて、新しいサービスを作り出す。この「Hack U at 京都大学 2013」では、1週間、自由な時間に開発し、京都大学の実施者、Yahoo! Japanのスタッフと共に開発を行った。最終日の発表イベントは盛況に終わり、来年度の開催も予定している。

### MicRO アライアンスシンポジウム「マイクロシステムがもたらす社会変革」

日程：2013年11月21日（木）～22日（金）

会場：京都大学桂キャンパス 桂ホール

京都大学桂キャンパスにおいてデザイン学ユニットの支援を得て、京都大学一ミシガン

大学ーフライブルク大学の第 10 回マイクロアライアンスシンポジウムが開催された。2 日目は船井交流センターで高等研究院ナノミクス研究部門の共催で若手研究者によるポスターセッションを開催した。初日のシンポジウムは、サブテーマ「マイクロシステムがもたらす社会変革」が示すように、マイクロシステムの実用化によって社会に与えることができるインパクトに焦点をあてた講演が企画された。京都大学、ミシガン大学、フライブルク大学からそれぞれ 2 件の講演が行われた。マイクロシステムの医療分野への応用、マイクロシステム技術の再生医療への応用、あるいはワイヤレス通信技術とマイクロシステムの融合によるアプリケーションなどが生み出す社会変革に関する話題が提供された。また、香水デザイナー Roland Tentunian 氏を講師に招き、特別講演として香りの分析、調合を含む香りのデザインに関する講演が行われ、出席者の興味を集めた。

### サービス・イノベーション国際シンポジウム

日時：2013 年 11 月 29 日（金）13:00～17:50

会場：芝蘭会館 稲盛ホール

経営管理大学院では、デザインスクール等と共に第 6 回目となるサービス・イノベーション国際シンポジウムを 2013 年 11 月 29 日に「グローバル化するクリエイティブ産業とアジア型プロデューサーの新たなミッション」をテーマとして、京都大学医学部構内芝蘭会館にて開催した。

冒頭の徳賀芳弘 経営管理大学院長による挨拶の後、米国サフォーク大学のロバート・ディフィリッピ教授より基調講演として、現在のクリエイティブ産業におけるデジタル化によるコンテンツ産業の大変動とプロデューサーの新たなリーダーシップのあり方について研究動向を紹介いただいた。そして今後は、国際的に活躍するプロデューサー人材の役割とその開発について課題があることをお話し下さいました。そして、続く第 1 部では、アジアの創造産業において活躍するプロデューサーのマネジメントスタイルの特徴とあり方について、シン・ドンヨプ韓国延世大学教授、仲曉玲台灣成功大學助理教授、山田仁一郎大阪市立大学准教授より、日台韓の現状についてのご報告を受けて、ディフィリッピ教授を交えてパネル討論を行った。その後の第 2 部では経営管理大学院の山内裕講師と鈴木智子講師らがサービス・デザインやサービス国際化の研究での最新成果について紹介した。

そして、第 3 部ではクリエイティブ産業の実務家である内田健二サンライズ代表取締役社長、忽那裕樹株式会社 E-DESIGN 代表取締役、堤大介 PIXAR ANIMATION STUDIOS Art Director を招き、日米のアニメ産業でのプロデューサーの役割の対比や都市空間デザインと社会的イベントのプロデュースの事例についての興味深い講演をしていただいた。そして、アジアでのクリエイティブ産業で活躍できるプロデューサー人材について、廣瀬紳一准教授を交えて議論を行った。

本シンポジウムには、多種多様な産業・学術分野からおよそ 160 名の参加者が集まり、熱心に聴講された。参加者からは、「アジアで活躍できるプロデューサー人材のあり方について今後明らかにして欲しい」など、経営管理大学院における今後の継続的な活動について期待の声が寄せられた。

The RENKEI Collaborating Across Cultures Researcher Development School in Kyoto

日程：2013 年 12 月 2 日（月）～ 13 日（金）

会場：京都大学百周年記念時計台ホール、楽友会館、京都大学吉田国際交流会館、デザインイノベーション拠点、他

本スクールの受講者は RENKEI 加盟大学 11 大学（京都大学・九州大学・名古屋大学・立命館大学・東北大学、ブリストル大学・リーズ大学・リバプール大学・ニューカッスル大学・サウサンプトン大学・UCL (University College London)）から選抜された 2 名ずつ合計 22 名の博士後期課程学生とポストドク研究員で、すでに半年前の 7 月に英国ブリストル大学でのサマースクールに全員参加しており、その後も SNS を通じて交流を深めて来て再度京都に集った。英国から 3 名の教員と本学デザインスクール教員がファシリテータとして参加した。スクールの年間を通してのテーマとして「Urban Sustainability and Resilience」が設定されており、今回の Kyoto School では、日本での、そして京都における Design for Urban Sustainability and Resilience に関する固有の考え方を学び、これをもとに受講者が、日英比較を行いながら日英混合のグループで討議を重ね、最終的に 4 つのグループからプロジェクト提案を行った。また日英の学生同士がより深く知り合う上で、日本の文化や精神について、そして京都大学の歴史や日本の古典文学における和の精神に関する講義を受講したほか、京都市景観・まちづくりセンターや実際の町家（京都市指定有形文化財指定の長江家住宅）の見学と、さらに花柳流師範による日本舞踊や華道家元池坊の生け花の体験・実践学習を実施した。開催期間中には、RENKEI 加盟の日英 11 大学からの副学長クラスの代表者が視察に訪れたほか、受講生全員が京都市庁舎に門川大作京都市長の表敬訪問を行った。

本スクールの企画に際しては、英国発の博士課程人材教育プログラムとして注目を集めている「トランスマラソン・スキル・トレーニング」について、京都に固有な視点を盛り込み実践することを目指した。受講生達は、デザイン学を中心に提供されたグループ課題の日英両受講生による異分野協働を実践し、さらには日本の産業界からの代表者との意見交換に基づくビジネスモデルキャンバスの作成を通して俯瞰力を養い、そして日本文化に関わる講義ならびに体験・実践を通して欧米とは対照的なコミュニケーションスキルや、四季の移ろい・花鳥風月に対する審美感覚に触れることができた。異文化・異分野を背景とする若手研究者が互いに知り合い協業を実現して行く上で、互いの社会制度や文化的・精神的バックボーンの差異と共通点の認識が極めて重要となることを実感させられた 2 週間であった。

## 第 7 回京大デザイン心理学講演会

日時：2013 年 12 月 2 日（月）13:30～15:00

会場：京都大学教育学部本館 1F 第一会議室

講演者：Matthew A. Lambon Ralph（マンチェスター大学心理科学部 教授）

講演題目：The relationship between semantic cognition and cognitive control:

A convergent cognitive-clinical neuroscience approach

Lambon Ralph 教授は、同大学心理科学部の NARU (Neuroscience and Aphasia Research Unit) を率いて、言語処理に関する神経心理学的・神経科学的研究を進め、この分野を国際レベルで牽引している。今回の講演「The relationship between semantic cognition and cognitive control: A convergent cognitive-clinical neuroscience approach」では、意味認知（semantic cognition）—特に意味制御（semantic control）と認知制御（cognitive control）の関係を検討した近年の研

究成果が紹介された。講演は英語で行われ、質疑応答のほとんども英語で行われたことから、デザイン学大学院における若手研究者の育成という観点からも有意義であった。

### 日本とデンマークの教育制度のマッピングシステムの開発

日時：2013年12月10日（火）10:00～11:20

会場：京都大学教育学部本館2階216室

デンマークの教育事情に関して、日本人とデンマーク人の立場や背景知識など文化の違いを考察した上で、文化特有の概念を文化背景の異なるコミュニケーションの受け手に伝える場合に、相手がどのように解釈するかを予測すると、どのような異文化間概念マッピングになるのかのシミュレーションについて、generalization や categorization などの概念学習の認知的なプロセスも交えて紹介された。

### 京都大学第8回ICTイノベーション

日時：2013年12月26日（木）14:00～17:30

会場：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールⅠ・Ⅱ・Ⅲ

京都大学において研究開発されている情報通信技術（ICT）を公開し、産官学連携を促進するため開催された。デザインスクールでは、デザイン学大学院連携プログラムの概要、オープンイノベーション実習／デザインイノベーションコンソーシアム、デジタルファブリケーション、サマーデザインスクールに関する展示を行った。

### Copenhagen Business School (CBS) — Kyoto University (KU) Symposium on Designing Multicultural Creative Environment

日時：2014年1月20日（月）13:30～18:00

会場：京都大学総合研究7号館 情報3講義室

2013年10月末～11月頭にデザイン学の教員が訪問した Copenhagen Business School (CBS) の先生方をお招きし、“Designing Multicultural Creative Environment”をテーマにシンポジウムを行った。

CBSには設立当初から多言語・多文化の環境が根付いており、ビジネストレーニング主体の学校から研究指向型の大学へと変遷する中で、それに加え学際融合とイノベーションの場という特長を併せ持つようになった。

本講演では、CBSから15の部局が37種類の master's program を提供する独自の“matrix program”をはじめ、教育・運営体制について詳細に説明が行われたほか、デザイン学とCBSからさまざまなプロジェクトの紹介が行われた。デザインスクールの目指す学際融合および产学・国際連携を考える上で、CBSのケースから学ぶとともに、今後の双方の連携についても議論を行った。

### 「電子カルテのインターフェース」ワークショップ

日時：2014年2月3日（月）18:00～20:00

会場：メルパルク京都6F「楓」

本ワークショップでは、現在大型医療施設で利用されている病院情報システム（所謂、電

子カルテ）のベンダ（供給会社）4社（富士通・NEC・日本IBM・コアクリエイト）の設計の中心におられた方々をお招きして、各社の電子カルテのヒューマンインターフェースデザインについて紹介していただくとともに、そのインターフェースの裏にある哲学（狙い）について講演を頂いた。会場に集まった多くの医療情報学分野の論客も交えた熱心な議論を通じて、紙メディアを用いた記録・コミュニケーションが既に社会システムとして成り立っている系に、新たに情報技術が入り込むとき、様々な社会的制約が情報システムのデザインに影響し、どのような限界と要求のせめぎ合いを生み出すのかが議論された。また、情報技術の導入によって、旧来の診療記録のあり方や、診療業務そのものも設計し直されなければならないことなどが、議論された。情報システムのヒューマンインターフェースデザインだけ無く、社会の変化がデザインされていく過程が垣間見える二時間半であった。

### 利用者参加型ものづくりワークショップ

日程：2014年2月6日（木）～8日（土）

会場：長野県岡谷市、テクノプラザおかや、ララオカヤ（岡谷ものづくりフェア 2014 会場内）

ものづくりの基本は「作り手から使い手への贈り物である」と考えるべきではないだろうか。このことを課題に、ワークショップ参加者は、使い手が活動する場のフィールドワークから、ありたい姿としてのコンセプト作り、それを実現するアイデアの探究とプロトタイピング、そしてそれを人に伝えるプレゼンテーションまでと、デザインプロセスを一貫して3日間で学んだ。

ワークショップは、中小製造業の集積地として知られる長野県の岡谷市の岡谷ものづくりフェア 2014 実行委員会や諏訪東京理科大のご協力も得て、同フェアの会場内で行われた。参加者は、京都大学の学生のほか、地元の諏訪東京理科大学の学生、地域の方々など13名で、2チームに分かれてそれぞれのグループでアイデアを探った。プロトタイピングには、諏訪東京理科大のご協力も得て、3次元プリンターやレーザーカッターなども活用し、デジタル技術を用いたものづくりの可能性についても考える機会となった。

また、地方の都市や製造業の有り様についても、いろいろな課題を抱えながら主体的にそれに向き合い、様々な試みを行っておられる地域の地域製造業関連や行政の方々と交流をする中で、多くの気づきを得ることができた。

なお、京都大学デザインスクールから参加した学生3名のうち2名は、各チームのファシリテータ役として参加し、ワークショップのファシリテーションやワークショップ自体のデザインについても体験的に学んだ。

### Service Design Round Table

日時：2014年2月15日（土）10:30～18:30

会場：京都大学経営管理大学院 総合研究2号館 マルチメディア講義室

サービスデザインを社会デザインなどに拡大した大きくなくなりで、その理論的、方法論的、実践的側面を議論しようということで、急な呼び掛けにも関わらず、また当日の悪天候にも関わらず、27名（内発表者22名）の多様な方々が参加され、異常な盛り上りを見せた。主にサービス工学、経営学、デザインという異質であるが、サービスとデザインの両方に興味のある方々が集まった。次回も是非やりましょうという熱気に満ちた雰囲気で閉会した。

## ワークショップ「災害を観る 9」

日程：2014年2月19日（水）～20日（木）

会場：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールI

災害発生直後の被害情報の収集・集約、避難所運営支援、その後のまちの再建、さらには生活再建支援といった災害後の対応全般に関わる情報システムについて、最新の成果の共有と、今後の災害対応、復旧・復興に関わる情報システムのあり方についての議論を行った。その結果、今後の災害時の情報システムをより有効なものとするため、防災の研究者、コンピュータ科学の技術者が協働して研究にあたることの重要性が確認された。

## 第8回京大デザイン心理学講演会

日時：2014年2月21日（金）15:00～16:30

会場：京都大学教育学部本館1F 第一会議室

講演者：Matthew R. Logie（ケンブリッジMRC認知脳科学ユニット 教授）

講演題目：Using Desktop virtual environments in cognitive psychological research

Matthew Logie 氏は、同ユニットの Susan Gathercole 教授とエディンバラ大学の Robert H. Logie 教授のグループが、小学生対象の心理学研究に用いているソフトウェアのデザインと開発に携わっており、今回は、そのデザインと開発の詳細について、デモを含めて紹介した。その研究では、実験に参加した子どもたちは、MySchool というヴァーチャルリアリティ空間の小学校の中を移動し、ゲーム感覚で様々な認知課題に従事する。本講演会では、これまでゲーム産業で培われてきたヴァーチャルリアリティの技術を用いて、効率的に心理学実験のデータを収集する方法等が紹介され、心理学実験環境のデザインについて、幅広く議論が行われた。また、講演は英語で行われ、質疑応答も英語で行われたことから、デザイン学大学院における若手研究者の育成という観点からも有意義であった。

## The 2nd Design Symposium on Conservation of Ecosystem (SEASTAR2000)

日程：2014年3月18日（火）～19日（水）

会場：京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールI

2012年度に続き開催した。東南アジア諸国ならびに日本において海産哺乳動物、希少魚類などの保護および陸域野生動物の生態研究を行っている政府関係研究機関、関係大学などの研究者ならびに大学院生がそれぞれの国における現状と保護の実態レビューを行った。さらに大学院生を中心に協力関係を構築するための議論を行った。本シンポジウムではフィリピン、タイ、日本、インドネシア、ルクセンブルグ、フランスなどの約40名の研究者によって、合計29件の発表が行われた。現在、これらの論文のプロシードィングスを取りまとめているところである。

## つくってかんがえるワークショップ－わたしに似合った自転車ヘルメット

日程：2014年3月21日（金）～23日（日）

会場：京都大学吉田キャンパス デザインファブリケーション拠点

本ワークショップでは、スタッフと参加者の垣根を取り払い、スタッフも一参加者として

ワークショップを進行させた。1日目は、まず皆で自己紹介とヘルメットをかぶっているかどうかを話していった。この段階で、シティーサイクルを利用する人にとって身近でないだけでなく、気恥ずかしさを感じるものであることがわかった。ヘルメットを自分の安全や自分の格好良さという視点から離れるために、まちづくりとして見たときの自転車について2件の講演を受けた。その後、実際にまちなかに出て自転車の状況を調査した。調査結果からは、ほとんどの人がヘルメットをしていなかったが、ヘルメットをしている人の行動にいくつかの気付きが生まれた。また、自転車への工夫や自転車利用者の行動様式などにも新たな気づきが生まれ、その情報を皆で出し合った。その後、実際のヘルメット制作に関する講演を受けた。自分たちの調査結果と講演中のディスカッションから、自分たちが作るヘルメットのアイデアを練り始め、持ち帰った。2日目は、持ち帰ったアイデアをもとにスケッチをしながらコンセプトを明確にしていった。午後からは、実際にヘルメットのプロトタイピングを始めた。3日目は昨日に続きプロトタイピングを進めた。午後は自分の制作したヘルメットのプレゼンテーションの準備を進め、最後にプレゼンテーションと振り返りを行った。本ワークショップでは、講演はプロフェッショナルとしてスタッフが行ったが、それ以外は参加者と対等にすべての過程を一緒になって行った。参加者は、プロフェッショナルによる制作のサポートを受けるだけでなく、プロフェッショナルが真剣に制作を進める姿を見てデザインワークを実感できた。スタッフは、それぞれの専門の中で本制作を振り返る中で新たなヒントを得て、それぞれの日々のデザインワークに反映できると感じた。

### Research Meeting on the Historic Urban Landscape and Cultural Landscape

日程：2014年3月27日（木）～30日（日）（現地セミナー3月29日）

会場：ローマ大学（現地セミナー サン=キリコ=ドルチャ）

歴史的都市や集落エリアの価値ある文化的景観の保全・継承と当該地域の創造的発展は、不可分で一体的に扱われるべき課題として国内外の各地で多主体の参画する様々な取り組みが行われている。歴史的な地域の保全とは必ずしも旧態の存続のみを意味せず、時代の要請をも反映した重層的な文化の展開の結果表出する統合的現象として認識するものとなっている。従って、この分野は都市・地域計画に閉じずひろく文化に関わる関係者や地域社会の役割にわたる多主体による議論の対象となっている。とりわけ、世界遺産や国選定文化財となっている歴史的都市や文化的景観においては現在進行形の議論である。

この議論に関して国際的な発信を進めていくことを目標としてイタリア・ローマ大学との交流を行いつつあり、準備的調査と議論開始のために、今回京都からイタリアを訪問して行う比較的小規模なセミナー（研究会）を行うこととした。ローマ大学パオラ・ファリーニ教授等の準備をいただき、現地調査ならびに、Palazzo Chigi San Quirico d'Orcia を会場として現地セミナー「I paesaggi culturali come Patrimonio Mondiale: la Val d'Orcia ed I siti Unesco del Giappone. Gestione e problemi emergenti（世界遺産としての文化的景観：日本とオルチア渓谷のユネスコサイト：管理と新たな課題）」を開催し、オルチア渓谷遺産地域から、景観保全の計画を作成したファリーニ教授、自治体組織代表、地域産業従事者、京都からは、先方の依頼もあり「紀伊山地の霊場と参詣道」県登録委員会メンバーであった神吉教授がパネリストとして参加し、管理に関わる問題の意見交流を行った。

今回の交流には本科生4名のほか、現地の保全・管理に関わる様々な属性の来場者約20名が参加し、景観の価値保全と統合的に取り組まれるべき地域産業の役割についての意見交流を行った。景観保全は、従来建築・都市等の計画学の担当する分野とされてきた傾向が

あるが、産業等との密接な関係をもつことから多分野統合的デザイン課題として扱うことが求められており、その研究・実践体制を国際的にも育てていくことが必要であり、そうした意見交流の場を今後の実習・演習等の場として整備していくことを目指している。

## 6 デザインイノベーションコンソーシアム

### 6.1 概要

#### (1) 設立の目的

デザイン学を基礎に異分野の専門家と協働しながら、社会の実問題に取り組み、社会のシステムやアーキテクチャをデザインできる優れた人材を養成することを目指す本プログラムは、大学のみではなく、産業界や公的機関との密接な連携の下で推進することが不可欠なものとなっている。

本プログラムの目的の達成に向け、本プログラムを核とした密接かつ柔軟な産官学連携の実現を図るため、産業界や公的機関と大学の橋渡しをする中間組織体を設立すべく、産官学の有識者 36 名の発起人によるデザインイノベーションコンソーシアム設立趣意書が平成 25 年 9 月 26 日に開催された発起人会において決定され、コンソーシアムへの参加が呼び掛けられた。そして、当該設立趣意書に多くの賛同を得て、コンソーシアムへの参加申込みをいただき、平成 26 年 3 月 14 日に設立総会が開催され、産官学の組織で構成されたデザインイノベーションコンソーシアムが正式に設立された。

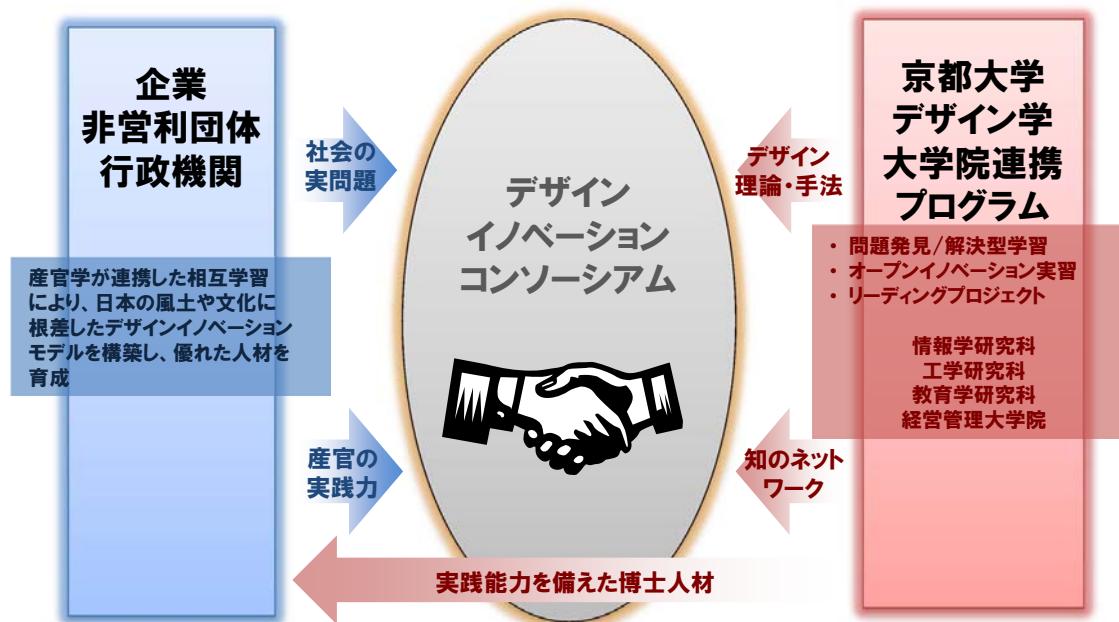


図 6-1 デザインイノベーションコンソーシアムの概要

#### (2) 組織

本コンソーシアムは、任意団体として設立されている。このため、法人格を有しないことから、本コンソーシアムに係る権利義務については、公益財団法人京都高度技術研究所を本コンソーシアムの管理法人として定め、同法人に帰属させている。

本コンソーシアムの内部組織としては、最高意思決定機関として全会員で構成する総会を置いている。また、本コンソーシアムを円滑に運営するために、役員で構成する理事会を

置き、事業計画書および収支予算書の承認や業務執行の決定を行うこととしている。さらに、理事会の下に推進委員会を置き、日常的運営を担うこととしている。本コンソーシアムの事務局は、京都大学デザインイノベーション拠点が設置されている京都リサーチパークの運営主体であり、産官学連携に多くの実績を有する京都リサーチパーク株式会社が担うこととしている。なお、本コンソーシアムは、会員からの会費および各種活動への参加費により非営利団体として運営することとしている。

本コンソーシアムの役員（平成 26 年度）については、設立総会で以下の方々が選任されている。

会長	大竹 伸一	西日本電信電話株式会社 相談役
副会長	門内 輝行	京都大学大学院工学研究科建築学専攻 教授
理事	荒尾 真樹	オムロン株式会社 執行役員常務 田中 健一 三菱電機株式会社 役員技監
	守倉 正博	京都大学大学院情報学研究科通信情報システム専攻 教授
	三浦 智康	株式会社野村総合研究所 執行役員 未来創発センター長
	山本 和彦	森ビル株式会社 特別顧問
財務担当理事	川上 浩司	京都大学デザイン学ユニット 特定教授
監事	徳賀 芳弘	京都大学経営管理大学院 教授

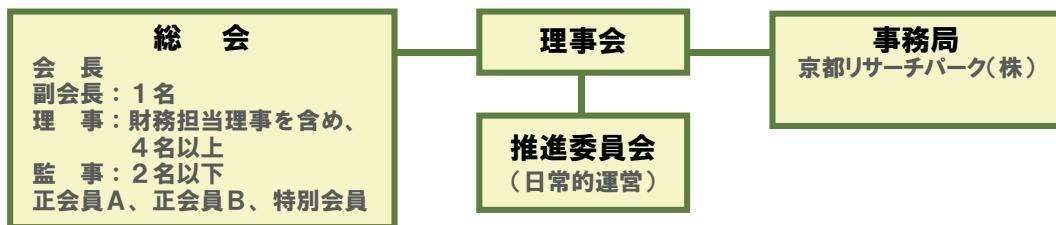


図 6-2 デザインイノベーションコンソーシアムの組織

### （3）活動内容

本コンソーシアムでは、京都大学と産業界・行政の連携により、大学が保有する知のネットワークやデザイン理論・手法と産官が持つ社会の実問題や実践力が交わる相互学習の場を形成しつつ、様々な専門領域の知見を融合させて新たな価値を共創することにより、日本の技術力や文化を活かしたデザイン活動を展開し、グローバル競争を勝ち抜くイノベーションの創出に寄与するとともに、自ら創造的なプロセスに寄与できるスキルと専門性を備え、異領域間のコラボレーションを行える活力ある人材の育成を目指している。

このため、デザイン学に関する人材育成の推進、产学官によるオープンイノベーションの推進、デザイン学に関する共同研究の推進等を本コンソーシアムの活動内容とし、平成 26 年度は、具体的には、デザインセミナー、デザインフォーラム、プロフェッショナル・デザインキャンプ、サマーデザインスクール、オープンイノベーション、京都大学デザインイノベーション拠点フェローなどのプログラムを開催していくこととしている。

こうしたプログラムは、大学の博士教育と企業の人材育成をシームレスに接続したものとしており、可能な限りプログラム履修者と社会人が共に参加するものとしている。このよ

うなプログラムや社会人が京都大学デザインイノベーション拠点で活動するフェロー制度により、プログラム履修者が社会の実問題に触れつつ、産官の実践力を学び、社会の様々な分野で活躍可能な優れた博士人材の育成に資するものとしている。

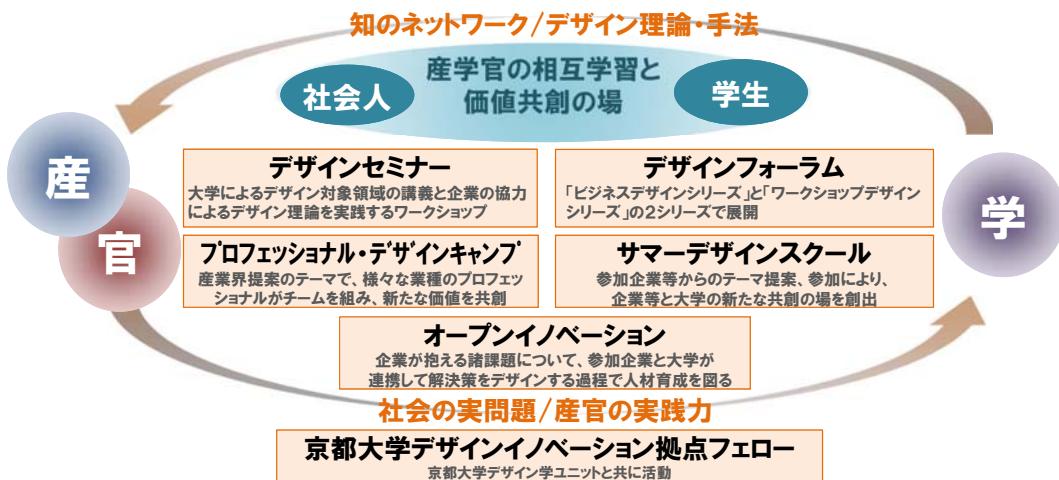


図 6-3 デザインイノベーションコンソーシアムの活動

## 6.2 会員

本コンソーシアムの設立趣旨に賛同いただいた様々な業種の大手企業や京都府、京都市等の公的機関等計44組織（平成26年3月末時点）が会員となっている。

会員の区分については、規約において、以下の3区分が規定されている。

正会員A：本コンソーシアムの事業の企画に参加し、受講することができる。また、デザイニアノベーション拠点を利用した活動ができる。年会費30万円。

正会員B：本コンソーシアムの事業の一部を受講することができる。年会費5万円。

特別会員：本コンソーシアムの事業の企画に参加し、受講することができる（官公庁等）。年会費無料。

以下に会員一覧（平成26年3月末時点）を示す。

### 【正会員A】

大阪ガス株式会社  
オムロン株式会社  
京都大学デザイン学ユニット  
京都リサーチパーク株式会社  
株式会社KDDI研究所  
シャープ株式会社  
ソニー株式会社  
ダイキン工業株式会社  
大和ハウス工業株式会社  
株式会社竹中工務店  
DMG森精機株式会社  
株式会社東芝  
東レ株式会社  
西日本電信電話株式会社  
西日本旅客鉄道株式会社  
株式会社日建設計  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
株式会社野村総合研究所  
株式会社博報堂  
株式会社フジタ  
株式会社ミサワホーム総合研究所  
三菱電機株式会社  
ヤマハ発動機株式会社  
横河電機株式会社  
株式会社リクルートホールディングス  
(25組織)

### 【正会員B】

株式会社石本建築事務所  
株式会社NTTデータセキスイシステムズ  
株式会社沖縄教育出版  
鹿島建設株式会社  
公益財団法人京都高度技術研究所  
JFEスチール株式会社  
住友重機械工業株式会社  
住友電気工業株式会社  
大成建設株式会社  
株式会社地域計画建築研究所  
株式会社電通  
株式会社堀場製作所  
三井住友建設株式会社  
村田機械株式会社  
森ビル株式会社  
(15組織)

### 【特別会員】

京都府  
京都市  
京都商工会議所  
独立行政法人情報処理推進機構  
(4組織)

（注）法人内の一組織として会員となっている場合の法人内組織名の記載は割愛

### 6.3 設立総会

平成 26 年 3 月 14 日（金）に開催された本コンソーシアムの設立総会等の模様は、以下の通りである。

京都大学百周年時計台記念館の国際交流ホールにおいて設立総会が開催され、「デザインイノベーションコンソーシアム」が正式に発足した。当日は、多くの会員の皆様（出席：41 組織、委任状提出：3 組織、参加総数約 100 名）が出席し、規約の承認および役員選任が行われた。コンソーシアム会長には NTT 西日本の大竹相談役、副会長には京都大学の門内教授が選任され、理事として企業や大学から 6 名が選任された。最後に、京都大学の淡路理事・副学長から京大デザインスクールおよび本コンソーシアムへの熱いメッセージを頂戴し閉幕となった。

設立総会の終了後には、京都大学デザインファブリケーション拠点の見学が行われた。設立総会の会場から離れている場所にあるにも関わらず、多くの方に足を運んで頂き、熱心に見学頂いた。

この間、総会で選任された役員による理事会が開催され、各種規程の制定並びに平成 26 年度事業計画書および収支予算書が承認された。また、コンソーシアムの日常的運営を目的として理事会の下に推進委員会を設置することが決定された。



設立総会の会場



議事進行の様子

この後、コンソーシアムの設立を記念して開催された設立記念講演会は、会員組織に加えて京大の学生や教員の方々が加わり、200 名近くの熱気溢れる会場で、米国のデザインコンサルティング会社 ZIBA 社の戦略ディレクター・ビジネスデザイナーの濱口秀司氏によるイノベーションの作法の講演が行われた。濱口氏は京都大学のご出身で、USB メモリをはじめ数々のイノベーションの実績を持つデザイン戦略・イノベーションの世界的第一人者であり、本コンソーシアムのスタートとなる講演として、実際にタイムリーな話題をご提供いただいた。2 時間近くの講演後も、会場からの質問が終わらず、終了後も濱口氏を取り囲む人の輪が幾重にも拡がっていた。



濱口氏の講演

懇親会は、大竹会長、石田コーディネータの挨拶、門内副会長の乾杯のご発声でスタート、ひとしきりご歓談いただいた後、京都大学から佐藤情報学研究科長、北野工学研究科長、理事を代表して野村総合研究所の三浦執行役員、三菱電機の田中役員技監、自治体からは京都

市の白須産業戦略監にそれぞれご挨拶をいただいた。会場では懇談の輪が広がり、デザインスクールの履修者も含めて賑やかな談笑が続き、ほとんどの出席者に京都リサーチパーク森内社長による中締めのご挨拶までお付き合いいただいた。

## 7 その他の活動

### 7.1 広報活動

ここではプログラム全体としての広報活動について記す。全体の広報活動は「デザイン学ユニット広報小委員会」を設置して行なっている。各種イベントなどの広報はイベントの担当者が個別に行なっている。なお、これらの主要なものについては付録に掲載する。

#### (1) ロゴマーク

京都大学デザインスクールの理念を象徴するロゴマークの作成を行なった。作成にあたってはコンペ形式を採用し、プロのデザイナーの他、学内外のプログラム関係者に対して案の応募を促し、広報小委員会での議論を経て決定した。その結果、下記のロゴマークが選ばれた。このロゴマークを説明するコンセプト文は以下である。

京都大学デザインスクールは、本学の伝統である深い専門性に基づく独創力（垂直軸）と、幅広い俯瞰力や他領域との協働力（水平軸）を兼ね備えた、“+ shaped people”（十字型人材）”の育成をめざしています。このロゴマークは、“+ shaped people”が手を取り合い、これから社会のデザインへ向けて共に歩んでいく様子を表現しています。

ロゴマークは、以下に述べる紙媒体やインターネット媒体をはじめ、多くの広報物に活用されている。



DESIGN SCHOOL  
KYOTO UNIVERSITY

京都大学デザインスクールのロゴマーク

#### (2) 紙媒体

本プログラムが開始した2012年10月から2013年度末までの間に、主な紙媒体での広報物として、以下のパンフレットとポスターを作成した。

##### (i) 概要パンフレット

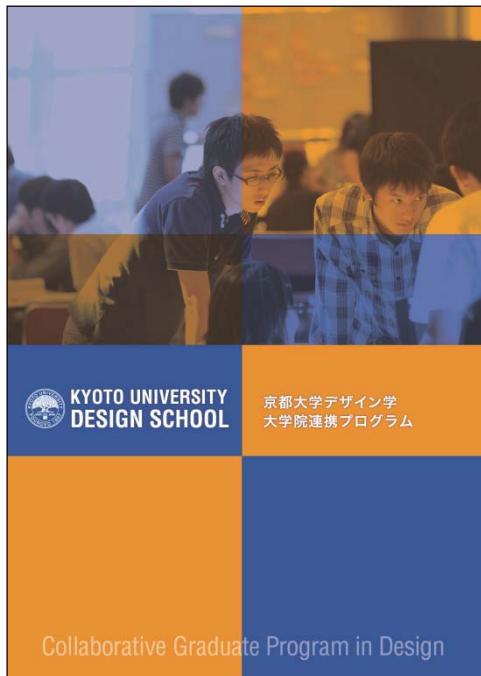
本プログラムが育成する人材像、カリキュラム、連携体制などの概要を説明した、A4巻き三つ折り6ページのパンフレットである。日本語版、英語版を作成した。

##### (ii) 履修ガイド

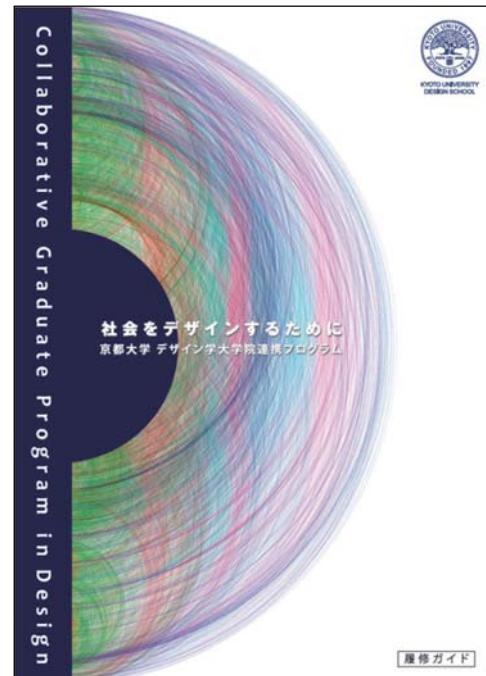
主にプログラムの履修を検討する学生を対象として、カリキュラムの内容をわかりやすく説明した8ページのパンフレットである。日本語版、英語版を作成した。

### (iii) Program Overview

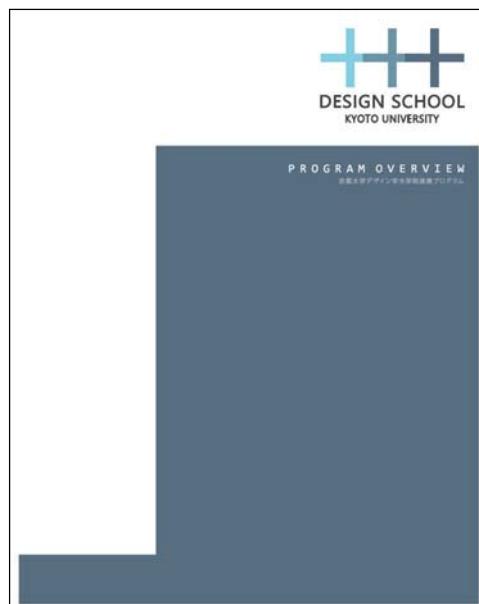
学内外の学生や教員、あるいは産官の関係者などに広く本プログラムの活動内容を知つてもらうために作成した、28 ページのパンフレットである。履修生へのインタビューやイベントのレポート、講義の内容なども詳しく紹介している。日本語版を 2013 年度に作成し、英語版は 2014 年度に作成予定である。



概要パンフレット



履修ガイド



Program Overview

#### (iv) ポスター

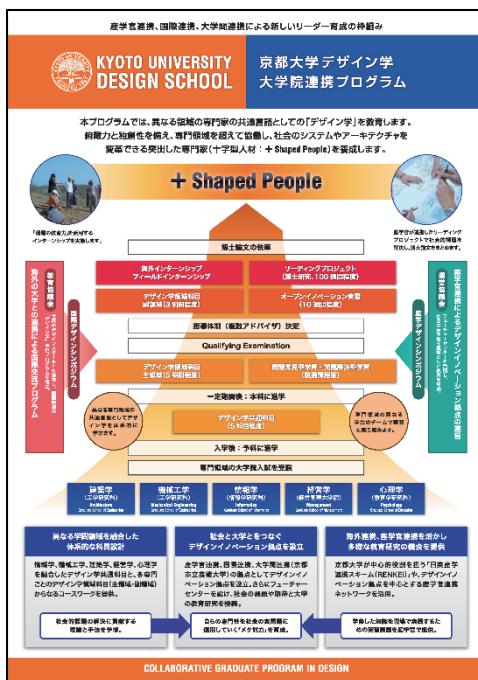
学内外の学生の獲得や、各種イベントなどでの本プログラムの広報のために、数種類のポスターを作成した。



ポスター1



ポスター2



カリキュラム



カレンダー

### (3) インターネット媒体

本プログラムの活動を広く世界に発信するための媒体として公式 Web サイトを作成し、本プログラムの概要、体制、カリキュラム、イベント一覧、教職員一覧などの情報を掲載した。

2013 年度後期には、前述のロゴマークが策定されたことに伴い意匠の見直しを行い、さらに、本プログラムの活動が 1 年経過する間にコンテンツが次第に複雑化したため、メニュー構成などを整理した。



Webサイト（2012年度作成）



Webサイト（2013年度作成）

## 7.2 海外調査・交流

### (1) 米国調査 第一回

(i) 期間：2012年10月30日（水）～11月2日（土）

#### (ii) 調査参加者

石田亨（プログラムコーディネータ、情報学研究科教授）／榎木哲夫（工学研究科機械理工学専攻教授）／黒橋禎夫（情報学研究科知能情報学専攻教授）／松井啓之（経営管理大学院教授）

#### (iii) 目的・訪問先

以下の機関を訪問し、国際連携活動の可能性を探索した。

- Harvard University, Graduate School of Design (GSD) (<http://www.gsd.harvard.edu>)
- MIT D-Lab (Development through Dialogue, Design & Dissemination) (<http://d-lab.mit.edu/>)
- University of Michigan, The Design Science PhD Program (<http://designscience.umich.edu/>)
- IDEO (<http://www.ideo.com/>)
- Stanford University, d.school (<http://dschool.stanford.edu/>)

### (2) 米国調査 第二回

(i) 期間：2014年3月1日（土）～9日（日）

#### (ii) 調査参加者

十河卓司（デザイン学ユニット特定准教授）／北雄介（同特定助教）

#### (iii) 目的・訪問先

以下の北米の有力なデザイン教育・研究関連の大学を訪問し、デザイン教育のカリキュラムやデザイン研究に関する情報収集、意見交換を行った。

- Illinois Institute of Technology (IIT), Institute of Design (<https://www.id.iit.edu/>): Matt Mayfield (Vice Dean, Assistant Professor), Stan Ruecker (Assistant Professor), Vijay Kumar (Professor)
- Harvard University, Graduate School of Design (GSD) (<http://www.gsd.harvard.edu/>): Mark Mulligan (Director, Associate Professor), Martin Bechthold (Professor, Co-Director)
- Massachusetts Institute of Technology, School of Architecture and Planning (SA+P) (<http://sap.mit.edu/>): Darren Bennett (Graduate Admissions Coordinator)

#### (iv) 調査・議論の概要

- IIT
  - IITでのデザイン教育は理論が主だが、ビジネスの分野を意識し、プラクティカルな側面を重視している。
  - デザインのバックグラウンドのない学生に対しては、初めに1年間、基礎を学ぶ期間を追加で設けるという取り組みを始めた。
  - 博士論文では3つのケースを行う。

• GSD

- 毎年学生にアンケートやインタビューを行い、プログラムの改善に役立てている。
- 「FBL/PBL はダイバーシティが必要ではないか、例えば最低 2 つの部局の教員が組んで提供するようにしてはどうか」、「FBL/PBL の履修前にデザイン学共通科目や領域科目を履修させた方が良いのではないか」などというコメントを得た。



IIT のワークスペース



GSD のワークスペース

上記の GSD での議論のうち、科目の履修順序に関する指摘については、M1 の 9 月にある本科生選抜で前期の成績を評価の対象としているという事情があるものの、いずれも今後改善の余地のある点であると認識した。

全体的な所感として、これまでに訪問した大学と比べて、京大デザイン学は 4 研究科 11 専攻が関わる幅広いアクティビティであると感じた。一方で、京大デザイン学は立ち上がったばかりで分野が多岐にわたるが故に、現状では掴みどころがない、領域間の連携が弱いといった印象も否めない。今後、各領域の専門家同士が、自らの領域を越え、新たなデザイン学の確立に向けて協働し、あるいは切磋琢磨する組織文化の育成が必要である。

(3) 欧州調査 第一回

(i) 期間：2013 年 8 月 17 日（土）～ 29 日（木）

(ii) 調査参加者

松井啓之（経営管理大学院教授）／中小路久美代（デザイン学ユニット特定教授）／十河卓司（同特定准教授）／北雄介（同特定助教）／角川栄里（同特定職員）／井上裕昭（プログラム履修生）／坂口智洋（同）／宍倉洋介（同）／羽田祥子（同）



アアルト大学での議論の様子

(iii) 調査目的

- カリキュラム組成のための事例調査および議論
- デザインイノベーション拠点、デザインファブリケーション拠点計画のための調査

(iv) 訪問先と調査結果

アアルト大学（フィンランド）

ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ経済大学、ヘルシンキ芸術デザイン大学が合併して 2010 年に設立された大学であり、多領域連携、产学連携、多拠点運営など当プログラムとの共通

点が多い。調査では当プログラムの紹介の後、“International Design Business Management” や “Creative Sustainability” などの学際プログラムの紹介を受け、議論した。また “Media Factory” “Design Factory” “Startup Sauna” “Urban Mill” といった多彩な教育研究施設の見学を行なった。多様なプログラムのそれぞれにおいてカリキュラム、組織、施設、教育内容に一貫性があり、非常に参考になった。

#### アントホーフェン工科大学（オランダ）

工業デザイン学部のプログラムについて紹介を受けた。特に、“Next Nature” “Wearable Senses” といった “Theme” に多分野、そして学部生から博士学生、スタッフまでがアサインして協働するスタジオ制度は、大変参考になるものであった。

#### デルフト工科大学（オランダ）

主に工業デザイン学部のプログラムや施設の紹介を受けた。欧州の工学系研究機関において高いランクを誇っており、特に博士教育の質の高さが現地でも伺えた。また学部教育でコラボレーションを、修士・博士で個人研究を進めるスタンスも興味深いものであった。

#### フューチャーセンター “The Shipyard” および “LEF”（オランダ）

フューチャーセンター先進国であるオランダの代表的な 2 施設。“The Shipyard” は「リラックス」「キャンプ」といったテーマごとに多彩な部屋が用意され、“LEF” は巨大なプロジェクトを多用したデジタル空間であったが、いずれも未来創造への強い信念と、それを具現化する環境設計および来訪者を歓待するホスピタリティを徹底している。デザインイノベーション拠点の計画に際して大いに参考になった。

### （4）欧州調査 第二回

(i) 期間：2013 年 10 月 27 日（日）～ 11 月 3 日（日）

#### (ii) 調査参加者

石田亭（プログラムコーディネータ、情報学研究科教授）／子安増生（教育学研究科教授）  
／門内輝行（工学研究科建築学専攻教授）／榎木哲夫（工学研究科機械理工学専攻教授）  
／中小路久美代（デザイン学ユニット特定教授）／十河卓司（同特定准教授）／伊沢好広  
（同特任准教授）／木村千恵子（京都リサーチパーク産学公連携部長）

#### (iii) 調査目的

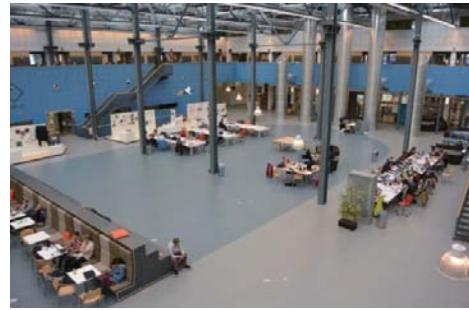
今後の連携に向けた状況把握

#### (iv) 訪問先と調査結果

全体的に Industrial Design、Art、科学等の歴史があり、新たなモノのデザインについて実践的な教育が行われているところ、その歴史の積み重ねの上にしっかりと立ち、イノベーションの創出に向け、起業家精神の育成や持続可能性にも配意しつつ、デザインの対象を慎重に広げてきている。今回の調査により、既存のディシプリンの上にデザイン学をバーチャルに構成するという本学デザイン学の特徴が明らかとなり、この特徴を活かしたデザイン学の推進方策の構築が必要と考えられる。

### デルフト工科大学（オランダ）

Industrial Design Engineering で一つの学部になっており、Industrial Design 教育の積み重ねに立ったデザイン学研究の歴史の重みがあり、また、そのキャンパス環境も優れている。Industrial Design をベースに展開を図っているが、かなり分野横断的であり、領域独立のデザイン学と領域依存のデザイン学の狭間で思慮深く運営を行っている。デザイン学の博士教育を一緒に考えていく相手として最適と思われる。



デルフト工科大学の建物内部の模様

### ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)/インペリアル・カレッジ・ロンドン(ICL)（イギリス）

RCA は、芸術の上に立った実務実習としてのデザイン学の印象。我が国は企業が就職後に教育する傾向が強いが、RCA は、優秀なアーティストが実習プロジェクトを通じて企業で求められるスキルを自ら高める場という印象。他方、ICL は、科学にしっかりと立脚したデザイン学の印象。グループやプログラムとしての推進であり、デザイン学としての学科は存在していないが、相補的関係にある RCA との密接な連携によりデザイン学を推進している。

### コペンハーゲンビジネススクール(CBS)/マインドラボ/デンマーク工科大学(DTU)/コペンハーゲン大学（デンマーク）

CBS およびコペンハーゲン大学については、DTU とも連携し、異なる学問領域のバーチャル連携により、社会の実問題の解決に向けた学際的なプロジェクト志向の教育を積極的に推進している点で本プログラムの一歩先を進んでいるが、Management Engineering 学科を設立した DTU を除き、デザイン学としてのコースの設置には至っていない。マインドラボは、デザイン手法を実際の公的サービス検討に適用する行政機関内シンクタンク的な存在。

## （5）海外の教育研究機関との交流

### (i) 国際アドバイザリーボード

デザイン学の教育研究に関して意見交換を行うため、デザイン学における欧米亜のリーダー、Transferable Skills Training（転移可能な技能訓練）の専門家など、下記の 10 名のボードメンバーを迎える、国際アドバイザリーボードを構成した。また、平成 25 年 3 月には第 1 回国際アドバイザリーボードを開催し、数々の助言を得た。

- Dr. Barry Katz, IDEO, Consulting Professor, Dept. of Mechanical Engineering, Stanford University, USA.
- Prof. Bernie Roth, Director of d.school, Dept. of Mechanical Engineering, Stanford University, USA.
- Prof. AnnaLee Saxenian, Dean of UC Berkeley School of Information, UC Berkeley, USA.
- Prof. Pekka Korvenmaa, Department of Design, working as Vice-Dean of the Aalto University School of Arts, Design and Architecture, Aalto University, Finland.
- Dr. Alison Leggett, University of Bristol, UK. (RENKEI)
- Prof. Maosong Sun, Head of Computer Science, Tsinghua University, China.
- Prof. Dennis Sylvester, Department of Electrical Engineering and Computer Science, University of Michigan, USA.

- Prof. Wolfgang Wahlster, CEO and Scientific Director of the German Research Center for AI, Germany
- Prof. David C. Plaut, Departments of Psychology and Computer Science, and the Center for the Neural Basis of Cognition, Carnegie Mellon University, USA.
- Mr. Christer Windelov-Lidzelius, CEO & Principal at The KaosPilots, Denmark.

(ii) 交流実績

上記以外にも、平成 24 年 10 月から平成 26 年 3 月までの間に、海外のさまざまな教育・研究機関と数十回以上にわたり交流を行ってきた。主な実績について、その詳細を付録に掲載した。

### 7.3 グローバル FD 研修

デザイン学ユニットの教員を対象に英語講義や演習のための訓練を以下のように実施した。

実施期間：2013年12月2日（月）～2014年2月17日（月）

実施場所：京都大学 吉田・桂各キャンパス

担当業者：ベルリツツ・ジャパン（株）京都四条ランゲージセンター

受講者数：11名

教育学研究科 1名（教授1）

情報学研究科 7名（教授1、准教授3、助教2、研究員1）

工学研究科 1名（教授1）

デザイン学ユニット 2名（准教授1、助教1）

各人の受講時間：90分（1コマ）×3回

指導はベルリツツの外国人講師が担当。受講者によるカスタムメイドのマンツーマン訓練を行った。カスタムメイドであるため、指導内容をレッスン前に講師と受講者で打合せを設けた。以下、実施後に提出された受講内容と自己評価を記載した報告の一部を示す。模擬授業を行うため、学生が参加したケースもあった。総じて好評であったが、実施時期などに課題を残している。

研修内容	所感
<p>デザイン学グローバル FD 研修では、英語による講義とFBL/PBLを対象として研修を行った。講義のプレゼンテーション技術に関しては、事前に準備した英語の講義資料を用いて、プレゼンテーションの演習を行った。特に、受講者にとって分かりやすい講義となるように、発表の間の取り方や学生とのインタラクションの取り方、そして単調なプレゼンテーションとならないよう発表内容の強弱の付け方などについて指導を受けた。時間が限られていたため、前回のコメントをフィードバックできるように、毎回同じ講義資料を用いた反復型の演習を実施した。</p> <p>一方、ファシリテーション手法に関しては、ファシリテーションに関する講義と具体的なファシリテーション技術について指導を受けた。2回目の講義では、ファシリテーションの実施計画を立て、その計画を基に、最終回の講義では2名の学生にも協力してもらいファシリテーション演習を実施した。</p>	<p>今回の研修では、英語による講義とFBL/PBLで必要となるファシリテーションについて研修を行った。講義に関しては、単調になりがちな英語のプレゼンテーションを、どうすれば受講者の集中力を維持できるように変えられるかといった問題意識を取り組んだ。普段のプレゼンテーション時に注意する発音やアクセントだけではなく、話し方や学生とのインタラクションの取り方まで学べたのは非常に有意義であった。また、ファシリテーションに関しては、具体的にトピックを決め、講師との議論のシミュレーションを通して実施計画を作成して実際に演習を行うことで、講義だけでは分からなかった時間配分やディスカッションへの柔軟な対応なども体験でき、研修を実質的なものへとすることができた。ただし、時期的に英語に精通した留学生のスケジュールを確保することが難しかったため、できれば年度末ではなく夏季休業などに研修を実施できれば良かったと思う。</p>

研修内容	所感
<p>英語による講義方法について研修を行った。第1回目は、まず講義のイントロダクションである部分について、講義実施内容、評価方法等の英語での説明方法、表現方法について指導を受けた。第2回目は、おもに定式化に関する説明方法、専門用語の正確な発音方法について、詳細な指導を受けた。第3回は、英語の授業の具体的な進め方について、アルゴリズムの導出の講義内容を対象に指導を受けた。また、講義にてよく利用される表現方法についても、具体的な例を提示していただきながら指導を受けた。</p>	<p>今回のデザイン学グローバルFD研修により、より正確な発音で、かつ学生が理解しやすい表現方法にて講義をする方法を習得することができ、英語で講義を行う自身がより高まった。また、講義に参加する学生も、発音の間違いに戸惑うことなく、学習できるようになったと感じている。ベルリッツ講師の講師も大変懇切丁寧で、英語能力の向上に大変役に立った。</p>
<p>今回のグローバルFD研修では、海外の大学との、デザイン学のカリキュラムに関する意見交換や、サマースクール等への学生派遣や協定の締結に向けた議論などを想定し、英語による交渉(negotiation)について研修を行った。具体的には、1回目には現状の英語のスキルの確認と今後の研修スタイル等について相談を行い、2回目と3回目に、講師が準備したテキストを使いながら、一般的な交渉で使われる表現などについて、ロールプレイを中心に練習を行い、指導を受けた。</p>	<p>当初はFBL/PBLなどのグループワークにおける英語によるディスカッションやファシリテーションの研修を想定していたが、当方で作成したワークの設計(アジェンダ)に関しては特に問題はなかったこと、模擬演習を行うのに必要な参加者の招集が難しかったこと、当方にとって英語研修は初めてでありテキストを用いた方が上達を認識しやすいというアドバイスを受けたことなどから、講師と相談の上、今回はFBL/PBLの実施と関連の深いnegotiationの指導を受けることとした。</p>
<p>デザインスクールの紹介、リーディングプロジェクトの紹介、英語講義などを想定したプレゼンテーションを行い、指導を受けた。講師には、各スライドに、有用な英語フレーズを1つ、発音ミスなどの誤り指摘することを求めた。</p>	<p>研修では、講師と実際にnegotiationのロールプレイを行い、一つ一つ丁寧なフィードバックを受けることで、交渉の際には独特の言い回しがあり、それらが交渉における会話を理解する障壁の一つになっていたことが良く理解でき、今後自己学習を行う上で参考になった。他にも、交渉の開始前の準備(代替案の検討)や開始の際の心構えなど、単なる英語研修の枠にはとどまらない知識と経験を得ることができた。</p>
	<p>米国に1年滞在したのは30年前で、それ以降は英語の訓練を受けたことがないまま、今日に至っている。学会での発表、英語講義、研究室での留学生の指導などで英語を日常的に使っているとは言え、自己流になっているのではないかという不安を持っていた。</p> <p>3回の訓練であったが、自己流になっている点を集中的にチェックいただいた。その結果、多くの発音ミス(特にアクセントのミス)、単数複数形のミスの指摘を受けた。特に後者は、記述するときには生じず話すときだけに生じるもので、これまで本人も気が付かないものだった。その他、全くの勘違いで使っていた表現も幾つか指摘され、30年間誤り続けていたことに気付かされた。本FDは、英語に慣れたシニア教員にとっても非常に有効であると感じた。</p>

付録 1 ポスター・チラシ



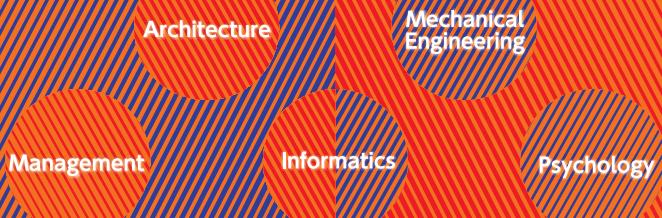
Electrical and Electronic Engineering  
**Agriculture** Sociology  
Energy Science Civil  
Nursing Engineering  
Science Disaster  
Healthcare Management  
Economics



KYOTO UNIVERSITY  
DESIGN SCHOOL

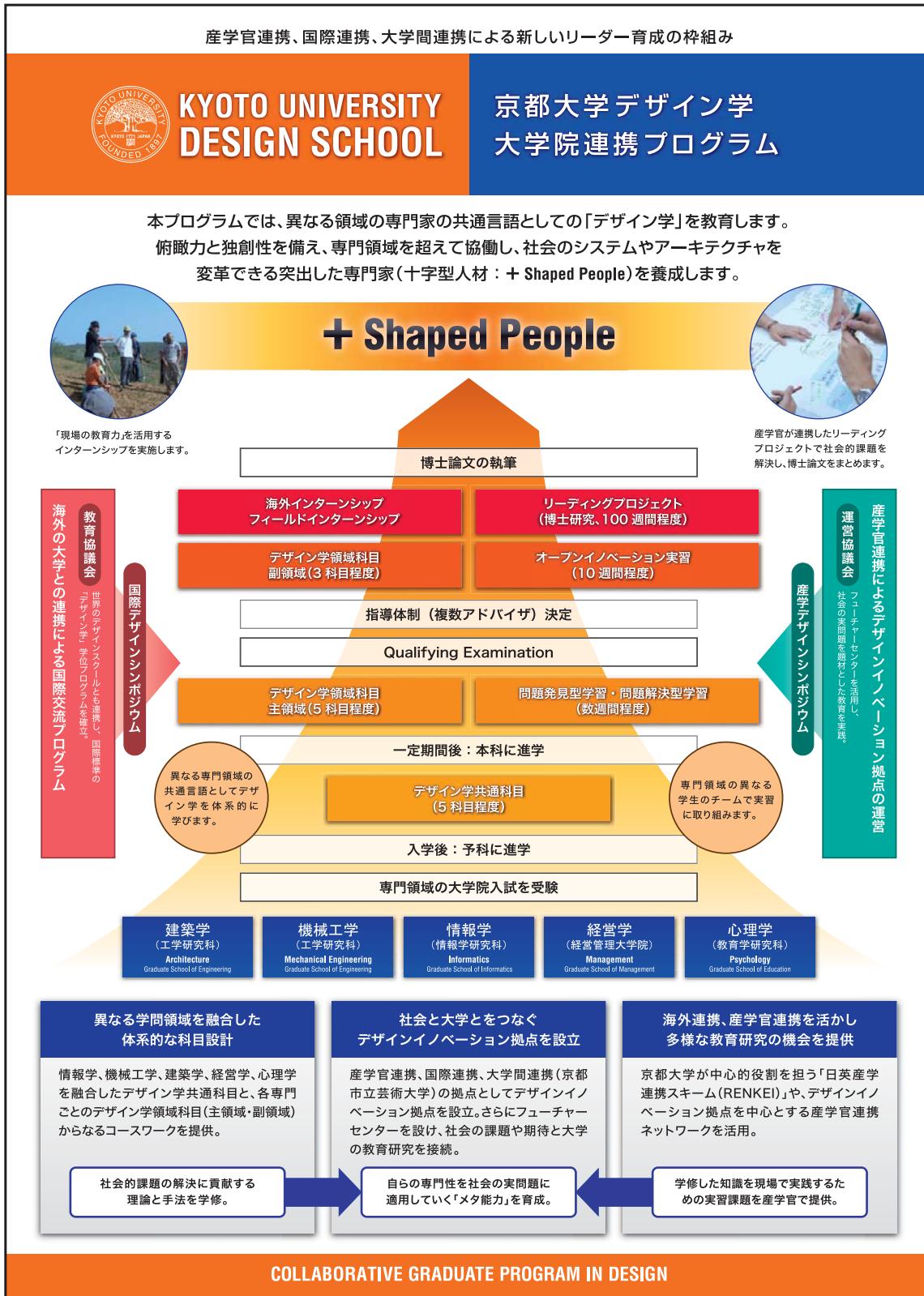
京都大学デザイン学  
大学院連携プログラム

国内外の産学官の連携により、  
諸学の知を融合した「デザイン学」が誕生する。



COLLABORATIVE GRADUATE PROGRAM IN DESIGN

[www.design.kyoto-u.ac.jp](http://www.design.kyoto-u.ac.jp)



## 独創力を高める実問題のラインアップ

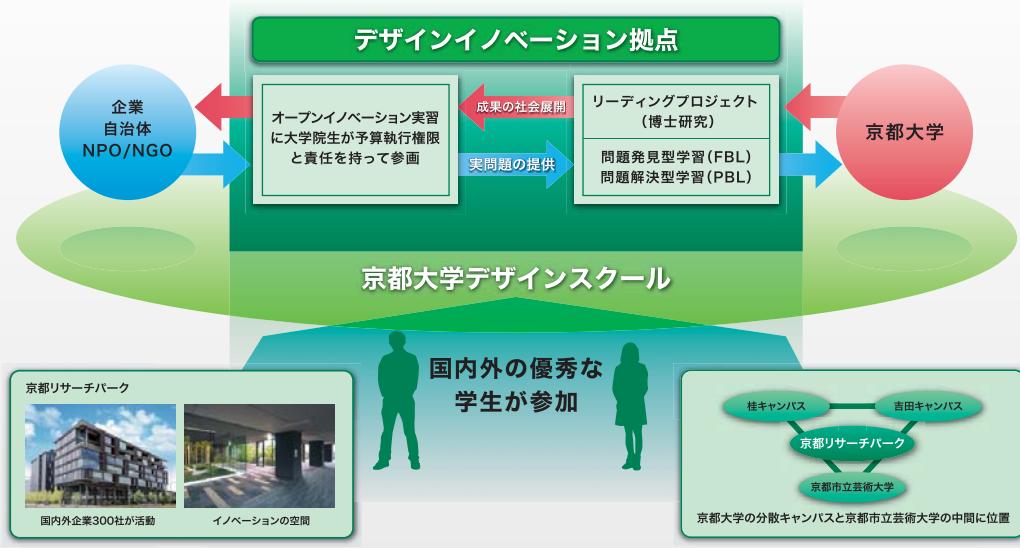
実習とリーディングプロジェクトで実問題を解決する訓練を行う

産業界や公的機関からの実問題



## 学生を切磋琢磨させるデザインイノベーション拠点

リーダー養成プログラムを「形」にしたデザインイノベーション拠点を  
国際社会に開放し「京都大学デザインスクール」と通称





## KYOTO UNIVERSITY DESIGN SCHOOL

### 京都大学デザイン学 大学院連携プログラム

**4.8 April**  
合同説明会  
4月8日(月)  
18:10~

**4.8 April**  
授業開講  
4月8日(月)

**5-6 May June**  
4回生入試向け  
ガイダンス  
5月末~6月上旬

**9.25-27 September**  
サマー  
デザインスクール  
日時: 9月24(火)~27日(金)  
場所: KRPアトリウム

**3. 中旬 March**  
スプリング  
デザインスクール  
日時: 3月中旬  
場所: 時計台記念館

**4.8-15 April**  
予科生募集  
4月8日(月)~15日(月)

**9. 26 September**  
産学デザイン  
シンポジウム  
場所: KRPサイエンスホール

**3. 中旬 March**  
国際デザイン  
シンポジウム  
場所: 時計台記念館  
スプリングデザインスクール  
開催期間中の1日

新たなスタッフ!  
4月8日(月)~15日(月)

5月~7月まで隔週程度で開催  
デザインフォーラム

企業人との  
交流を通じて  
柔軟な発想を養う!

最先端で活躍する  
研究者が集う!

10月~11月まで隔週程度で開催  
デザインフォーラム

# 2013 Schedule

平成25年度 年間スケジュール

- 4 April**
- 5 May**
- 6 June**
- 7 July**
- 8 August**
- 9 September**
- 10 October**
- 11 November**
- 12 December**
- 1 January**
- 2 February**
- 3 March**

4.24 April  
応募者面接  
4月24日(水)

4.26 April  
予科生発表

4 April  
予科生向け  
ガイダンス  
4月末

9 September  
本科生  
発表  
9月末

9 September  
本科生  
入学審査  
9月中旬

hello!!

見聞きするもの  
すべてが藝能になる!  
デザインは楽しい!!!

ここは正念場!!

知と感性を  
開放する5日間!

11.21-25 November  
京大・琉大合同  
デザインスクール  
洋上デザインワークショップ  
日時: 11月21日(木)~25日(月)

12. 2-13 December  
RENKEI  
イベント

日時: 12月2日(月)~13日(金)  
場所: 時計台記念館

11月  
21日~22日  
洋上デザインワークショップ  
23日~24日  
東京大学との  
合同デザインスクール  
25日  
帰着(飛行機)

# 2014

## COLLABORATIVE GRADUATE PROGRAM IN DESIGN

[www.design.kyoto-u.ac.jp](http://www.design.kyoto-u.ac.jp)

**Collaborative Graduate Program in Design**  
京都大学デザイン学大学院連携プログラム

# KYOTO UNIVERSITY DESIGN SCHOOL

## 京都大学デザインスクール 創設

今年4月にスタートする新しい大学院プログラムです。  
異なる分野の専門家との協働によって「社会のシステムやアーキテクチャ」を  
デザインできる博士人材を育成します。

# Designful

## WORKSHOP >> Series 1 Designful? “サービス”のデザイン性とは

オープンなイベントです。学外の方を含め、どなたでもご参加いただけます。  
特に、デザインスクールへの進学を検討している学生は奮ってご参加ください。

2013. 3.27 水

9:30-12:00 集中講義  
「みるきく、つくる、かんがえる」  
—造形デザイン事始め

辰巳 明久  
井上 明彦  
【京都立芸術大学美術学部 教授】(ビジュアル・デザイン)  
【京都立芸術大学美術学部 准教授】(造形計画)

Designful?をかんがえる  
13:00-15:00 パネルディスカッション  
加藤 純子  
辰巳 明久  
玉樹 真一郎  
中澤圭二  
南雲 勝志  
水野 大二郎  
【学校法人立芸学園 キャリエールホテル専門学校 講師】  
【京都立芸術大学美術学部 教授】  
【わかる事務所 代表】  
【アグモデザイン事務所 代表】  
【東京芸大環境情報学部 講師】  
ほか

15:30-17:30 かんがえるセッション

28 木

Designful?をつくる  
9:30-10:00 講演  
Designing Services  
Sungene Ryang [DEO Associate Partner]

10:00-16:00 デザインセッション  
チームで新しいサービスを  
デザインする

櫻井 亮  
【NTTデータ経営研究所】  
寺田 知太  
【野村総合研究所】

16:00-17:00 プрезентーション



お申し込みは Web にて承ります。 参加無料 申込要 締切: 3月 22 日 [金]  
[www.design.kyoto-u.ac.jp/event/designful](http://www.design.kyoto-u.ac.jp/event/designful)

お問い合わせ / 京都大学デザイン学大学院連携プログラム  
山内 裕 [経営管理大学院] designful-workshop@design.kyoto-u.ac.jp  
主催 / 京都大学デザイン学大学院連携プログラム 共催 / 京都大学経営管理大学院

デザインスクールが扱う  
「デザイン」とは何か?

デザインの対象が、プロダクトからサービスへと  
シフトしている。ただプロダクトだけをデザイン  
するのではなく、顧客の総合的、継続的な体験を  
デザインする。しかし、サービスをデザインする  
とはどういうことか? 美しいサービスとは何か?  
今回はサービスの「デザイン性」を議論する。新  
しいサービスを作り出すことにとどまらず、サー  
ビスにおける「デザイン」という言葉がもつ概念  
やイメージを考えていきたい。ワークショップの  
1日目は、感動を呼ぶブライダル(結婚式)のデ  
ザイナー、楽しいゲームのデザイナー、緊張感の  
ある結婚の親方など、そこに特別な「体験」を作  
り出している方々と議論を交える。2日目は、新  
しいサービスをデザインする。実際にプロトタイ  
プを作り、テストし、それを発表する。

### What do we mean by design?

The design discourse is shifting from product design  
to service design. Designing a product is not enough  
for successful innovation; customers' whole experience  
and ongoing engagement are critical targets for  
design. But what does it mean to design a service?  
What is "beautiful" service experience? It is more  
than understanding and responding to customers'  
potential needs. To discuss the "desigfulness"  
of services, we will learn from various practitioners  
who produce exceptional customer experience. A  
bridal coordinator designs a memorable wedding for a  
heterogeneous set of participants. A sushi chef creates  
the environment that engenders anxiety in most novice  
customers. We will discuss how we can design such  
distinctive service experience. On the second day, teams  
of students will design a new service.

場所  
**京都リサーチパーク**  
4号館 Room2

〒600-8813 京都市下京区中堂寺南町 134  
[www.krp.co.jp](http://www.krp.co.jp)



Event details:

- 日 時 | 2013年7月27日(土) 13:00~18:00
- 場 所 | 南北は御池通～四条通、東西は鴨川～烏丸通の範囲の地図をつくります。集合場所は「コープイン京都」2階会議室です。
- 参 加 費 | 無料
- 持 ち 物 | フル充電した携帯電話だけ
- 募集人数 | 先着100人 (webより事前申し込みが必要)
- 開催団体 | 主催:京都大学デザイン学大学院連携プログラム  
共催:JSTさきかけ「情報環境と人」「自然言語処理による診断支援技術の開発」プロジェクト
- 問合せ先 | 100ninmap@design.kyoto-u.ac.jp

Map highlights:

- Oike St.
- Karoumachi St.
- Shijo St.
- VEGAN 電田ハーカー 全部植物性の食材のお店です。
- 二度目のよーじや
- レジが Mac と iPod touch で管理されてた最先端なカフェにて
- 大人な雰囲気のカフェ。いや、珈琲飲めるバーみたい。
- 「レストアの森」でお昼です。ここはカフェと自転車店とセレクトショップがひとつになったような、不思議な空間。
- ずっと気になってたオガワコーヒーザカフェでカブチノ o(^▽^)o
- カフェ de 念力アイス コーヒーを注文すると上田のラスク付き！

参加申し込みはwebで！>>> <http://www.100ninmap.com/>

リーディング大学院連携プロジェクト

# 東大 × 京大

第一回連携ワークショップ  
宇宙都市のデザイン

日時:8月23日-25日

場所:静岡県もくせい会館

東大生、京大生によるリーディング大学院連携プロジェクト第一弾。



共催:

東京大学 ソーシャルICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム  
京都大学 デザイン学大学院連携プログラム



# 建築・都市デザイン国際ワークショップ

## -京都大学バンコクスタジオ-

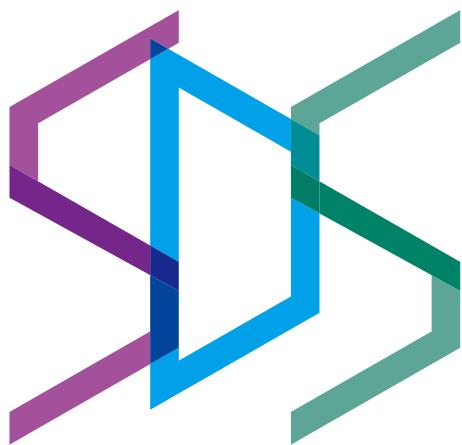


海外の大学と連携して、異文化圏の都市をフィールドとした新たな建築・都市デザインの可能性を探る国際共同ワークショップを連続的に開催する。本年度はアジアのメガシティの1つ、バンコクをケーススタディとして選び、キング・モンクート工科大学と協働で、急速に国際都市へと変容する現代のバンコクに都市再生と同時にその歴史を再確認する鍵となるプロジェクトを提案する。

日程：2013年9月13日～9月21日 場所：キング・モンクート工科大学 サテライトキャンパス

Kyoto University tutor :	King Mongkut's University tutor :	Guest international jury :
-Teruyuki Monnai -Waro Kishi -Kamonsin Chathurattaphol	-Waraluk Pansuwan -Michael Paripol Tangthrongchit -Ponlawat Buasri -Songsuda Adhibai -Seadhar Jirawattanatai	-Kim Young-sub, architect/professor, Sungkyunkwan University, Seoul -Raveevarn Choksombatchai, architect/professor, UC Berkeley, U.S.A. ...adjusting new members.

主 催：京都大学デザイン学大学院連携プログラム  
共 催：京都大学大学院工学研究科建築学専攻、キング・モンクート工科大学



# SUMMER DESIGN SCHOOL

京都大学サマーデザインスクール 2013

2013 9/25-27

<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/summer-school2013/>



JOIN US.



「京都大学サマーデザインスクール」は、3日間集中のデザイン・ワークショップです。

今回で3回目の開催を迎えるとともに、本年4月に「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」が開始されてから初めてのサマーデザインスクールとなります。

ここで扱う「デザイン」とは、プロダクトデザインやグラフィックデザインばかりではなく、社会のシステムやアーキテクチャのデザインをも含みます。本スクールでは、様々な専門性を持つ受講者と講師陣がテーマに分かれ、社会の実問題に挑みます。

京都大学サマーデザインスクール2013で、今年の夏を締めくくりましょう。

開催期間 2013年 9/25(水) – 9/27(金)

場所 京都リサーチパーク

主催 京都大学デザイン学大学院連携プログラム  
京都大学大学院情報学研究科  
京都大学経営管理大学院

共催 京都市立芸術大学美術学部・美術研究科  
京都工芸織維大学工芸科学研究科  
京都大学大学院工学研究科  
京都大学大学院教育学研究科  
京都大学学術情報メディアセンター

参加費 無料

申込み方法 <http://www.design.kyoto-u.ac.jp/summer-school2013/>  
より申込みください

KYOTO  
UNIVERSITY  
DESIGN  
SCHOOL



Copyright © 2013 Kyoto University Summer Design School 2013 All Rights Reserved.

# Yahoo! JAPAN の名物イベント、プログラミングの祭典 Hack Dayが京都大学にやってくる!



あの「Hack Day」が、この秋、京都大学デザインスクールで「Hack U」として開催されます！

Yahoo! JAPAN のエキスパートおよび京大デザイン学の教員も協力しますので、  
プログラミングのスキルを持つ人も持たない人も、  
新しいアイデアを形にしていく経験を学ぶことができます。  
先着順ですので、早めのエントリーをお待ちしています！

※Hack Day: Yahoo! JAPAN において年2回開催されているハックイベント

## エントリー

[yhack\\_u\\_kyoto\\_2013@yahoo.co.jp](mailto:yhack_u_kyoto_2013@yahoo.co.jp)

に参加者の氏名と所属(工学部 M1XX 研究室、総合人間学部二回生など)を含めて、メールを送ってください。チーム参加を希望の場合はメンバー全員について記入してください。

期限: 2013年10月末予定

## 説明会

2013年11月9日(土) 京都リサーチパーク 9号館506

## 開発期間

2013年11月10日(日)-15日(金)

## 発表会

2013年11月16日(土) 京都リサーチパーク 9号館506



Web サイト公開中

[yhacks.jp/hacku/kyoto\\_u2013/](http://yhacks.jp/hacku/kyoto_u2013/)

**YAHOO!**  
JAPAN



International Symposium on  
Design Visions  
2014

<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/isdv2014/>

Spring Design School 2014  
**International Symposium on  
Design Visions**

**Dates:** March 15-16, 2014

**Place:** Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/en/clocktower>



**March 15th (Saturday)**

**11:00-12:30 Prologue**  
(Chair: Kumiko Nakakoji)

Welcome & Symposium Motivation: Projecting Design-Beings  
Kumiko Nakakoji (Kyoto University, Japan)

Speaker Introductions  
All Speakers

Keynote Address:  
Teruyuki Monnai (Kyoto University, Japan)

**12:30-14:00 Lunch**

**14:00-15:30 Topical Session 1: Driving Force**  
(Host: Kumiko Nakakoji)

Design Visions - Pulling You into the Future  
Pieter Jan Stappers (Delft University of Technology, The Netherlands)

Design Thinking and Computational Thinking  
Mark D. Gross (University of Colorado, Boulder, USA)

**15:30-16:00 Coffee Break**

**16:00-17:30 Topical Session 2: Humans and Systems**  
(Host: Gerhard Fischer)

Semiotics Design and Analysis of Human-Machine Systems  
Tetsuo Sawaragi (Kyoto University, Japan)

Human System Design and Integration: Designing for Meaning of Life  
Keiichi Sato (Illinois Institute of Technology, USA)

**18:00-20:00 Reception**  
(2,500JPY for participants, 1,500JPY for students)

**March 16th (Sunday)**

**10:00-11:30 Topical Session 3: Making, Building, and Constructing**  
(Host: Michael Terry)

Being CUTE - Creating Unique Technology for Everyone  
Ellen Yi-Luen Do (National University of Singapore, Singapore)

When Design Becomes Too Complex  
André van der Hoek (University of California, Irvine, USA)

**11:30-13:00 Lunch**

**13:00-14:30 Topical Session 4: Societal Tensions**  
(Host: Mark Gross)

Design Freedoms  
Michael Terry (University of Waterloo, Canada)

"Quality of Life": A Design Vision for Socio-Technical Environments of the Future  
Gerhard Fischer (University of Colorado, Boulder, USA)

**14:30-15:00 Coffee Break**

**15:00-16:30 Design Visions Discussions**  
(Chair: Kumiko Nakakoji)

All Participants

**16:30-16:45 Closing Remarks**

Organized by Collaborative Graduate Program in Design, Kyoto University



京都大学デザインスクール 主催  
スプリングデザインスクール

# デジタル デザイン

## FABRICATION × INTERACTION

# ワークショップ

2014年3月15日～17日 毎日 9:00～18:00

場所：吉田デザインファブリケーション拠点

2つのテーマの両方でも、片方だけでも参加可能！

**DAY1&2 Digital Fabrication & SF**

**2日間でゼロから映画をつくろう** 定員 20名

映像は身近で優れた情報伝達手段ですが、情報を正しく伝える映像を作成するのは容易ではありません。たとえば映画の撮影には、小道具、大道具、衣装や電子機器といったものづくりと、台本作成やカット割り、画面構成などの情報デザインの技法が必要になります。

「Digital Fabrication & SF ワークショップ」では、実際に参加者が短編映画をゼロから作成することで、デジタル時代のものづくりと情報のデザインについて体感し、学ぶことができます。参加者は2日間のチームワークで、星新一の短編SF小説をもとに5分間の映画を撮影します。撮影に用いる小道具などの舞台美術類、台本や絵コンテなどは、すべてその場で自分たちで作成します。

講師：大島 裕明、水野 大二郎  
(京都大学デザインスクール、情報学研究科)

**DAY3 AR. Drone Contest**

**ヘリコプターを意のままに操ろう** 定員 20名

プログラムは計算機の中だけのものではありません。例えばAmazonは、無人ヘリコプターによる商品輸送を開始しようとしています。本ワークショップでは、多彩なセンサを備えたヘリコプター AR. Drone を題材に、自動制御や画像処理といった、最先端の情報技術に触れ、未来の社会を動かす情報技術について体感することができます。

「AR. Drone コンテスト」では、参加者がチームを組み、決められたコースを「速く」そして「正確に」飛ぶためのプログラミングを行います。チームでの戦略決定、実装、評価を繰り返すことで、デジタルと実世界のインターラクションについて体験しながら学ぶことができます。

講師：佐藤 高史、大島 裕明、Christian Nitschke、廣本 正之、南 裕樹  
(京都大学デザインスクール、情報学研究科)

**申し込み** <http://www.dl.kuis.kyoto-u.ac.jp/ddws/>

問合せ先：ddws@design.kyoto-u.ac.jp

つくってかんがえるワークショップ

## わたしに似合った 自転車ヘルメット



自転車の安全とは何かを一緒に考えてみませんか？

本ワークショップでは、自転車の安全のシンボルとしてヘルメットに注目。

ヘルメットをデザインし直し、新たにつくりながら自転車の安全を考えます。

運転者自身の安全に留まらず、まちづくりの視点からも自転車のありようを考えるために、  
具体的なニーズ把握、コンセプト作り、プロトタイピングの作成までを実施します。

活動を通して、デザイン思考とデザイン実践を体験的に学んでみましょう。

**2014年3月21日(金・祝)ー23日(日)**

**京都大学工学部研究実験棟151室**

**吉田デザインファブリケーション拠点** (吉田構内)

<http://www.design.kyoto-u.ac.jp>

**対象** デザインスクール本科生、本学または他大学の学生・大学院生、興味のある一般の方

**定員** 10名

**費用** 無料(要事前申込)

**申込方法** 氏名、所属、メールアドレス、日中に連絡のとれる電話番号を問合せ先メールアドレスに送付  
いだくかGoogleフォームに記入ください。なお、所属として、会社・部課の名称、または大学・  
学部・学科か研究科・専攻の名称と学年をお知らせください。**締切:3月7日(金)**  
Google フォーム <http://goo.gl/y981hG>



**問合せ先** E-mail : helmet-ws@ipe.media.kyoto-u.ac.jp(担当／森)

スケジュール(予定)	1日目 (3月21日)	9:00～	オリエンテーション(テーマ説明、ミニワークによるチェックイン) 講演(自転車のおかれている社会状況)
		13:00～(18:00終了予定)	講演(ヘルメットの製造、販売に関する基礎と事例紹介) フィールドワーク(諸注意事項の説明) フィールドワーク(会場近辺の自転車状況を観察) コンセプトメイキング
	2日目 (3月22日)	9:00～	講演(プロダクトデザイン) / アイディアスケッチ
		13:00～(18:00終了予定)	クイックプロトタイピング
	3日目 (3月23日)	9:00～	クイックプロトタイピングの続き / プрезентーション準備
		13:00～(18:00終了予定)	プレゼンテーション

企画運営:森幹彦(京都大学大学術情報メディアセンター)、角南健夫(有限会社TSDESIGN)

主催:京都大学デザイン学大学院連携プログラム

協力:諏訪サイクルプロジェクト(スクワル)、京都市未来まちづくり100人委員会 チーム14「自転車と共存するまち京都」



## 付録 2 報道

### (1) 新聞

1. 「分野越え解決策 “デザイン” 京大が育成プログラム 4月開講 産学連携や海外研修」京都新聞 朝刊 25面（社会3面）, 2013.1.16.
2. 「社会問題解決へ 京大に新課程」朝日新聞 朝刊 33面, 2013.1.16.
3. 「京大人材育成へ デザイン学大学院連携プログラム」産経新聞 朝刊 25面, 2013.2.26.
4. 「社会問題 解決法をデザイン」毎日新聞 21面, 2013.7.30.
5. 「産官学の中間組織を設置 デザイン学の人材を育成」京都大学新聞, 2014.3.16.

### (2) その他

1. 「博士課程教育リーディングプログラム『デザイン学大学院連携プログラム』が始動」京大広報 5月 No. 688, p.3904, 2013.4.
2. 「デザインイノベーション拠点 KRP 9号館に開設」KRP-PRESS vol.130, pp.1-5, 2013.5.
3. 「KRP 地区内で 3D プリンターを活用する機関・団体」KRP-PRESS vol.133, p7, 2013.11.
4. 「サマーデザインスクール 2013」KRP-PRESS vol.133, p8, 2013.11.
5. 「京都大学デザインイノベーション拠点－異なる立場・領域に属する多くの関係主体のコラボレーションによる人材育成を目指す」国立大学等の特色ある施設 2013, pp.9-11, 文部科学省大臣官房文教施設部施設企画課, 2014.3.

### 付録3 講演・出版

#### (1) 教育活動に関わる講演（抜粋）

##### (i) デザイン学主催イベントでの講演

1. 石田亨, 京都大学デザインスクールが目指すもの, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
2. 子安増生, 認知と行動のデザイン : 心理学からのアプローチ, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
3. 楠木哲夫, デザイン学が切り拓く産官共同での国際連携, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
4. 西田豊明, インタラクション・ゲーム・デザイン, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
5. 松井啓之, デザイン学の未来 : デザインスクールの自立へ向けて, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
6. 門内輝行, 人間－環境系のデザインの考え方と拠点のデザイン, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
7. 山内裕, Designful? デザインスクールの目指すデザイン性とは, 第一回産学デザインシンポジウム, 京都リサーチパーク, 2013.1.21.
8. Toru Ishida, Overall Program Structure, International Design Symposium in Kyoto 2013, 京都リサーチパーク, 2013.3.15.
9. Hiroyuki Matsui, Academia, Governmental and Industry Partnerships, International Design Symposium in Kyoto 2013, 京都リサーチパーク, 2013.3.15.
10. Teruyuki Monnai, Design Innovation Center, International Design Symposium in Kyoto 2013, 京都リサーチパーク, 2013.3.15.
11. Satoru Saito, Interdisciplinary Collaboration from Psychological Perspectives International Design Symposium in Kyoto 2013, 京都リサーチパーク, 2013.3.15.
12. Tetsuo Sawaragi, Overviews of Collaborative Graduate program in Design, Kyoto University: International Partnerships, International Design Symposium in Kyoto 2013, 京都リサーチパーク, 2013.3.15.
13. 石田亨, デザインイノベーションコンソーシアムの設立について, 第二回産学デザインシンポジウム京都リサーチパーク, 2013.9.26.
14. 黒橋禎夫, 京都大学における言語音声情報処理の産学連携, 第二回産学デザインシンポジウム京都リサーチパーク, 2013.9.26.
15. 楠木哲夫, 機械工学群における産学での組織連携による教育研究, 第二回産学デザインシンポジウム京都リサーチパーク, 2013.9.26.
16. 松井啓之, 経営管理大学院における産官学連携教育, 第二回産学デザインシンポジウム京都リサーチパーク, 2013.9.26.
17. Teruyuki Monnai, A Design Vision for Knowledge Society from the Viewpoint of Semiotics, International Symposium on Design Visions 2014 (ISDV2014), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, March 15-16, 2014.
18. Kumiyo Nakakoji, Symposium Motivation: Projecting Design-Beings, International Symposium on Design Visions 2014 (ISDV2014), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto

- University, 2014.3.15-16.
19. Tetsuo Sawaragi, Semiotics Design and Analysis of Human-Machine Systems, International Symposium on Design Visions 2014 (ISDV2014), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2014.3.15-16.

(ii) その他の講演

1. Toru Ishida, Bringing Informatics to Design. International Conference on Semantics, Knowledge and Grid, (SKG-12), Beijing, keynote talk, 2012.10.22.
2. 楠木哲夫, Semiotic Design and Introduction of Collaborative Graduate Program in Design of Kyoto University, Pre-Workshop Seminar of IWFM 2012, Technical University of Denmark, Copenhagen, Denmark, 2012.11.5.
3. 楠木哲夫, Design of Human Robotics Systems, the second Bristol-Kyoto Symposium, University of Bristol, UK, 2013.1.10.
4. 石田亨, 京都大学デザインスクール: Science-Engineering-Design の循環を目指して, 日本学術会議公開シンポジウム「ICT を生かした社会デザインと人材育成(実践編)」, 2013.11.27.
5. Suzuki, S. and Takemura, K., The Role of Communication Styles in the Customer Selection Process: The Case of Train versus Traditional Sushi Bars, 2013 Frontiers in Service Conference, Taipei, Taiwan, 2013.7.4-7.
6. Takahashi, Y. & Brent W. Roberts. Mean-level changes in big five personality traits: Evidence from Japan. 121st APA Annual Convention, Honolulu, USA, 2013.7.31-8.4.
7. 石川敦雄, 杉本匡史, 栗田季佳, 西田恵, 坂口武司, 鍋谷めぐみ, 楠見孝, 学習を促進する建築デザインの研究:主観評価と認知課題成績の関係, 2013 年度日本建築学会大会, 北海道大学, 2013.9.1.
8. 高橋雄介, 宮崎慧, パーソナリティ特性と抑うつの関連に関する潜在クラス分析, 日本心理学会第 77 回大会, 北海道医療大学, 2013.9.19.-9.21.
9. 北雄介, 100 人でつくる京都地図 一歩く・つぶやく・地図になる-, KRP ワンコインランチ, 京都リサーチパーク タトラー, 2013.10.9.
10. 鈴木智子, 竹村幸祐, ブランド評価に対する文化の影響に関する考察: ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの事例から, 第 47 回消費者行動研究コンファレンス, 法政大学, 2013.10.26.
11. 富田直秀「医療のデザイン」, 日本機械学会関西支部第 14 回秋季技術交流フォーラム, 大阪大学吹田キャンパスコンベンションセンター (大阪府吹田市), パラレルセッション (懇話会), 2013.10.26.
12. 中小路久美代, Museum Experiences and Collective Creativity, Activating Inspiration and Creativity, Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science and Technology, 福武ホール, 2013.11.10.
13. Kumiyo Nakakoji, Takeshi Okada, Kyo Kageura, Yasuhiro Yamamoto, Hironobu Shindo, Katsuya Orimo, Daichi Shimizu, Ken-ichi Kimura, & Toshio Kawashima, The Museum Experiences and Service Science Project: A Probe-based Field-Oriented Approach toward Inspirational Services, Poster Presentation, Activating Inspiration and Creativity, Tokyo International Symposium for Informal Learning in Art, Science and Technology, Tokyo,

- Japan, 2013.11.
14. 黒田知宏, それって「電子カルテ」ですか?, 医学会総会 ISOUKAIx, 神戸ファンションマート, 2013.11.20.
  15. 山内裕, 京都大学デザインスクールの最新サービスデザインプロジェクト, 第6回サービス・イノベーション国際シンポジウム, 芝蘭会館 稲盛ホール, 2013.11.29.
  16. Teruyuki Monnai: Urban Sustainability from Perspectives of Japanese Lens, The 2013 RENKEI Researcher Development School in Bristol and Kyoto, 2013.12.2.
  17. 荒牧英治, 北雄介, 仲村哲明, 久保圭, 島本裕美子, 白田泰如, 宮部真衣, 100人マップ: 100人で作る京都地図, 第5回集合知シンポジウム, 東京, 2013.12.4.
  18. 北雄介, 宮部真衣, 荒牧英治, 集合知による街の感じ方の地図のデザイン－街歩きイベント「100人でつくる京都地図」を通じて－, 日本都市計画学会 都市計画報告集, 2013.
  19. 荒牧 英治, キャリアパス・産官学連携・インターンシップ: キャリアパス確立のための産官学連携の試み, 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2013, ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター, 大阪, 2014.1.10-11.
  20. 十河卓司, 新しい教育方法の展開・リーダーシップ教育:PBL型の授業開発やリーダー育成のための教育カリキュラム開発等, 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2013, ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター, 大阪, 2014.1.10-11.
  21. 林康裕「近年の被害地震と建物の耐震化」, 東京都 2014 耐震キャンペーン耐震フォーラム, 東京都庁第一本庁舎 5階 大会議場, 東京都, 2014.1.21.
  22. 門内輝行: デザイン学をめぐる国際的動向と京都大学デザインスクールの試み, 関西工学教育協会第87回研究集会, 2014.3.11.
  23. 黒田知宏, 昔の未来は今も未来 病院は体内へ、医療は日常へ、医療の未来像と技術への期待, 日経デジタルヘルス・サミット, JA 共済ビル カンファレンスホール(東京), 2014.3.18.
  24. 十河卓司, 京都大学デザイン学大学院連携プログラム(京都大学デザインスクール), イノベーション教育学会 第1回年次大会, 東京大学 弥生キャンパス, 2013.3.21-22.

## (2) 教育活動に関する出版（抜粋）

1. 石田亨, Bringing Informatics to Design, Designシンポジウム 2012, pp.99-102, 2012.10.16.
2. 楠見孝, 心理学とサイエンスコミュニケーション, 日本サイエンスコミュニケーション協会誌, Vol. 2, No.1, pp.66-80, 2013.1.
3. 鈴木智子, イノベーションの普及と正当化. 繊維製品消費科学, vol. 54, No.4, pp.13-19, 2013.4.
4. 鈴木智子, "サービス"は日本を加速させるか:『モノ』から『コト』～マインドセットの転換. BUAISO.net Special, BUAISO No.7, pp.10-15, 2013.7.
5. Toyoaki Nishida: Toward mutual dependency between empathy and technology. AI Soc. Vol. 2, No. 3, pp. 277-287, 2013.8.
6. 北雄介, 宮部真衣, 荒牧英治, 集合知による街の感じ方の地図のデザイン－街歩きイベント「100人でつくる京都地図」を通じて－, 都市計画報告集, No.12, pp.54-60, 2013.9.

7. K. Nakakoji, Y. Yamamoto, Conjectures on How Designers Interact with Representations in the Early Stages of Software Design, in Software Designers in Action: A Human-Centric Look at Design Work, M. Petre, A. van der Hoek (Eds.), Chapman & Hall, 2013.10.1.
8. 門内輝行: 建築に携わるものに求められることー拡大するデザインの世界への対応ー, 建築と社会, 1099 号, pp.8-11, 2013.10.
9. 宮部真衣, 北雄介, 久保圭, 荒牧英治, 街歩きで作り出す都市の様相地図ー位置情報付きの様相記録収集の取り組みー, 情報処理学会, グループウェアとネットワークサービスワークショップ 2013 (GN Workshop 2013) 論文集, pp.1-8, 2013.11.
10. 荒牧 英治, 増川 佐知子, 宮部 真衣, 森田 瑞樹: 患者と医師が使う言葉の違い ~ 闘病記の医学的な応用に向けて~, 人工知能学会特集号 Vol.28, No.6, 2013.11.
11. 堀口由貴男, 石神孝容, 中西弘明, 楠木哲夫, メニューインターフェース評価のための情報香モデルの比較, 計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会 2013 講演論文集, pp.271-274, 2013.11.
12. 高橋雄介, 気質とパーソナリティ, 日本パーソナリティ心理学会企画, パーソナリティ心理学ハンドブック, 第3章第2節, pp.78-84, 福村出版, 2013.
13. Takahashi, Y., Edmonds, G. W., Jackson, J. J., & Roberts, B. W., Longitudinal correlated changes in conscientiousness, preventative health-related behaviors, and self-perceived physical health. *Journal of Personality*, 81, pp.417-427. doi: 10.1111/jopy.12007, 2013.
14. Yukio Horiguchi, Catherine M. Burns, Hiroaki Nakanishi, and Tetsuo Sawaragi: Visualization of Control Structure in Human-Automation System Based on Cognitive Work Analysis, Proceedings of the 12th IFAC/IFIP/IFORS/IEA Symposium on Analysis, Design, and Evaluation of Human-Machine Systems, WAT3.3, Las Vegas, US , 2013.
15. 林春男, 第9回ワークショップ「災害を観る」, 京都大学防災研究所 巨大災害研究センター, 2014.2.
16. “ANSHIN”デザインプロジェクト, 日本機械学会誌 Vol.117, No.1144, p.180, 2014.3.
17. 鈴木真理子, 楠見孝, 都築章子, 鳩野逸生, 松下佳代(編著), 科学リテラシーを育むサイエンス・コミュニケーション:学校と社会をつなぐ教育のデザイン, 北大路書房, 2014.

## 付録4 海外の教育・研究機関との交流実績

各項目の海外へのならびに海外からの出張旅費が本リーディングプログラムの事業経費からの支出によるものに限定せず、デザイン学に関する交流実績分を挙げている。なお各項目の括弧内はデザイン学関係教員の対応者を示す。

### (1) 海外の教育・研究機関の訪問

#### 2012年

May 14, Aalto University (Finland) (榎木, 太田)

- Prof. Hannu Seristö, Vice President, Knowledge Networks
- Prof. Esa Santamaki, Chief of Spatial Design, Design Factory
- Dr. Paivi Hovi-Wasastjerna, Dr.Arts, Research Director, School of Arts, Design and Architecture
- Dr. Juhani Tenhunen, Manager of Media Factory

May 16, University of Bristol (UK) (榎木, 太田)

- Research Professor and Vice Reactor Prof. Guy Orpen
- Prof. Joe McGeehan, University of Bristol, Director, Centre for Communication Research,
- Prof. Mark Beach, University of Bristol, CDT Communications
- Prof. Stuart Burgess, University of Bristol, Interdisciplinary Degree Programme in Engineering Design
- Prof. Nishan Canagarajah, Dean of the Faculty of Engineering
- Prof. David P. Stoten, Dept. of Mechanical Eng., Director, Advanced Control and Test Lab.
- Prof. Chris Melhuish, Director, Bristol Robotics Lab.
- Prof. Ian Cradock, Toshiba's Telecommunications and Professor, University of Bristol
- Prof. Sally Heslop, Academic Director of Graduate Studies, Faculty of Eng.

May 17, University College London (UCL) (榎木, 太田)

- Prof. Christine Hawley, CBE, Bartlett School of Architecture
- Dr. Duncan Brumby, Senior Lecturer in Human-Computer Interaction, Computer Science, UCL Interaction Centre (UCLIC)
- Dr. Paul Marshall, Lecturer in Interaction Design, UCL Interaction Centre (UCLIC)
- Prof. Edward Allington, Head of Graduate Sculpture and current Director of Graduate Studies, Slade School of Fine Art
- Prof. Susan Collins, Director, Slade School of Fine Art
- Prof. Nick Tyler CBE, Chardwick Professor of Civil Eng., and Pro-Provost for South and South-East Asia

May 18, Royal College of Art (RCA) (榎木)

- Prof. Naren Barfield, 国際・アカデミック担当副学長

Oct. 30, Harvard University, Graduate School of Design (GSD) (USA) (石田, 松井, 黒橋)

- Martin Bechthold 教授

Oct. 30, MIT D-Lab (Development through Dialogue, Design & Dissemination) (USA)

(石田, 松井, 黒橋)

- Dr. Victor Grau Serrat

- Oct. 31, University of Michigan, The Design Science PhD Program (USA)  
(石田, 槙木, 松井, 黒橋)
- Prof. Richard Gonzalez, Director, The Design Science PhD Program, Professor and Department Chair, Psychology
  - Prof. Panos Papalambros, Professor, Mechanical Engineering
- Nov. 2, Stanford University, d.school (USA) (石田, 槙木, 松井, 黒橋)
- Prof. Bernie Roth, Director of d.school, Dept. of Mechanical Engineering
- Nov. 2, IDEO (USA)
- Dr. Barry Katz, Consulting Professor, Dept. of Mechanical Engineering, Stanford University
- Nov. 5, Technical University of Denmark (Denmark) (槙木)
- Prof. Emeritus Morten Lind
  - Dr. Tania Groth, Dept. of Automation and Control
  - Dr. Xinxin Zhang, Dept. of Automation and Control
  - Dr. Kai Heussen, Dept. of Automation and Control

## 2013 年

- Jan. 10-11, University of Bristol (UK) (the first Bristol-Kyoto Symposium)  
(槙木, 中村, 小森, 松野, 藤本)
- July 1, University of Bristol (UK) (RENKEI School) (槙木)
- Sir Eric Thomas, Vice-Chancellor
  - Prof. Guy Orpen, Deputy Vice-Chancellor, University of Bristol
- July 4, Cardiff University (UK) (槙木)
- Prof. Rossi Setchi, Director, Mechanics, Materials and Advanced Manufacturing Leader of High-Value Manufacturing and Knowledge Engineering Systems (KES) Groups
- Aug. 19-20, Aalto University (Finland) (松井, 中小路, 十河, 北, 角川)
- Dr. Kari-Hans Kommonen (Media Lab., Dept. of Media)
- Aug. 23, Eindhoven University of Technology (Netherlands) (松井, 中小路, 十河, 北, 角川)
- Assoc. Prof. Oscar Tomico, Dept. of Industrial Design
- Aug. 26-27, Delft University of Technology (Netherlands) (松井, 中小路, 十河, 北, 角川)
- Prof. P.J. Stappers, Director of Graduate School, Faculty of Industrial Design Engineering
- Oct. 28, Delft University of Technology (TU Delft) (Netherlands)  
(石田, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)
- Prof. Ena Voûte, Dean, Faculty of Industrial Design Engineering
  - Prof. Paul Hekkert, Faculty of Industrial Design Engineering
  - Prof. Jan Schoormans, Faculty of Industrial Design Engineering
  - Prof. P.J. Stappers, Director of Graduate School, Faculty of Industrial Design Engineering
  - Prof. Elisa Giaccardi, Faculty of Industrial Design Engineering
- Oct. 28, Newcastle University (UK) (槙木)
- Dr. Robin Humphrey, Director of the Postgraduate Research Training Programme
  - Prof. Ella Ritchie, Deputy Vice-Chancellor
  - Prof. Charles Harvey, Pro-Vice-Chancellor and Provost

- Prof. Peter Stone Obe, Head of School of Arts and Cultures
- Prof. Neill marshall, Dean of Postgraduate Studies, Faculty of Humanities and Social Sciences
- Prof. Simin Davoudi, School of Architecture, Planning and Landscape

Oct. 29, Royal College of Art (RCA) (石田, 槿木, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)

- Prof. Naren Barfiel, Pro-Rector
- Prof. Dale Harrow, Dean of School of Design
- Ms. Savina Torrisi, Tutor, Innovation Design Eng.
- Ms. Carolyn Runcie, Programme Manager and Tutor on the Service Design programme

Oct. 30, Imperial College London (ICL) (UK)

(石田, 槿木, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)

- Dr. Dvavid S. McPhail, Deputy Director of the Imperial College Graduate School
- Prof. Peter RN Childs, Course Director of Innovation Design Engineering
- Mr. Prisca Merz, International Relation Officer
- Dr. Dominic Southgate, Sports Bioengineering Teaching and Research Fellow

Oct. 31, Copenhagen Business School (CBS) (Denmark)

(石田, 槿木, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)

- Dorte Salskov-Iversen, Head of Department of Intercultural Communication and Management
- Barbara Louise Bech, Department of Intercultural Communication and Management
- Dr. Alex Klinge, Head of Department of International Business Communication
- Enno Hofeldt, Head of Administration, Department of International Business Communication
- Dr. Fumiko Kano Gluckstad, Asso. Prof. of Department of International Business Communication
- Prof. Paul du Gay
- Prof. Dr. Soren Brier, Center for Language, Cognition and Mentality

Nov. 1, Mindlab (Denmark) (石田, 槿木, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)

- Kit Lykketoft, Deputy director

Nov. 1, Technical University of Denmark (DTU) (Denmark)

(石田, 槿木, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)

- Prof. Martin P. Bendsøe, Senior Vice President and Dean
- Prof. Birte Holst Jørgensen, Management Engineering
- Prof. M. H. Faber, Head of Department of Civil Engineering
- Prof. Per Goltermann, Department of Civil Engineering
- Prof. Helle Rootzén, DTU COMPUTE Department of Applied Mathematics and Computer Science
- Jørgen Kejlberg, Team Lead, Entrepreneurship and Business Cooperation
- Niels Grolin, Innovation and Sector Service
- Prof. Morten Overgaard, Head of International Affairs
- Assoc. Prof. Pernille Benngtsen, Department of Civil Engineering

Nov. 1, University of Copenhagen, Department of Computer Science (Denmark)

(石田, 子安, 門内, 中小路, 十河, 伊沢)

- Troels Mønsted, Postdoc

Dec.19, Olin College of Engineering (USA)

(榎木, 淡路理事, 中村学際融合教育研究推進センター長, 北野高等教育院長)

- Prof. Richard K. Miller, President
- Prof. Vincent P. Manno, Provost and Dean of Faculty
- Prof. Stephen Hannabury, Executive Vice President and Treasurer
- Assoc. Prof. Caitrin Lynch, Olin College of Engineering
- Dr. Lynn Andrea Stein, Professor of Computer and Cognitive Science and Director of the Initiative for Innovation in Engineering Education
- Dr. Mark Somerville, Associate Dean for Faculty Affairs and Develop.
- Dr. Jessica Townsend, Associate Dean for Curriculum and Academic Programs

## 2014 年

Jan. 8-9, 2nd Kyoto-Bristol Symposium 2014 (榎木, 松野, 中村, 小森, 藤本)

- Dr. Walterio Mayol-Cuevas, Deputy Director (UoB) BRL
- Dr. Walterio Mayol-Cuevas, Computer Science Department
- Dr. Majid Mirmehdi, Bristol Robotics Laboratory
- Dr. Jonathan Rossiter, Bristol Robotics Laboratory
- Prof. David Stoten, Department of Mechanical Engineering Head, Advanced Control & Test Laboratory (ACTLab)

### (2) 海外からのデザインイノベーション拠点等への訪問

## 2013 年

Mar. 15-16, International Design Symposium in Kyoto (IDS Kyoto 2013)

- Prof. Martin Bechthold, Graduate School of Design (GSD), Harvard University, USA
- Prof. Pekka Korvenmaa, Aalto University, Finland
- Prof. Lily Diaz-Kommonen, Aalto University, Finland
- Prof. David C. Plaut, Carnegie Mellon University, USA
- Dr. Yuanchun Shi, Tsinghua University, China
- Dr. Paul Marshall, University College of London, UK.
- Ms. Kerry O'Connor, Stanford University, USA
- Dr. Alison Leggett, University of Bristol, UK
- Dr. Robin Humphrey, Newcastle University, UK
- Jane Nolan MBE, Newcastle University, UK

Mar. 25, Prof. Burns (University of Waterloo) (榎木)

Jun. 12, University of Michigan, Michigan Prof. Dennis Sylvester (USA) (佐藤, 榎木)

Aug. 3-10, 京都大学デザインフォーラム (中小路)

- Ellen Yi-Luen Do, Director, Keio-NUS CUTE Center/Visiting Research Professor, Interactive & Digital Media Institute/Professor, National University of Singapore

Sep. 5, Kari-Hans Kommonen, Director, School of Arts, Design and Architecture, Aalto University

Sep. 12, デザインフォーラム (山内)

- Anne Mieke Eggenkamp, Former director, Design Academy Eindhoven

Sep. 26, 産学デザインシンポジウム (石田)

- Walter Bender, Senior Research Scientist, MIT Media Laboratory (Sugar Labs 創設者/MIT Media Laboratory 元所長)

Nov. 4 -11, デザインフォーラム (中小路)

- Elisa Giaccardi, Professor, Interactive Media, Department of Industrial Design Engineering, Delft University of Technology

Dec.11, RENKEI Core Meeting (UK) (楳木)

- Prof. Guy Orpen, Deputy Vice-Chancellor, University of Bristol
- Prof. Ella Ritchie, Deputy Vice-Chancellor of Newcastle University
- Prof. Mark Spearing, Pro Vice-Chancellor, University of Southampton
- Dr. Andrew Hirst, International Programme Manager, Funding Development Team, Research and Innovation Services, University of Leeds
- Prof. Stephen Holloway, Pro-Vice Chancellor, University of Liverpool
- Prof. Nick Tyler, Pro-Provost for South and South-East Asia, University College London (UCL)

## 2014 年

Jan. 9-10, University of Bristol (UK) (the second Bristol-Kyoto Symposium)

(楳木, 中村, 小森, 松野, 藤本)

Jan. 17, デザインフォーラム (中小路)

- Cynthia Anne Angela Roos, Research Associate, Design Academy Eindhoven/Creative Industry Scientific Program
- Danielle Arets, Associate Reader, Design Academy Eindhoven/Creative Industry Scientific Program

Jan. 20-21, Copenhagen Business School (CBS) - Kyoto University (KU) Symposium on Designing Multicultural Creative Environment (石田, 子安, 楠木ほか)

- Prof. Alex Klinge, Head of Department, Dept. of International Business Communication, CBS (Denmark)
- Prof. Fumiko Kano, Dept. of International Business Communication, CBS
- Prof. Bjarne Ørsnes, Dept. of International Business Communication, CBS
- Mr. Enno Hofeldt, Head of Administration, Dept. of International Business Communication, CBS
- Prof. Maribel Blasco, Dept. of International Language Studies and Computational Linguistics, CBS

March 15-16, International Symposium on Design Visions 2014

- Prof. Ellen Yi-Luen Do, National University of Singapore, Singapore
- Prof. Gerhard Fischer, University of Colorado, Boulder, USA
- Prof. Mark D. Gross, University of Colorado, Boulder, USA
- Prof. Andre van der Hoek, University of California, Irvine, USA
- Charles Owen Professor, Keiichi Sato, Illinois Institute of Technology, USA

- Prof. Pieter Jan Stappers, Delft University of Technology, The Netherlands
- Assoc. Prof. Michael Terry, University of Waterloo, Canada

## 執筆担当者

石田 亨	プログラムコーディネータ／情報学研究科 社会情報学専攻・教授
門内 輝行	工学研究科 建築学専攻・教授
榎木 哲夫	工学研究科 機械理工学専攻・教授
黒橋 稔夫	情報学研究科 知能情報学専攻・教授
田中 克己	情報学研究科 社会情報学専攻・教授
守屋 和幸	情報学研究科 社会情報学専攻・教授
太田 快人	情報学研究科 数理工学専攻・教授
佐藤 高史	情報学研究科 通信情報システム専攻・教授
大島 裕明	情報学研究科 社会情報学専攻／情報教育推進センター・特定准教授
楠見 孝	教育学研究科 教育科学専攻・教授
高橋 雄介	教育学研究科 教育科学専攻・特定助教
松井 啓之	経営管理大学院・教授
山内 裕	経営管理大学院・講師
中小路 久美代	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定教授
川上 浩司	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定教授
十河 卓司	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定准教授
荒牧 英治	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定准教授
村上 陽平	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定准教授
伊沢 好広	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特任准教授
北 雄介	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定助教
久保田 庸子	学際融合教育研究推進センター デザイン学ユニット・特定職員

博士課程教育リーディングプログラム  
京都大学デザイン学大学院連携プログラム  
活動報告書（平成 24・25 年度）

発行日 平成 26 年 11 月

発行者 京都大学デザイン学大学院連携プログラム  
contact@design.kyoto-u.ac.jp  
<http://www.design.kyoto-u.ac.jp>



京都大学  
KYOTO UNIVERSITY